

所感・報告**教員過剰考察**飯塚 郁未
Ikumi IIZUKA**はじめに**

この文章を執筆しはじめた2024年12月1日現在、私は毎日の仕事と生活に追われている。教員の仕事は本当に多岐にわたる。仕事ができる人間は決して「自分は忙しい」などと弱音を吐かないことを理解しながら、3年生の担当となってからは呼吸をするように「忙しい」と口にしてしまうようになった。学級担任、英語科、進路指導部、情報処理部、学習対策、陸上部と英語部…こんな若輩者の私でさえ、いくつもの顔を持ちあわせている（先輩方はこの比ではない仕事量をこなしている。凄すぎます）。進路や日常生活についての面談、指定校や公募・総合型入試の面接練習、生徒が持参してきた英作文の添削、冬期講習の教材作成、進路シラバスやガイドラインの修正、受験スケジュールチェックと出願検討、成績計算処理と会議資料作成、共通テストプレ実施準備、休日のクラブ遠征引率など、現在同時並行している仕事は枚挙にいとまがない。これらすべての分野において秀でた能力を持ち合わせているわけもなく、奇跡的に生まれつき備わっていた要領の良さと周囲の先生方のサポートを頼りに毎日を切り抜けている。そのくせ、すぐにカッコつけて仕事を引き受ける癖がたり、各所の仕事を納期のギリギリに片付けている様子は、さながら八方「不」美人とでも言えよう。ただ、どれも本当にやり甲斐のある仕事であり、納得して取り組んでいることだ。労働の対価としてお金をもらっている以上、手を抜くことは許されない。加えて、殊更ワガママである私は「公私共に充実した大人になりたい」という社会人1年目に抱いた憧れを未だ捨てきれずにいる。週末には一定の時間を趣味に割り当てたいし、奥さんや友人と過ごす時間も犠牲にはできない。その結果、周囲の人に心配されるほどのカフェインジャンキーになってしまった。普通の人なら注意されたところで反省するのであろうが、私は1日のカフェイン摂取量に関する論文を調べ、自分の摂取量なら問題ないという確証を得ているので、心配してくれた人にむしろ上から講釈を垂れる天邪鬼だ。自宅ではAmazonで箱買いした段ボール、職場では食堂と自習室に設置された自販機と青年館のファミリーマート。どこに、どんな味が、いくらで売っているのか、エナジードリンクに関する情報はインストール済みだ。脳にプロ

グラムされているので、たとえ目を瞑ってもお目当ての「ブツ」を手に入れることができる。

最新型のチップを搭載した高性能のパソコンでさえ、複数のタブを開きながら同時並行で重たい作業を強いれば熱暴走を起こす。低スペックの機体となれば言うまでもない。マルチタスクによって私の小さな小さな脳内チップは悲鳴をあげ、強制シャットダウンしてしまった。「病は気から」を体現するかの如く、流行の影響をモロに受けて期末考査を前に風邪をひいてしまったのだ。欠勤した次の日にマスクを着用して現れた私を見て、心配してくれたクラスの生徒が龍角散やエナジードリンクをくれた。心温まるプレゼントなのか、あるいは「甘ったれていないで働け」というサインなのか。とある生徒からは、「試験中に巡回に来たときの顔が、限界教員だった」とイジられた。思えば、私はコロナウイルスの濃厚接触者に認定され、入学式から1週間近く欠席した病弱キャラであった。

あれから2年半が経ち、教員になると決めたときから憧れ続けた、「卒業生を送り出す」瞬間が刻一刻と迫っている。忙しい毎日の中で、私は自分の中に浮かぶ思考や感情を整理することに必死である。

人間の思考は複雑で繊細だ。ありとあらゆる言葉を使っても形容し難いような思考は、これまた複雑で繊細な感情と結びつく。その結果、自分の思考や感情に対する言語化能力が追いつかず、現代の日本人、特に若者は「エモい」という曖昧極まりない語彙を手に入れた。どんなに処理能力に優れたAIでも、人間の思考と感情のすべてを完璧に言語化することはできないだろう。感動する、心に響く、胸が熱くなる、ほっこりして切なくなる…「エモい」は、忙しい我々にとっての現時点での最終兵器なのだ。

彼らへの最後の授業を終え、着々と卒業式へ近づいている今の心境を一言で語るのには難しく、強いて言うのであれば、めっちゃくちゃ「エモい」。しかし、これではあまりに抽象的である。もしも、私の中にある思考と感情を表す語彙が「エモい」しか思い浮かばなかったとしたらどうなってしまうだろうか。上述のように「エモい」は最終兵器であり、同時に「諸刃の剣」でもある。即時性がある一方で、思考や感情を縁取る際にはボヤけた輪郭となるので、書き手と読み手の認識がズレやすい。未来の自分や後輩達が「エモい」まみれの文章を目にした時には、「こいつは何を言ってるんだ」と、言われること請け合いである。現代文の試験問題の題材になったらどうなるだろうか。超高難易度の多義語である「エモい」に傍線を引いて意味を問う問題が出題されれば、多くの受験生は混乱し、選択肢を絞り切れない「悪問」として長きにわたり名を馳せるだろう。さながら仮定法の例文のような妄想を語るのはここまでにして、本題に移る。

中堅を名乗るには早く、若手と名乗るには年を取り過ぎている、28歳の「今」だからこそ、考え、感じ、書くことができる文章があるのではないか。そう考えていたとある日のこと、出勤した私が目にしたのは、まるでひと昔前のタウンページのような分厚い本であった。その本はひときわ異彩を放ちながら私のデスクに鎮座していた。そう、『外苑春秋』である。存

在自体は昔から気になっており、寄稿された文章を読むのは密やかな楽しみであった。ホームページに掲載されたバックナンバーにひと通り目を通したこともある。毎年冬の時期になると編集委員の方から執筆可否のアンケートが送られてくるのだが、その度に、大学の卒業論文に膨大な時間をかけた思い出が蘇ってくる。自ら研究トピックを選定し、先行研究の資料を読み漁り、調査を行い、データを分析して、独自の結論を出す。一定の「答え」と「攻略法」が存在する大学受験というゲームを乗り越えたは良いものの、その後は数字と漢字と絵柄の書いてある小さな四角い石を4人で触るゲームにばかり没頭し、アカデミックとは無縁の大学生活を送っていた私に、論文のような格式高い文章を書く能力が備わっている訳がなかった。アンケートに回答した「×」には、羨望と妬みの入り混じったような何とも言い難い感情がこもっていた。

しかし、先輩方の書いた文章たちを読んでいると、考えていることをできる限り細やかに文章に記したいという欲求は日に日に膨らんでいった。極めつけは、外苑春秋に掲載されていた(参考①)小西先生の150ページ以上にわたる海外研修の報告記である。英語科で最も年の近い先輩の「超大作」を目の当たりにし、私も思い切って寄稿することを決意した。かといって、これまで先輩方が書いてきた数々の偉大な作品のようなものは書けない。数多の本の書評や感想も、1年間のホームルーム実践記録も、英文学や英語教授法への深い知識と洞察も、長期の教員海外研修に行った経験も持ち合わせていない。ましてや、何もない所から哲学的な議論を始めて着地できるほどの力もない。自分は大好きな麻雀について語るくらいしかできない薄っぺらい人間であることを痛感させられることになり、人知れず落ち込んだ夜もあった。

しかし、こんな自分にも、トライアンドエラーを繰り返しながら継続して取り組んできたものがあると気付いたのだ。3年間執筆してきた「進路通信」と、この半年間取り組んだ「英検1級」への挑戦である。この2つを大きな切り口として、混沌とした私の頭の中を整理するために文章を書こうと思う。自分という人間と教員という仕事の関係性について、進路指導部と英語科の視点から考察し、言語化していきたい。

自分の努力や頑張りを誰かに見てもらいたいという承認欲求とスケベ心を否定することはできない。だがそれ以上に、備忘録的な意味合いと、これからも教員を続けていくであろう自分に発破をかけ、今後の人生とキャリアにつなげていきたいという気持ちが大きい。取るに足らない内容ではあるが、どうかお許し願いたい。

第一章 ひとりの人間として

1. 「漫才」と「ラジオ」

私はお笑いが好きである。テレビっ子だったこともあり、幼少期はバラエティ番組を特に好んだ。

お笑いといってもたくさん種類があるが、とりわけ漫才が好きだ。練りに練り上げたネタを「これでもか」というくらい突き詰めて練習するのに、本番ではその練習の痕跡を一切見せず、まるで「その場で」掛け合いを行っているように見せるプロの技に惹かれる。近年は漫才のフォーマットの多様化でさらにレベルが数段上がり、我々ファンを楽しませてくれる。1つのテーマに対して会話を展開する王道の「べしゃり型」、会話をしながら決められた設定に入っていき「漫才コント型」、強いボケやツッコミのフレーズをベースに展開する「大喜利型」、システムに沿って進む「システム型」、好き勝手に暴れ回ったり、アドリブやモノマネを挟むような「フリースタイル型」など、(※1) 様々な種類が存在する。芸人それぞれにお笑いへの譲れない哲学があり、その集大成をサンパチマイクを通して剥き出しにする。

M-1 グランプリを始めとした賞レースに臨む漫才師たちを見て、「自分も漫才をやってみよう」と思うのは、男の子なら誰も通る道であろう。大学生の時、仲の良かった友人と漫才コンビを組もうという話になった。大学生 M-1 グランプリに出場しようと、授業も聞かずに一心不乱に作った渾身のデビュー作、「合コン」というネタがある。2人の頭の中にある「面白い」をふんだんに詰め込んだ、最高傑作に思えた。しかし、出来上がった2分間のネタの内訳は1分40秒が下ネタで残り20秒は内輪ノリ。不毛な学生生活を極めし不埒な生き物を地獄の業火で煮詰めて出来上がった屈指の駄作であった。「誰がカウンターで合コンすんだよ！バーテンダーがカクテル振りながら参戦してきて男ひとり余るだろ！」という長尺ツッコミの練習をしているうちに私が耐え切れず、幻のコンビ(※2)「ショートニット」は、方向性の違いから解散となった。相方から友達に戻った記念に、2人で授業を休んで油そばを啜った日のことを今でも覚えている。自分のことなのに共感性羞恥を感じることができる珍しい経験だ。

社会人になり、最近、ラジオにハマっている。ハガキ職人のように筋金入りのお笑いオタクと自称できるほど詳しくないが、好きなコンビのラジオは欠かさず聞いている。ラジオの多くは深夜の放送であり、わざわざ夜更かしをしてまで放送を聴くような人は、「濾過」が完了された生粋のファンであることが多い。芸人たちも肩の力が抜けた状態で、コンビ間での何気ない会話や、リスナーとのラフな掛け合いを楽しむ。寸分の狂いもなく「計算」された漫才とは違い、ライブ感と即興力を楽しむラジオは、漫才とは違ったベクトルの笑いを提供してくれる。

2. 「考えること」を「口に出す」→「文章にする」

日頃から、頭の中であれこれ考えてしまうタイプである。そして、そのほとんどを脊髄反射で口に出してしまう。両親や妹からも、奥さんからも、友人からも、そして担任しているクラスの生徒からも、「男のくせにおしゃべりだね」と言われる。保護者会の後に実施したアンケートでは、「YouTuber みたい」「スーパーの店頭販売員みたい」「落語家みたい」と書いていただいた。保護者の方は大人なので、本音と建て前を使い分けていただいたようだ。だが、高校生はそれほど甘くない。授業アンケートでは、いつも「早口で追いつかない」「もう少しゆっくり喋って欲しい」と書かれる。極めつけは、2年間授業を担当したチャレンジクラスの生徒から、「もはや何を言っているのか分からないときがある」という、大変ありがたいご意見をいただいた。

私だって、好き勝手に何でもかんでも口に出そうとしているわけではない。いつも、大抵は口に出してから「またやってしまった」と思う。反省する度に見るのは決まって、スマホのメモ帳に残した、「沈黙は金、雄弁は銀」という格言。この画面にたどりつく度に悲しい気持ちになる。しかし、28年間積み重ねてきたこの悪癖は、すぐには治らない。せっかく頭の中で出てきた考えが「言葉」という枠組みを与えられたなら、それを何らかの形でアウトプットしないともったいないと思ってしまうのだ。

この文章を書いている最中、三省堂の辞書編集者達が「辞書に残すのに相応しい、新たに使用頻度が高まっている言葉」としてノミネートしている「今年の新語 2024」が発表され、大賞には「言語化」という言葉が選ばれた。「言語化」とは、「漠然と抱いた意識や思考を正確に言葉にして表すこと」という意味である。意外にも、これまで辞書への掲載頻度が高い言葉ではなかったようだ。自分がこれまで行ってきた悪癖も、「言語化」という枠を与えられたような気がした。まさに、「言語化」を「言語化」されたのだ。言葉の響きも含めて、なんだかカッコよくて嬉しかった。

自分の考えを何らかの形で発散したいと考えたとき、最高のツールが存在する。それが、文章である。あっという間に口から出て行ってしまう「はなし言葉」とは違い、「書き言葉」である文章は推敲が可能である。思考や感情は形を伴って整理され、あいまいな箇所を掘り下げて突き詰めたり、類似概念を整理したり、余分な部分を削除したり、個別・具体と一般・抽象の往復ができる。この作業を経る必要があるからこそ、文章は書き手の思考や価値観を色濃く反映するのだろう。文章とは、「言語化」を「可視化」する最良の手段なのだ。

第二章 進路指導部の視点から

1. 進路指導の初心者、進路通信を書く

● 進路通信とは

3年前から進路指導部を任せていただき、その過程で「進路通信」という文書を発行する機会を多く頂いた。Seed → Sprout → Bloom と、進路実現を叶える生徒を種から発芽した大輪の桜に見立てたこの文書は、進路指導部の持ち物として月に1回程度を目安に定期発行される。その名の表す通り、進路に関わる学内通信であり、いわば情報誌としての色合いが強い。

ただ、進路通信には定位置がなかった。私の所属している学年の1つ上の学年では「学習対策通信」と「進路通信」が分かれて存在していたり、学内のデータベースに残している学年とそうでない学年に分かれていたり、学年によって発行の時期も内容も統一されていない状態であったと記憶している。

最初は何を書いていいのか全く分からなかった。それもそのはずで、わたしはまだ3年生どころか2年生の担当さえしたことがない、いわば「進路指導」の完全なる初心者だった。学校行事日程、定期考査のアドバイス、大学入試情報と、進路通信に掲載される内容は多岐にわたる。私はいろんな資料を漁っては、良いと思うものをコピー & ペーストするロボットと化していた。1年生の時は先輩方にアドバイスを貰いながら、見よう見まねの自転車操業で乗り越えてきた。進路通信の発行期日が迫ると、そのことを考えるだけで億劫な気持ちになった。

しかし、3年という月日は恐ろしいもので、コピペロボも成長したようだ。現在では発行の3か月前に、原稿の8割を書き上げられるようになった。年間の最初に発行日と内容の大枠を決め、シラバスを作成して共有し、長期休みに一気に執筆するスタイルに変更したことが大きな理由だ。たたき台として作成した進路通信は、様々な先生方の協力によって残り2割が埋まっていくことで命が吹き込まれ、1つの完成形として生徒たちのもとへ届いていく。

とは言っても、若輩者の私にとって、進路通信の8割を書き上げるのは決して楽な仕事ではない。私はさながらイチローが打席に立つ時と同じように入念なルーティンを経て執筆に取り掛かる。前々からスケジュールを組んでおき、心身を整える。午前中、エナジードリンク片手にパソコンがある自室にこもり、ブルーライトカットのメガネを装着して、ヘッドフォンで集中用BGMを聴く。白紙やiPadの無限キャンバスアプリを用意し、それにありったけのアイデアやキーワードなどを書き殴る。ぐちゃぐちゃの文字を徐々に文章に起こしていき、表現を微調整しながらパラグラフを作って並べ替える。タイピングでデータ化したらChatGPTにかけて添削をしてもらい、冗長な箇所を削りながらも、お気に入りの言葉を残す。朝から取り掛かっても、書き終える頃には夕方になっている。さながら、ライターズ・ハイのような状態の後は何もすることができず、ぐったりとして1日が終わる。2023年と2024年の夏休みは、部活の引率がない日のほとんどを進路通信に充てた。

産みの苦しみがあるぶん、愛着が湧くものだ。完成させたものを印刷するために製版機にかけるときは、「ガシャンガシャン」という機械音が産声に聞こえる。折り機にかけて印刷室からクラス担任の机に持って行くときには、まるで我が子を初めて抱く母親のように大事に抱き抱えてしまう。いろいろな人の目に触れて少しでも役に立って欲しいし、雑に扱われれば悲しくなるのは親バカの症状だ。自分のクラスのHRで進路通信を配布した時、一瞥もくれずカバンにしまう生徒や、サッと読んで捨ててしまう生徒も一定数いる。子の仇は親が取る。翌日の授業で1番難しい箇所をその生徒たちに指名して答えさせたものだ。

ありがたいことに、反応してくれる人の数も徐々に増えた。三者面談のときのこと。とある保護者の方に、廊下ですれ違い様に話しかけられた。授業すら持っていない生徒の保護者だったので、とんでもないクレームをもらうのではないかとヒヤヒヤしたが、「飯塚先生ですよ。いつも進路通信読んでます！」と言われたときには、動揺を隠すために「それはそれは、ありがとうございます。」とクールに返事したものの、内心は飛び上がって喜んでおり、危うく面談をすっぽかして廊下を走り回るところであった。

自分の悪癖である「考える」「言葉にする」も、正しい使い方ができれば有益なものになるのかもしれない。

● 進路通信に注力したきっかけ

進路指導部の仕事は多岐にわたる。そのうちのひとつでしかない進路通信の発行に、何故ここまで拘ることになったのか。それは、偶然巡ってきた組織の構造変化のタイミングと、1本の動画との出会いがきっかけである。

① 構造変化

倉敷学年が1年生だったころ、進路指導部は私、峯岸先生、木村先生という3人体制だった。なんと、全員が初めての進路指導部。信じられないほど手探りの日々だった。全員が学習対策チームを兼ねていたので、峯岸先生を中心に、進路通信を執筆しながら進路と学習イベントを整理していった。毎日8時近くまで残業して、ああでもない、こうでもない議論を重ねた。年末には3人で慰労会を開き、張り詰めた緊張感から解放されたのか、私はその会の帰りから悪寒に襲われ、年末年始をコロナ罹患者として自宅で過ごす羽目になったほどだ(病弱キャラにもほどがある)。彼らと乗り越えた1年間は、私にとって「青春」だった。

しかし、2年生になると峯岸先生は生徒会へ、木村先生は他学年へ移動となり、この「青春ビギナーズ」は解散となった。新たに進路指導部にお迎えしたのは、これまた初めて進路指導部になる湯浅先生と新卒の山口先生、他学年から金澤先生。サポート役で金澤先生がいらっしゃるのはとてつもなくありがたいこととはいえ、金澤先生は國學院大学の窓口担当で大変お忙しく、実働部隊としては2年目にして実質1番の古株となってしまった。模試や講

習関連の仕事は湯浅先生と山口先生が引き受けてくれたおかげで、私は進路指導部と学習対策チームをつなぐ役割に集中することができた。進路通信という仕事は、まさに進路指導部と学習対策という「ベン図」の重なった場所にある。進路通信を書く作業によって、自らと学年の今後の見通しが明確になり、アクションプランにつながるのだ。

3年生になると、金澤先生と山口先生は他学年へ移動となり、私と湯浅先生に加えて田邊先生と井畑先生をお迎えして新体制となった。お二方とも進路指導部歴が長く、その動きはプロフェッショナルそのものであった。田邊先生は進路指導部長として國學院大學選抜推薦や法学部系列選抜推薦、指定校推薦といった進路のメインイベントをすべて統括していただいた。井畑先生は模試のスペシャリストとして実施準備から答案の発送まで正確丁寧迅速でありながら、勉強合宿も難なく成功に導いていただいた。2年目となった湯浅先生は講習関連の動きを一手に引き受け、生徒⇄事務⇄業者間で行われる複雑なやり取りの間に立って、各種講習の実施にご尽力いただいた。3人の支えにより、私は前年度から引き続き学習方面の仕事に専念できることになった。

同じ学年の同じ進路指導部であっても、注力する仕事はまるで別部署のように異なる。それを象徴する出来事がある。とある日の朝の打ち合わせで、4人それぞれが全く異なる連絡事項を共有したのだ。さながら陸上の4継リレーのようにバトンをつないでいくようで、私は思わず笑ってしまった。濃密な日々を乗り越えることができたのは間違いなく先輩方のおかげだ。3人に比べて私の仕事の総量は明らかに少ないのに、私が疲弊しているときには決まって声をかけ、救いの手を差し伸べてくれた。

進路部長であり、田邊先生と両翼を担う秋里先生の存在も大きい。アイデアマンで行動力のある秋里先生は、進路指導部の「士気」と「指揮」を司っている。私のこともしきりに気にかけてくれており、大変お忙しい中でも様々な面でサポートしてくれている。手が回らない仕事の手伝いをしてくれたり、学年のイベントに顔を出してくれたり、私の相談役としてアイデアを出してくれたり、そのバイタリティは計り知れない。

組織構造の変化と多くの先生方の支えによって、私は進路通信と学習対策という仕事に集中していくこととなる。ここでお名前を挙げていない人を含め、進路指導部で携わっている全ての人に感謝している。

② 1本の動画

そして、2つ目のきっかけとなったのが、2年生向けの進路通信のネタ探しをしていた6月ごろにふと見つけた(参考②)「大人が書いてはいけない文章 TOP10」という動画だ。

私が昔から好きな YouTuber のマコなり社長の動画だったこともあり、何気なく再生ボタンを押すと、いきなり度肝を抜かれた。「文章を書くとは、考えることそのものである。そして、考えるとは、人生そのものである。」— 彼に言わせれば、「考える」とは、論理的納得感

と感情的納得感の両方を揃え、意思決定を行うことである。仕事、住んでいる場所、付き合い人…眼前に広がる光景、言い換えれば私たちの人生は、「考える」末に行った意思決定がもたらした結果なのだ。したがって、よりよく「考える」ことができるなら、よりよく「生きる」ことが可能になる。では、よりよく「考える」ためにはどうしたらよいのか。その答えが、「文章を書く」ということ。人間の脳は直感的に早く思考する部分と、じっくり深く思考する部分に分かれており、論理と感情のバランスを取るために、後者を鍛えていく必要があるというのだ。文章を書くことでこの部分が鍛えられ、よりよく考えることができるという。

その後、動画はランキング形式で社会人がやりがちな文章のミスや構造を指摘し、改善策を提示していく。動画の最後に紹介された、大人が書いてはいけない文章第1位は、「自分の意見が入った提案になっていない文章」であった。「間違いを恐れ、考えることから逃げた先にあるのは、事実だけをただ書き連ねた文章である。提案が入っていないなら、あなたがその文章を書く必要がない。例え下手くそで間違っていたとしても、誰かの反対意見やダメ出しを貰ったとしても、意思表示を続け、何度でも提案し続けた先にこそ、自分だけの付加価値を残していける未来が待っている。」

私は、この動画を見て衝撃を受けた。これまで書いてきた進路通信を振り返ってみると、彼の指摘する NG 文章のオンパレードだった。私がこれまで行ってきたのは、「考えるフリ」だったのだ。いつからか、期日を守ること、発行することだけが目的となっていた。そして、またいつもの癖で、浮かんだ思考と感情にそれっぽいラベルを貼り、脊髓反射で出すことばかり目を向けていたのだろう。

思い返せば、私のこれまでにヒントがあった。小中高と、明るい友人に恵まれた。仲の良いグループの会話では、いつもボケとツッコミの両方をこなしている自信があった。お恥ずかしいことに、自分達は面白いという自負があった。私のセールスポイントは、話の流れや周囲が考えていることを察する「状況判断力」、その場に最適な言葉でありながら、最も意外な、あるいは納得感のある言葉を選ぶ「ワードチョイス」、そしてその言葉を一瞬で弾き出すまでの「瞬発力」といった、「即興力」だと信じていた。友人たちとのやり取りの中で培ってきた即興力は、自分を形成するアイデンティティのひとつとなった。

しかし、大学では半分以上が留学生と帰国子女、授業もすべて英語で行われる学部に入學し、磨いてきたスキルを発揮するには英語力が必要となった。その場の流れで思いついた「キラーフレーズ」を頭の中で瞬間英作文するも、自然な英語に訳せない。何とか適切なフレーズを思いついたときには、その話題はとっくに終わっていることがほとんどであった。気がつけば、私はうまい返しを考えることを放棄し、“yeah” と返すだけのロボットになっていた。大学生活の後半にできた、日本語でハイコンテクストな会話ができる友人たちがいなければ、私の心は壊れていただろう。小中高で培った私の即興力は、その使用に適さない場面や相手が居ることを学んだ。

社会人になると、さらに「考える」機会は減っていった。「どうせ若手が頑張っても、体制と大勢は変わらない。それなら、先輩の指示に従っていれば良いだけじゃないか」という受け身の姿勢が拭えないまま、前任校を退職して母校に戻ってきた。心機一転頑張ろうと決意したのに、母校の居心地の良さと優秀な先輩達が居る環境に慣れていき、いつしか「提案する側」に回ることを諦めていた。

話は進路通信に戻る。私は、自分が発行している文書の重みを十分に理解しないまま、適切に見える言葉たちを切り貼りし、生徒たちに情報を与えるだけの「進路通信もどき」の作成に躍起になっていたような気がした。悔しくて、すぐに進路通信のシラバスを抜本的に見直し、情報誌としての要素は残しつつ、我々教員の熱量や思いが伝わるような構成に変更した。そして、その熱量を下支えするような文章として、誰にも許可を得ずにオリジナルのコラムを掲載してみた。形骸化した内容ではなく、どれだけ「読んでくれた生徒を動かすことができるのか」という視点から作成した文章であった。

その後もコラムを掲載し続けた。2本ほど書いたところで、先輩方が反応してくれた。「コラム、いいじゃん。」「せっかく良いもの書いてるんだから、印刷して生徒に読んでもらおうよ。」と背中を押してくれたのだ。当初は電子版のみで配信していたものを、印刷して生徒に配布することになった。

●コラム

前述のように、進路通信を情報誌としてのみならず、生徒たちにとって少しでもモチベーションになるような存在に引き上げるべく、2年生の進路通信 Sprout ⑤から、誰に頼まれたわけでもないのに鬱陶しいコラムを書き始めた。年間で予定されていた進路通信の発行時期に合わせて内容を少しずつ調整しており、コラムを書くために進路通信を発行したわけではないことをご理解いただきたい。

① 2年次

『結果を出す人間の特徴』2年生 Sprout ⑤ 7月5日号

同じ授業を受け、同じ教材を使い、同じ課題に取り組んでも、テストを受ければ結果は異なる。この原因を「認識」と「習慣」という切り口から考察した。目の前の事象に対して抽象的な認識のままでは、「知る→分かる→できる→続ける」という良い習慣を形成できない。質の高い習慣には、解像度の高い認識が必要不可欠であると論じた。

『自責思考×「意味のある」反省』Sprout ⑥ 7月19日号

本格的に受験を意識するタイミングで頻発する「模試偏向」と「定期考査不要論」に対するアンサー。自らの結果が芳しくないことを外的要因に帰結するのは危険であるとして、

自責思考の重要性を論じた。解決策として、解像度と再現性が高い「意味のある反省」を提示。客観的・具体的な事実の分析+感情+アクションプランによって、生徒がやりがちな「反省もどき」からの脱却を促した。

『勉強という自己投資 複利の力』 Sprout ⑦ 8月28日号

勉強することで生涯年収に差が出るというデータを提示し、時間という資産を勉強に投資することで将来のリターンを期待する「自己投資」の価値を考察した。投資を語る上では外せない「複利効果」についても触れることで、早くから継続して勉強に取り組むことで爆発的なリターンを期待できると結論付けた。

『ルーティーン的确立 意識<<<仕組み』 Sprout ⑧ 9月13日号

「頑張ろう」という気持ちだけでは、良い習慣を確立することはできない。イチローやジョブズといった超一流とされている人間がルーティーンの継続に力を注いでいるのはなぜかを考察した。

人間の行動を、原始的な欲求に振り回される「衝動モード」・合理的判断に基づいた「意思モード」・身についたルーティーンをなぞる「習慣モード」の3つに分解。「衝動」を押さえながら「意思」の介在する時間を増やすことで、自分にとって必要なことに最大限の時間と労力を長期間投資する「習慣」につながり、その投資は複利の力で跳ね上がっていく。日頃習慣にしたものを3つのモードに分けて細分化し、無意識にルーティーンとなるまでは意識的に行動するべきだと締めた。

『進路選択と「自己分析」』 Sprout ⑨ 10月18日号

来年度のコース選択を決定する三者面談を目前に控えた生徒たちに向けて、自らの「軸」をどこに設定するのかの重要性について説いた。

進路選択には様々な要因が存在し、そのすべてを選ぶことはできない。進路を選択するとは、ともすれば残りの世界線を「捨てる」ことなのかもしれない。勇気のいる選択だからこそ、主体的に考え抜く必要がある。偏差値・大学・学部・職業といった様々な情報を精査するためには、自らがどんな人生を送りたいのかという1本の軸が必要である。自分自身がこれまでどんな人生を歩み、これからどう生きていくのか、そしてそのためにはどんな進路が1番適しているのかを探るための「自己分析」がオススメであるとして、いくつかのツールを紹介。今話題のMBTI診断などにも触れた。

『「モチベーション」とは』 Sprout ⑩ 11月7日号

生徒たちには考查や模試のたびに反省を言語化させていたが、そのときに決まって出てく

るフレーズである「モチベーションが上がらなかった・保てなかった」に対する考察。

モチベーションを「外発的動機づけ」・「内発的動機づけ」の2つに分けると、後者のほうが長続きする傾向にある。その運用タイプを、気合を入れてテンションで乗り切る「ハイ」タイプ・行動していくうちに湧いてくる「アクション」タイプ・目標とのギャップを認識する「ギャップ」タイプに分類。モチベーションアップ＝「外発的」or「内発的」動機 × ハイ or アクション or ギャップ運用という方程式を示した。多くの人は「内発的」動機 × 「ハイ」タイプ運用をしようとするから失敗するのであり、まずは「外発的」動機 × 「アクション」 + 「ギャップ」運用から始めようと促した。

『自己肯定感の高め方 カギは「すぐやる』』 Sprout ⑪ 12月1日号

豊住学年で発行されていた『学習対策通信』に掲載されていた小西先生のコラムを参考に、自分なりの解釈を加えたもの。進路決定や受験生活には必要不可欠な「自信」に対する考察。

自信とは、自らのありのままを受け入れる「自己肯定感」・困難な状況でも自らを信じる「自己効力感」の2つから成り立つ。前者は内向き、後者は外向きの力であり、前者が高いことで後者も自ずと高まっていく。そこで、前者の自己肯定感を徹底的に分析した。

学歴や給与といった外発的な指標に基づいた自己肯定感よりも、内発的な自己肯定感の育成こそが重要であり、そのためには「自己受容」と「自己価値」という2つの要素が必要不可欠である。自己受容とは「良いところも悪いところもすべて自分である」と認めることであり、自己価値とは「完璧ではない状態でも生きている自分は素晴らしい」と認めることである。

自己肯定感を高める具体的なアクションプランとして、どんなことに対しても「すぐにやる人」になることを提案した。何事に対してもとにかく行動し、失敗と成功を繰り返しながらまた次の行動につなげていくことで、自己受容や自己価値の認識回数が多くなり、「結果を出している自分」でなくとも、「結果を出そうとしている自分」になることができるのだ。

『予備校との付き合い方 利用する側に回れ』 Sprout ⑫ 1月10日号

「予備校に通った方が良いですか？」という生徒からの質問に対するアンサー。こちらも学習対策通信で小西先生が執筆していた内容を深く掘り下げ、自分の言葉に落とし込んだもの。「3年0学期」という言葉が独り歩きするこの時期の生徒に向けた内容である。

まずは予備校のメリットとデメリット、そして予備校に向く生徒と向かない生徒を徹底考察した。これまで行ってきた「解像度」「複利の力」「自己分析」などの既出単語も交えながら、「予備校に通うか否かはどちらでも構わない」と結論付け、「あくまで追加課金アイテムであることを忘れずに。学校にも同じだけの環境は揃っているよ。」と念押し。何も考えずに予備校に多額のお金を払うだけの「良いお客さん」ではなく、自らの強みを徹底的に伸ばすために予備校をフル活用する「良い受験生」になれ、という提案を行った。

『基礎を疎かにした受験生の末路 1円を笑うものは1円に泣く』 Sprout ⑬ 1月31日号

受験生として本格始動すると必ず発生する、「難しいことをやらなきゃ病」への啓発が狙い。

難関大学だろうと、合否を分けるのは基礎力の差である。受験戦略を見誤らないように、難関大学を目指しながらも基礎を疎かにして失敗した同級生の友人の話を紹介した。努力は量や質だけではなく、「ベクトル」が伴って初めて結果に結びつくのである。アクションプランとして、「基礎力を固める」という言葉の解像度を上げて「学習ロードマップ」を作成し、時期と内容と手段を言語化することを提案した。

『ピーキングの重要性 狙った試合で結果を残せ』 Sprout ⑭ 3月6日号

同期の北村先生のフィジーク大会をサポートした体験から着想を得た内容。力がありながら、模試や英検などでなかなか狙った結果を出せない生徒に対しての啓発を狙いとした。

本番に狙った結果を残すためのアプローチ＝「ピーキング」の重要性を説くため、北村先生の壮絶な身体造りとコンディショニングについての例を挙げた。過酷なトレーニング・減量・水や塩抜き・ビジュアル調整など、本番のたった数分の「煌き」のために積み上げた膨大な準備は、受験を含めた一発勝負の試験にも転用できる。

ライバルや問題の相性といった不確定要素を気にするのではなく、自らのコントロールできる範囲に注力し、練習段階から高負荷のアプローチを取り、当日起こり得ることを全て言語化してリストアップすることで、「いつも通り」望むことができると説いた。

2年生まででかなり踏み込んだ内容まで語ることができたので、3年生では毎号掲載せず、不定期掲載となった。

② 3年次**『手帳を使用したスケジュール管理のすゝめ』 3年生 Bloom ① 4月11日号**

学年で重点的に指導する「手帳でのスケジュール管理指導」に合わせて掲載した。

受験学年として、全体スケジュールを把握する「マクロの視点」・細やかな日程に落とし込む「ミクロの視点」の両方を養うことの重要性を説いた。大雑把でも前進することができればよかった2年生までと違い、大胆さと緻密さを両立しなければならない3年生では、頭の中にあることを感覚的に処理するだけでなく、可視化しながら優先順位を付けて生活することになる。iPad等のデジタル手帳の使いやすさは承知の上で、受験生としては紙のアナログ手帳がオススメという提案をした。デジタル手帳は「何でもできるからこそ、何もできない」という視点は、自分自身がこれまでどちらも併用してきたからこそ伝えられる内容であった。

『拝啓 18歳になる君たちへ』 Bloom ① 4月11日号

3年生からは学年の先生方のご協力をいただき、(参考③)「拝啓 18歳になる君たちへ」というタイトルで連載企画を立ち上げた。学年の全先生方にお願ひし、生徒への応援メッセージとなるコラムを執筆していただいた。生徒たちも堅苦しい内容の「意識高い系」コラムに食傷気味になってきた頃で(私のせいである)、先生方の人となりを感じることでできる内容には興味津々であり、ここだけ読んでいる生徒もいたほどだ。

そのトップバッターとして執筆した内容だが、この外苑春秋の内容のベースともなっている。自らの人生を振り返りながら、受験生になる生徒たちに言語化の重要性を説いた。あまりにもカッコつけた内容で恥ずかしかったので、最後は高校時代に好きだった女の子にフラれた話までしてオチをつけた。フラれたところばかり反響があって不本意だったことを覚えている。

『勉強の質を高める三大要素 教材×場所×雰囲気』 Bloom ③ 6月10日号

受験生としての生徒たちの動きを見てみると、まだまだギアを上げきれていない様子であった。体育祭を終え、受験生としての切り替えがテーマとなる時期に合わせて執筆した内容。

「教材」「場所」「雰囲気」という3つの視点から、勉強の質を高めていくために必要なことを考察した。多くの生徒は、自分がなぜ勉強が捗らないのか、どのような原因と対策があるのかを分析できておらず、モチベーションや気合いといった抽象論に終始しがちである。

勉強が捗らない状態は、「何をすればいいかわからない」と「何をすればいいかわかっているけどできない」に分解できる。そして、前者は「教材」の視点、後者は「場所」と「雰囲気」の視点から考えると糸口が見つかる。そして、学年でも「教材」を提供するイベントを行うほか、「場所」と「雰囲気」作りでも施策を行っていくことを伝えた。赤本演習シミュレーションノート・放課後自習室・勉強合宿といったその後の施策にもつながっていく内容となっていた。

『いよいよ過去問演習開始 ゴールを明確にせよ』 Bloom ⑥ 9月25日号

文化祭直前、生徒たちはお祭りムード。しかし、一般受験組はこの後控える河合塾記述模試、早慶レベル模試、英検、中間考査といった怒涛のスケジュールをこなしていく。学年のトップランナーは基礎学習に別れを告げ、過去問演習に勤しむ時期である。トップランナー達への応援メッセージかつ、まだまだ基礎学習の終わっていない生徒たちに発破をかけることを狙いとして、過去問演習という行為の考察を行った。

ただ闇雲に過去問を解き漁ったところで学力が伸びる訳では無い。過去問は解く行為そのものよりも、その後の振り返りや復習といったメンテナンス作業にこそ価値がある。過去問演習のゴールは「敵を知り、己を知ること」であると結論付けた。また、受験生たちが陥り

やすいミスを先回りして紹介し、「優先順位を明確化せよ」と啓発。最後は汎用的な英語の長文論説問題への効果的な復習法を紹介した。

『不安を払拭するには』 Bloom ⑧ 11月6日号

指定校や國學院大学の推薦などで進路が決まった生徒が現れる時期。それは、一般受験の生徒たちが伸び切らない自分の学力にしびれを切らし、「志望校を下げちゃおうかな」と弱気になり、勉強が手につかない時期と重なる。不安を感じる彼らに寄り添いたい、かといって甘やかしたい訳でもない。そこで、自らの大学受験の体験談を引き合いに出しながら、不安とは何なのか、そしてその払拭には何が必要なのかを考察した。

不安とは、その正体がわからない時に最も増大し、放置するとどんどん心身を蝕むものである。これまで語り尽くしてきた言語化の作業で自らの不安と向き合い、それを解決するためのアクションプランの立案につなげようという提案をした。

『勝つための思考 ここからは「引き算」で期待値を追え』 Bloom ⑨ 12月9日号

「現役生は最後まで伸びる」という言葉。もちろん紛れもない事実であるが、それを鵜呑みにして、何も考えずに勉強したところで結果はたかが知れている。最後まで伸びるためには何が必要なのかを考察した。

難関大学の合格を目指す限り、中高一貫校を含めた超進学校の生徒や浪人生たちと戦っていく。ボクシングに例えれば、彼らは「階級」違い。積んでいるエンジンもトレーニング量も桁違いで、彼らと真正面から殴り合えば10戦9敗かもしれない。だとしても、大事な第1志望校の当日に「だけ」でも勝てれば良い。過去問研究の量や質・分野や大問別の対策など、「これだけは勝てる」という箇所を増やしていくことが重要である。ビジネスの世界でも「ランチェスター戦略」として知られる考え方で、徹底して一箇所にリソースを割くことで、弱者が強者に勝つことを可能にするのである。冬休みは、あれもこれもと詰め込む「足し算」の発想ではなく、やらないことを決め、やることに集中する「引き算」の考え方を持つことを提案した。

あの手この手で内容を膨らませて書いているが、根底にある考えは一貫している。ルールが決まったゲームにおいては、戦略と戦術を持って効率よく戦う事が重要である。ガムシャラに努力することができず、理屈っぽいくせに暑苦しいという私のワガママな人間性を色濃く反映している。学年として発行している進路通信に、いち個人である私の考えを「これでもか」と載せることに対して、いろんな意見があったと思う。この場所に載せることではないかもしれないが、好き勝手に本当に申し訳ありませんでした。そして、ありがとうございました。

2. 思わぬ変化

● 教員と芸人の共通点

鳥澁がましいのを承知で喩えてみる。ここからは偏見まみれの持論が含まれることをご了承願いたい。

担任する生徒や同僚との何気ないやり取りを「ラジオ」とするなら、学年集会のような堅苦しい場所でのかしまった話は「漫才」と近い。相手との関係性にもよるが、授業は「漫才」がベースで、少人数のクラスや担任クラスでは「ラジオ」の要素がミックスされていく。どちらに偏りすぎても、生徒からは一定の賛否が巻き起こるのも面白い。

芸人にしても教員にしても、「漫才は面白いけど、ラジオが面白くない人」は存在する一方で、「漫才が面白くないのに、ラジオは面白い人」の数は多くない。得てして、漫才が面白い人はラジオも面白い。即興に見えるおしゃれで気軽なフレーズも、漫才用に本ネタを仕上げて行く段階で出会ったものを流用していたり、そのままではなくても着想を得ている事が多い。例えば、M-1 チャンピオンの令和ロマンというコンビのボケ担当である高比良くるまは、日常生活で気づいたことから着想を得て、本ネタに活かすそうだ。iPhoneの「喩え」というメモフォルダには、「暑い」「寒い」「狭い」などのフォルダを用意し、思いつくたびに入れていくらしい（狭い：タピオカ屋のキッチンなど）。そして、それらの秀逸な言葉は即興力の求められる平場でも使われる。

掛け合いにおける絶妙な「間」などのテクニックや、人とは違う発想力、納得感のある言葉選びといったスキルは、人目に晒され一挙手一投足を凝視される「漫才」の中でこそ鍛え上げられるのだろう。ごくごく一部の天才を除き、サラッと人を惹きつけることができるような言葉を使える人は、それを裏付ける膨大な思考を張り巡らせ、それに枠を与える言語化の準備作業を怠らない人と言えよう。

● 漫才力 = 文章力 = 提案力

いつからか、大事な話をしたいと思うときには、ありったけの原稿を書くようになった。進学説明会や放送集会、授業で行う雑談、行事などの節目のHRや結婚式の友人代表のスピーチ。仕事もプライベートも関係なく、「ここぞ」という場面では、原稿無しで整理されていない文章では不安を感じるようになってしまったのだ。一見すると、即興力が売りだった頃に比べて、アドリブの効かない台本人間になっているように思える。しかし、実は逆である。「漫才」のトレーニングをすることで、私は「ラジオ」においても上達していると感じた。思考を整理し、台本に書き起こす習慣こそ、より一層質の高いアドリブにつながるのだ。適当なおしゃべりを繰り返していた時よりも、自分のやるべきことに注力できるようになったと感じていた。

ずっと夢だった教員という職業。ひとりの教員として働くことは、とてもやりがいのある

仕事だ。そこに、ひとりの人間としてずっと大好きだったお笑いの要素があるかもしれないという気付きは、私にとって衝撃的なものだった。自分なりに考えてきたアイデアを言語化して腑に落ちた時の論理的納得感と感情的納得感は凄まじい。

私は文章を書き続けることにした。自分や目の前の人間をより良い方向に導くプロセスとして、まずはとにかく「考え」、それらを文章にして「提案」し、大勢の目に触れる場所に晒す。昔は考えもしなかった作業が、大好きなお笑いと1本の動画、そして進路通信という存在によって身近なものとなった。この変化は進路指導部としての仕事のみならず、後述する英語科としての仕事を含めた様々な箇所にも波及していくことになる。

進路指導部・学習対策として働く中で、本当に貴重な経験をさせてもらった。「漫才」的な文章の執筆の機会を頂き、自分の頭の中を整理することができたおかげで、様々なプラスの影響があったことは間違いない。

第三章 英語科の視点から

ここからは、約半年間挑戦してきた「英検1級」という資格試験への取り組みを切り口にしていく。進路通信を書いていく中で感じたことの実践、受験を通して得たひとりの英語学習者としての発見や気付き、そして英語科教員という仕事と生徒への還元。書き記しておきたいことはまだまだ尽きない。

1. 英検1級への挑戦

● 英検とは「1級」の価値

年3回の受験を必須化、そのための季節講習まで実施して、年間最多合格者を輩出して文部科学大臣賞を取った本校の関係者にとっては、馴染みがありすぎる試験であろう。

英検という呼称が浸透しているが、正式名称は、「実用英語技能検定」である。レベルが設定されており、5級から1級まで存在する。3級から2級、2級から1級の間には大きなレベル差があり、それを埋めるべく準2級と準1級というレベルも存在する。来年度からは準2級から2級へのステップがさらに細分化され、準2級プラスという名称の新しいレベルが導入される予定だ。

加熱する英語教育において、4技能のスキルを適切に評価できる英検の存在は大きい。というのも、共通テストやTOEICに代表されるような現存する他の英語試験は概ねリーディングへの比重が大きく、リスニングがそれに続き、ライティングやスピーキングは後回しにされることが多い。その背景には、日本人はライティングやスピーキングに苦手意識があること、唯一解が存在しないため莫大な採点コストがかかることが挙げられる。試験で発信スキルよりも受信スキルが重視されれば、自ずと学習者の主眼も偏る。

一方で、英検は頑なに4技能試験に拘り続けている。受験者の多い3級からは各技能の配点が均等に設定されているため、学習者はすべての技能を満遍なく鍛える必要がある。「各技能に特化するだけでは、真の英語力は育たない」という強いメッセージ性を感じることができる。

1級はこの試験において最高難度として設定されており、多くの英語学習者のゴール地点と、その先のエクストラステージのスタート地点を兼ねている。

●資格試験の本質

① 資格試験とは

資格試験を始めとした「合格」と「不合格」が存在する試験においては、戦略と戦術が必要不可欠だ。一定のルールの中での勝負においては、努力の量や過程は評価されない。試験の当日、求められている水準に達しているか否かのみを競うのである。私にとって資格試験とは、自分が持っている力を相手の要求値にどれだけ沿わせるのかという「ゲーム」である。

そのため、私が考える資格試験の本質とは、「敵を知り、己を知ること」である。ルールの決まっているゲームにおいては、敵の要求値と己のステータスとのすり合わせができれば良いだけだ。

そして、資格試験はあくまで「通過点」であり「手段」である。身も蓋もなく言ってしまえば、英検1級の合格そのものに価値があるとは思わない。英検1級の合格ごときでこんなドヤ顔の文章を書いている時点でお里が知れてしまうことは自覚している。高校で大学受験を指導する立場の人間なら、それなりの準備をすれば合格には手が届くはずだし、またそうでなければならぬと思う。

これは、どんな試験でも同じなのだろう。合格そのものをゴールに据えているようでは不十分だ。合格したその先で、どんな学びを得て、どんな人間になるのかこそ本質であり、重要なのだ。例えば、医師国家試験に通ることだけが目標の医学生を見たとき、私たちはどう感じるだろうか。暗記した知識と医師免許を自慢げにひけらかすのではなく、目の前の患者1人ひとりに向き合うことを期待するだろう。私自身も、どんな形でこの経験を活かし、生徒たちに働きかけることができるのかによって、ハリボテの英検1級ホルダーになるのか、生徒から真に信頼される存在になれるのかの分岐に立っているのだろう。

それでも、「合格」という分かりやすい目標を一つ定め、その達成に向けて様々なことを考え、実行する過程から学べることが多くある。例え医師国家試験だろうが、英検だろうが、この事実は変わらない。合格を目指す過程で得た経験と、この文章を書くために整理した言葉たちは自分の人生の糧になると確信している。

② 英検という「ゲーム」

英検という「ゲーム」は、正しく努力すれば必ず報われるようになっている。それは、正解の存在する「客観式」での評価がほとんどだからである。

例えば、M-1 グランプリなどのお笑い賞レースにおいては、「プレイヤー」と「お客さん」の間に「審査員」という存在がいて、様々な指標を基に点数が付けられる。お客さんにどれだけウケようが、審査員の考える「正解」から遠ざかれば評価が下がってしまう。事実、一昔前の M-1 は関西漫才師の大会という印象が強く、審査員が関西の芸人や作家ばかり、ということも珍しくなかったそうだ。それ故、関西の漫才師に高い評価が集中していることも少なくなかった。数年前までは敗者復活戦で「国民投票」というシステムが採用されていたが、これも知名度を基にした「人気投票」となっている実態があった。現 M-1 チャンピオンの令和ロマンも、2022 年度の敗者復活ではイチウケを手にしながら得票数で人気コンビの後塵を拝している。

評価が「主観式」のものは、時の運や好みによって結果が変わってしまうと言える。一方、英検のような筆記試験においては、努力を試験用にチューニングした分だけ評価されるため、理不尽感が薄れる。一次試験ではリーディングとリスニングは完全客観式のマーク試験であり、審査員は存在しない。ライティングは審査員による採点が存在するが、その採点基準は公表されており明確だ。また、満点とされる模範解答も公表されているので、自分がどれくらいの評価を受けるかどうかの指標が立てやすい。英検という「ゲーム」においては、攻略法が明確に存在するのだ。

このゲームの攻略に躍起になるのは、「英語力を鍛えるための学習」という観点で見れば、本質的ではないのかもしれない。しかし、何も頭を使わずにガムシャラに学習をするよりも、「英検合格」という指標を掲げることでモチベーションも保ちやすく、具体的なアクションプランにつながりやすい。攻略の道中で身に付けた知識や技能は無駄にならず、合格を手に入れば一定の評価を得ることができる。資格を取ったからといって必ずしも英語力が高いとは限らないが、資格すら取れないものに批判する権利は無い。

「資格試験の本質」/ 英検という「ゲーム」への関係性は、私が進路通信で語ってきた「進路選択」/ 大学受験という「ゲーム」の関係性に限りなく近い。

自分が語ったことを体現し、合格という結果を得たことで、生徒達に還元できることも増えるはずである。ということで、恥を承知で私が英検 1 級を受験するまでの背景やきっかけ、試験までの準備と試験の結果、今思うことなどをまとめていく。

● 受験した理由 背景・きっかけ

英検 1 級へ挑戦した理由。結論から言えば、「カッコつけたかった」という言葉が当てはまる。もう少し聞こえを良くするならば、「受験生たちと最後まで一緒に戦いたかった」である

うか。背景ときっかけを少しでも深掘ってみたい。

① 背景

進路通信に偉そうなことを書き連ねる立場となり、自分について深く考えるようになった。

受験生の時から、試験を受ける側として戦い続けてきた。特に、得意科目の英語では、誰にも負けたくないという気持ちがあった。大学入試では英語の配点が大きい国際系の学部を狙い撃ちした。当時のブームの影響で各大学の国際系の学部の偏差値は軒並み上昇傾向。「国際」の名前が付けば「看板学部」という扱いを受け、受験生の憧れの的という立ち位置であった。負けず嫌いの私にとってはこれ以上ないお膳立てもあり、受験英語に没頭した。当時本校で採用されていた『ユメタン』という2冊の単語帳を早々に覚え切り、私は本屋で買った3冊目をやりこんだ。現在も本校で採用している『Vintage』という英文法の問題集は、やり込みすぎて本当にピンテー加工を施したような見た目になった。努力の甲斐もあり、無事に第一志望の大学に辿り着いた時には涙を流して喜んだ。

大学生の序盤には TOEFL IBT に挑戦した。留学に必須だったためである。初めて受けた時は大学レベルの英語の難易度と語彙力に圧倒された。猛勉強し、79点を取って留学の挑戦権を得た。友人たちは皆100点近い人達だったから、恥ずかしくて自分のスコアを口に出すことはできなかった。帰国すると、就活を意識して TOEIC を受験した。オールマークで RL のみという受験と近いゲーム性を持つ TOEIC に対する攻略欲が湧き、対策して940点までは上げてみた。最後に英検準1級を取得し、就活を終えた。

大学4年生という果てしないモラトリアム。バイトに行き、徹夜で麻雀をして授業中に睡眠時間を確保し、また麻雀をする生活にも慣れたころ、「このままではいけない」と一念発起し、TOEFL IBT への再挑戦と英検1級の取得を決意した。

TOEFL は96点という自己ベストを出すことができた。入学当初は天と地ほど差があった同級生たちに少しでも近付けたような気がして嬉しかったのを覚えている。大学生生活のシメとなった英検1級。本腰を入れて勉強したが、合格点を取れるかはギリギリの戦いだった。一次試験と二次試験をどちらも最低スコアで通過し、大学生のうちに1級ホルダーになることができたのは運の要素も大きかったと思う。

社会人になると、英語の勉強のベクトルは自分ではなく生徒に向くようになった。「自分がどう学ぶか」よりも、「生徒たちにどう教えるか」。これまでとは全く違うアプローチが必要になり、試行錯誤は続いた。忙しい毎日を言い訳にし、自分の英語力を鍛える時間はめっきり減っていることは自覚していた。それでも、生徒たちに教える力を鍛えるには必要な犠牲であると信じていた。

② きっかけ

またも偏見で語ることになるが、教員とは、自分のことを棚に上げてナンボの職業だと思う。聖人君子で完璧な人間などいない。それでも、生徒の前に立つ以上は正しい姿で振る舞い、正しいことを教えるよう期待されている。しかし、その状態を長年続け、自らのことを棚に上げたままの状態になるのは危険だ。担任を持てば、まるで自らの王国を築いたように振る舞うこともできてしまうし、授業をしている空間では、何十人という生徒たちの行動を管理し、自分の話を聞くことを要求できてしまう立場となる。そんな状態が長く続くと、ある種の悦に入ってしまうのかもしれない。「時間を守れ」という割には仕事やら締め切りに遅れがちだし、「自分に厳しくしなさい」という割には自分に甘く、自己研鑽をしていない（少なくとも私は）。

本校の生徒の多くは、毎日学校に来るだけで偉いのに、目の前の勉強にも一生懸命取り組んでいる。部活動や課外活動などに打ち込みながら、行事にも全力を尽くす。あつという間に迎えた3年生になると、忙しい毎日の中で、受験生活と学校生活を両立させていく。

彼らに偉そうなことを言う立場であるならば、自分だって背中で語れる存在にならなければ。一生懸命彼らのために働くのは当たり前で、それとは別に、自分自身も何かに挑戦する姿を見せ、彼らを鼓舞したいと考えるようになった。

英語科教員、進路指導部と学習対策を兼任し、生徒たちにありとあらゆる場で英検へのチャレンジを推奨してきた自分の立場を考えると、英検1級へのチャレンジが自然に思えた。大学生の時に合格点スレスレで合格したことのリベンジもできる。しかも、2024年度第1回から要約問題が追加されて新傾向に変わった。昔は意見論文の型を覚えて難単語を詰め込み、リーディングとリスニングはそこそこで合格する試験だった。しかし、要約の追加によってライティングの1点当たりの比重が下がり、その影響で単語と長文読解の問題数を削られたことで、もともと厳しかった解答時間はよりタイトになった。世間一般の認識として、「難化」しているという評判だった。

進路通信で「漫才」ばかりしていたら、「ラジオ」でも饒舌になっていたのであろう。とある日、とんでもない約束をしてしまった。2024年度の第1回英検が近づいてきた4月の後半のある日。私はチャレンジクラスの授業で要約の対策授業を行っていた。私の話に耳を傾けながら、生徒たちは必死に頭と手を動かしている。「まずは読む段階から、個別・具体と一般・抽象を見分けよう。」「要約は本文の圧縮ではなく切り抜きだ!」「相手の要求値を正しく理解して、求められている抽象度に落とし込もう。」—高校3年生になったばかりの彼ら。日本語だって難しいような作業の指示を英語でやれと言われる。リスペクトが止まらなかった。前述した通り私は1級を持っているが、要約問題は未経験だ。偉そうに理論を語れど、実践した経験には乏しい。このままで良いのか。もういちど受け直そうか。いや、今年は3年生の担任で忙しいからやめておいた方がいい。うーん… 授業をしながらも頭の中がごちゃごちゃと散

らかってきて、気分が悪くなった。

ふと気付くと、「俺も1級受けるわ!」と口走っていた。発言してから、自分が1番びっくりしていた。またやってしまった。まだ迷っていたのに、私の脊髄は仕事ができすぎるようだ。一瞬でも受けようと思ったが最後、自分が合格した姿と、それを彼らに語る姿を想像した瞬間、反射的に声帯を震わせてしまった。

次の日、去年担任していた生徒と廊下ですれ違った。今年は担任でも授業担当でもないため、接点はこうした日常生活の雑談しか無い。明るく挨拶をした去り際、彼女は「英検1級頑張ってください!」と言ってきた。生徒のネットワークは恐ろしい。軽く発言したものが、他クラスにまで出回っている。ヤケクソになってしまい、担当している他のクラスにもすべて同じことを言った。いよいよ追い込まれた。普段、朝は5時頃に起きて軽くジムに行くか仕事の整理をして出勤する。退勤後はご飯を食べてYouTubeで動画を見ながらゆっくり湯船に浸かり、失神したように寝るのがルーティンであった。この「完成した」生活のどこかに、英検1級への勉強をねじ込む必要が出てきてしまった。

「生徒たちと最後まで一緒に頑張ろう」と、当初は2025年の1月回に受験しようと思っていた。しかし、力試しに10月回も受験することにした。とりあえず受けておいて、本命は1月回と考えていたからである。これが結果的に功を奏した形となる。あとから判明することになるが、1月の英検の試験日は、職場の知人の結婚式と重なっていたのだ。英検1級は、CBTタイプ（コンピューターで受験するタイプで、試験会場や日程を自由に選べる）には対応していない。彼らにカッコつけるには、10月の試験で一発合格しなければならなくなった。

5月5日、Amazonで注文した英単語帳が自宅に届いたその瞬間から、本格的な学習がスタートした。

●一次試験考察

受験を決意したなら、試験について徹底的に調べ、情報を得ることが重要だ。「敵を知り、己を知る」ことさえできれば、勝利が見えてくる。

英検の大きな特徴として、一次の筆記試験の通過者のみが二次の面接試験の受験資格を得ることができるというシステムが挙げられる（近年導入されたS-CBTタイプの試験はこの限りではない）。そのため、英検受験者の前に高く分厚い壁として現れるのが一次試験だ。合格率は公表されていないが、噂では1級の一次試験合格率は1割程度と言われている。

一次試験は試験時間や問題形式と問題数が固定されており、難易度も各回の間で大きな差がなく、比較的安定している。試験時間はリーディングとライティングを足して100分、リスニングが約40分の長丁場となる。問題形式と問題数については2024年度第1回より変更された。ライティングに要約文が追加となった影響で、リーディングの問題数が減少した。

ここからは英検を語るうえで欠かせないCSEスコアについて軽く触れた後、一次試験の詳細

細を見ていくことにする。

① CSE スコア

各技能の中では1問に対する配点が均等である。例えば、リーディングでは語彙穴埋めの1問を取ろうが長文読解の内容一致を取ろうが同じ得点が与えられる。

そして、各技能の得点は「英検 CSE スコア」というスコアに変換される。少し複雑な説明となるので、英検協会の HP を見てみると、以下のように記述されていた。(参考④)

「英検 CSE スコア」は、ユニバーサルなスコア尺度 CSE (Common Scale for English) を英検の各級で表記したものです。英検 CSE スコアであなたの英語力を客観的に評価します。英検 CSE スコアを参照することで、今の英語力や伸長度がひと目で分かります。英検級のステップアップはもちろんのこと、生涯学習にも最適な指標となっています。国際標準規格の CEFR にも対応しています。

端的に言えば、英検ではどんな級をどんな回で受験しようが、統一尺度に基づいてスコアが与えられるということだ。例えば、英検準1級を受験して出たスコアを見れば、1級に対してどれくらい力をつければ良いのかが分かる。また、同じ1級の合格者の中でも、ギリギリで合格したのか、ハイスコアで合格したのかによって実力差が分かるようになっている。

英検1級はリーディング、ライティング、リスニング、スピーキングに850点のCSEスコアが割り振られており、3400点満点の試験だ。

一次試験の合格ラインはCSEスコア2550点満点中2028点。回によって多少のブレがあるが、素点で約70%がボーダーとされている。(※3)

② リーディング+ライティング試験 100分

英検1級の一次試験を細かく見ていく。

リーディング 35問

☆単語・熟語空所補充 22問

ネイティブの知識層が好むような英単語が扱われ、1級のリーディングでは最も難しい大問とされている。

☆中文空所補充 2題6問

中文に空所が設けられ、適切な語句を入れる問題。広範囲の分野から幅広いトピックの内容が出題される。語彙や論理構成が複雑であり、英文を構造的に捉え、正確に読む力が要求される。

☆長文内容一致 2題7問

長文を読んで、設問に対して正しい内容を選ぶ問題。語彙レベルや抽象度が高く、分量も多い。選択肢は本文の内容を巧妙に言い換えて作成され、要旨を的確に把握しているかど

うかが求められる。

ライティング 2問

☆要約問題 1問

300語ほどの英文を読み、90-110語で要約を行う。長文の単語をそのまま使い過ぎると減点となるため、本文の要旨を保ちながら簡潔に言い換える能力が試される。

☆意見論述問題 1問

与えられた社会性の高いトピックに対して自分の意見を200-240語で述べる。意見を端的にまとめる語彙力と、相手に自論を納得させるための適切な論理展開力が求められる。

どちらの問題も、内容・構成・語彙・文法の4観点を8点満点、計32点で採点される。

③ リスニング試験 約40分

リスニング 27問

☆ Dialogues 10題 10問

男女2名、あるいは3名の間で行われる会話を聴き取る。聴き取りの分量自体が多く、発言もかなり速く設定されている。ネイティブが日常で使うような口語表現を織り交ぜたり、答えとなるような箇所を直接述べないことで難しくなる。問題が印字されておらず、すべてを聴き取ってから内容を思い出す必要がある。

☆ Passages 5題 10問

トピックに関する長文を聴き取り、内容一致問題が2問ずつ設定されている。同じく問題が印字されていないため、選択肢の英文を見て内容を予測しながら聴く必要がある。

☆ Real-Life 5題 5問

印字された条件と質問に事前に目を通し、英文を聴いて解答する。問題が印字されているが、基本的にあまりヒントにならない。選択肢は巧妙に練られており、最初から最後まで注意深く聴き取る必要がある。

☆ Interview 1題 2問

様々な職業のゲストとインタビュアーの2名がやり取りをする形式。インタビュアーの質問に対し、ゲストが回答する。ゲストの職業に関する内容が問われるが、最終的な問題が印字されていないため、1文ごとのミクロ的な視点と、英文全体をマクロ的な視点の両方で聴き取る必要がある。

● 現状の把握と目標設定

まずは現状の実力を測り、合格ラインとのギャップを定量化する必要がある。その後、そのギャップを埋めるには「どんな手段」で「どんな勉強」を「どのくらい積み重ねればいい

のか」を考えることにした。

5月5日、当時最新だった2023年度第3回の英検1級一次試験の過去問題を解いた。要約が採用されていない旧形式の問題であるが、その後のベンチマークになるという判断だ。結果は以下の通り。

リーディング	得点	ライティング	得点 (Chat GPT の採点)
単語、熟語空所補充	12/25	意見論述	内容 6/8
中文空所補充	4/6		構成 7/8
長文内容一致	10/10		語彙 6/8
合計	26/41(63%)		文法 6/8
		合計	25/32(78%)
リスニング	得点	技能	得点
Dialogues	8/10	リーディング	26/41(63%)
Passages	4/10	ライティング	25/32(78%)
Real-Life	4/5	リスニング	18/27(66%)
Interview	2/2	合計	69/100(69%)
合計	18/27(66%)		

次に、素点に対してどれくらいCSEスコアが割り振られるのかを徹底的に調べ上げた。その際、(参考⑤)『フルイングリッシュ』というサイトに掲載されている、「素点とCSEスコア換算表」を参考にした。このサイトは数年間に渡って受験者からアンケートを集め、素点に対してどれほどのCSEスコアが割り振られているのかのデータベースを作成している。このサイトによれば、私の得点をCSEに換算すると以下ようになった。

技能	得点	CSEスコア
リーディング	26/41 (63%)	662/850 (77%)
ライティング	25/32 (78%)	681/850 (80%)
リスニング	18/27 (66%)	674/850 (79%)
合計	69/100 (69%)	2017/2550 (79%)

英検1級の合格ラインはCSEスコア2028なので、不合格ということになる。しかし、合格から約6年のブランクがありながら、合格ギリギリのラインにいと分かり、安堵した。

合格ラインのCSEスコアが2028点ということは、リーディングとリスニングでそれぞれ676点取れば良いということになる。このサイトに掲載されているデータを利用して導き出した新形式での合格ラインの素点は以下の通りだ。

技能	CSE676点を上回る素点ライン
リーディング	24/35 (68%)
ライティング	48/64 (75%)
リスニング	20/27 (74%)
合計	92/126 (73%)

残り4ヶ月で順当に力を伸ばすことができれば、かなりの確率で合格できると確信した。そこで、私は目標を上方修正し、「合格」ではなく、「ハイスコアを取得しての圧倒的な合格」を目標にすることにした。具体的には、素点合計で110点(87%)、合計CSEスコアで2200点(86%)を基準とした。

●スローガン「戦略×戦術×ボリューム」

ゲームの全体像が掴めたところで、改めて自分の合格へのロードマップを立て直した。「戦略×戦術×ボリューム」をスローガンに掲げ、限られた時間で合格の可能性を高めるために最も期待値の高い行動を言語化した。

戦略：「自分の強みを伸ばし、弱みを隠す」

自分の得意なリーディングを満点、あるいはそれに近い高得点で通過して、得点や時間配分で余裕を持つ。そのために、最も難易度の高い単語の大問への対策に時間を割く。ライティングは意見論述問題を軸に対策を進め、要約とリスニングは問題形式に慣れて大怪我をしない程度にする。リーディングやライティングの学習でも音声を活用し、リスニング対策を兼ねるようにする。

戦術：「覚えて済むなら徹底暗記」

配点の大きい単語、熟語空所補充の大問は対策しやすい。英単語は、覚えてしまえばそのまま得点に直結するからだ。単語帳を隅から隅まで仕上げ、どんな問題にも対応できるように準備する。また、ライティングの意見論述問題でよく出るトピックに対するモデルエッセイを暗記することで、どんな話題が出てきても最低限の出来を確保できるように準備。

ボリューム：「時間を捻出し、空いている時間をできるだけ投下」

仕事もあるので、大学生の時のように乱暴に時間を投下することができない。平日の朝と夜の時間を英検用に確保して、他の予定を入れないようにする。また、電車での移動時間など、ちょっとした空き時間にスマホを見て過ごすことが多いので、この時間を英単語学習に費やす。土日は基本的に英検の勉強に費やし、ノルマが終わって余った時間を遊びや趣味に割く。

● 一次試験 各技能への取り組み

ここからは、各技能に対しての取り組みを細かく記していく。

① リーディング 単語・熟語

①-1 英単語の暗記という作業

英検受験そのものからは少し脱線するが、まず英単語の暗記について語りたい。

英単語暗記は単調で面白さのかけらもない、とにかく「骨の折れる」作業として捉えられている事が多い。たしかにそれも一理あるが、英単語を覚えるという作業には、英語学習に重要なすべての要素が詰まっている。この作業の重要性とメソッドについて説得力を持って語ることができれば、自分だけでなく生徒のことも動かすことができる。

なぜ英単語を覚えなければならないのか

「単語を覚える＝思考力を高める」だから。

人間が生きていくうえで、最も大事な能力の1つである、「考える」。辞書で引くと、「知識や経験などに基づいて、筋道を立てて頭を働かせる」「関係する事柄や事情について、あれこれと思いをめぐらす」と出てくる。すなわち、我々が日々頭を働かせ、様々な事象に対して反応するためには、これまでの知識や経験の蓄積が必要不可欠なのだ。

もうひとつの重要な能力に、「理解する」がある。これも辞書で調べると、「物事の道理や筋道が正しくわかること」「意味・内容をのみこむこと」と出てくる。物事の道理や筋道、意味や内容がわかるには、知識が必要になる。理解するとは、「未知の情報に対して、既知の情報を結びつけるプロセス」のことであり、既知の情報量が多いほど、理解力が高まるのである。

単語を覚えるということは、考えて理解する能力を高めることなのである。

英単語を覚えるとは、一体何なのか

英単語の知識獲得とは、大きく分けて次の4つを定着させることである。

1. その単語のイメージ
2. 日本語の意味
3. 発音
4. スペル

例えば、

1. 丸っこいもので、スポーツなどに使われる
2. 玉・球
3. ボール
4. b・a・l・l

と覚えて、やっと知識獲得となる。

なぜ英単語を覚えられないのか

結論、「すべてを欲張って覚えようとするから」である。

すべての単語に対して、上記のように1.～4.まで暗記することが理想だ。”People use this ball in soccer.”などと運用できれば完璧であろう。しかし、簡単な英単語ならまだしも、レ

ベルが上がるにつれその作業は時間と労力を要していく。例えば、1級の単語には eulogy「死者への弔事」や extenuating「情状酌量すべき」といった、レベルの高い英単語も出題される。こういった難しい英単語に対してすべてを覚えようとするのは不可能に近い。

英単語は Active Vocabulary と Passive Vocabulary に分かれる。

Active Vocabulary：運用語彙。自由自在に話したり、書いたりできる語彙のこと。

Passive Vocabulary：認識語彙。読んだり、聞いたりするための準備ができる語彙のこと。

我々日本人は完璧主義を捨てられず、全ての単語を Active Vocabulary レベルまで覚えなければならぬと考えがちだ。しかし、実際にはその必要はない。日常生活レベルでは使う単語は限られており、多くの単語は Passive Vocabulary レベルまで持っていければ御の字なのだ。

そこで、ここでの英単語を「覚えた」という定義は、「英語を見て、2秒以内に日本語の意味が出てくる」に統一する。発音も、派生語も、多義語も、細かい意味の違いも、まずは一旦捨てて、その単語が持つ最も重要な意味を日本語でひとつ覚えるところから始めるのが望ましい。

①-2 暗記法

短期間で単語を覚えるためには、とにかく回数をこなすことが重要。1か月で1000～1200語の暗記をベースに、単語帳を猛反復した。

まずはウォーミングアップ程度に、生徒に課している『ターゲット1900』を数日で終了。基礎的な単語のみで構成されており、さすがに知らない単語はなかった。次に、『単熟語EX』の準1級をスタート。いきなり1級の単語帳をやる手もあったが、慌てずにひとつ下のレベルから確実に覚えていくことにした。さすがに大学時代や教員としての貯金があったのか、単語帳の8割以上は既に覚えていた。しかし、意外にも覚えていない単語や見たこともない単語もあり、「今の高校生はこんな単語まで覚えなければならないのか」と驚いた。4週間ほどをかけて丁寧に進み、準1級頻出単語1680個+頻出熟語335個を覚え切った。

最後に『単熟語EX』の1級へ。これは本当にきつかった。レベルの高い単語が並び、見開きのページに掲載された単語がすべてわからない、なんてことも平気であった。1級頻出単語2040個に加えて頻出熟語378個が掲載されている。焦らずにベースを落とすことを決意し、英単語2040個を2分割して、6月1日から4週間で1020個の暗記に成功。これをもういちど繰り返したころには夏休みになっていた。新しい単語を覚えようと進んでいくと、どんどん古い記憶は抜け落ちていく。せっかく覚えた単語を忘れないように準1級EXの復習も挟みながら、英熟語まで暗記を完成させた。覚えている単語は線を引いて消し、覚えていない単語は/をつけて何度も繰り返し復習した。語呂合わせなども徹底活用。単語のイメージをつかめないものは Chat GPT にかけてイメージをつかみやすい例文や暗記フレーズなどを考えさせたり、画像を生成して Notion のデータベースにまとめたりした。このデジタルツ

ルを活用したテクニックについては後ほど詳細に記す。

ここでは、自分に最も合っていると感じた暗記メソッドをまとめておく。

まず、私が使用していた『単熟語 EX』1 級は、見開きで 12 個の英単語が掲載されている。左ページの左側に単語、右側に日本語訳。右ページの左側に例文、右側に例文の日本語訳が掲載されている、というレイアウトだ。



私が数カ月間実行し続けたメソッド、題して「5分間で6回トレーニング」。その名の通り、5分間で6回英単語をチェックするというシンプル極まりない作業だ。

5分間という時間制限を設けることで適度な焦りと緊張感を生み出すのが狙いだ。5分で6回というベストな回数は、試行錯誤して生み出したものだ。3分だと短く、10分だと長過ぎる。5回だと少ないし、7回だと数をこなそうと雑になってしまう。ただ単純に6回見るのは飽きてしまうので、あの手この手で工夫を凝らした。

タイマーセット

始まる前に、必ず Apple Watch でタイマーをセットする。スマホを使うとついつい他のアプリや通知に惑わされる。Apple Watch は振動で知らせてくれるので、公共の場所でも使用できる。何よりのメリットとして、腕時計でタイマーを測って英単語帳に没頭している自分に酔いしれることができる。

全体感把握

まずは意味をじっくりと見て確認し、発音。読みにくい英単語はカタカナで読みを書いておく。この時、できる限り単語のイメージを掴もうと心がける。直感的に「苦手だ」「覚えにくそう」と思った単語などはこの時点でチェックをつけておく。また、思いついた語呂合わせ

せや覚え方などはすぐには書いておかないと忘れてしまう。例えば、画像のように rumble 「ゴロゴロと音が鳴る」という単語では、発音と意味から連想した「ランボルギーニ」というメモが残っている。ランボルギーニのゴロゴロとしたエンジン音がイメージできれば、この単語は覚えたも同然だ。

網目式一問一答

このメソッドで最も大事な箇所。

ある程度発音とイメージで全体感を把握できたら、徹底的に数をこなす。まずは上から下。次はそのまま下から上。次は奇数番号6つと偶数番号6つに分けてひとつ飛ばし。次は真ん中からどンドン端に向かっていくように。もういちど上から下に。最後はランダムで目についた順番で。以下のようなイメージだ。

単語	①上から下	②下から上	③ひとつ飛ばし	④真ん中から	⑤上から下	⑥ランダム
No.1	1	12	1	11	1	11
No.2	2	11	7	9	2	1
No.3	3	10	2	7	3	5
No.4	4	9	8	6	4	4
No.5	5	8	3	4	5	12
No.6	6	7	9	2	6	2
No.7	7	6	4	1	7	8
No.8	8	5	10	3	8	9
No.9	9	4	5	5	9	7
No.10	10	3	11	8	10	3
No.11	11	2	6	10	11	10
No.12	12	1	12	12	12	6

同じ方向からでなく、色んな方向から覚えることで飽きずに作業できるうえ、順番や場所で覚えてしまうリスクを軽減してくれる。何より、目線を動かすことで何度も単語が目に入ってくるため、自然と頭に刷り込まれる感覚を得ることができる。

かの天才映画監督である岩井俊二は、『打ち上げ花火 下から見るか、横から見るか』の中で、僕も甘酸っぱい青春ノスタルジックな雰囲気のあるifストーリーを描いた。今若者にバズっているアイドルのCUTIE STREETは、大ヒットソング『かわいいだけじゃだめですか?』の中で、「タテ・ヨコ・ナナメ キュン4させちゃう」と彼女たちのかわいさを振りまいている。しかし、それでは表層的な理解に過ぎない。両者とも、そのアプローチに違いこそあれど、英単語帳で暗記するときのガムシラさと苦しさを表現したかったのだと思う。私から言わせれば、「英単語帳 上から覚えるか 下から覚えるか」であり、「タテ・ヨコ・ナナメ 暗記させちゃう」なのだ。

くだらない冗談はこれくらいにして、次に進む。

アクティブリコール

ページを閉じ、今覚えた単語 12 個のうち何個思い出せるかを試す。英語はおろか日本語も与えられないので、最も負荷の高い箇所になる。なかなか思い出せなくて悔しいという気持ちだが、また次のページへの意欲を駆り立ててくれる。

1 ユニットが 10 ページ (120 単語) で構成されており、(5 分間 × 10 ページ) + 休憩 = 1 時間で 1 ユニットの 1 周することができる。これを朝と夜の 2 回計 2 時間行うことで、1 日に同じ単語を 12 回見ることになる。月曜日から土曜日まで 1 ユニット、日曜日は 2 ユニットで 1 週間に 8 ユニット進む。これを 4 週間繰り返すのだ。最初はなかなか覚えられず嫌になるが、3 週間経過時点では 8 割近くを覚えている自分に気付いて嬉しくなる。最後の方は 1 回にかかる時間も短縮され、既に覚えている単語などを消して苦手な単語に注力できるので効率はさらに上がる。

シメには Chat GPT の機能を使って作成した Excel ランダムテストを行った。インプットばかりでは記憶に定着しない。大量かつ瞬時に取り出すアウトプットの作業によって、脳に深く刻まれていく。

単語テスト (Unit あるいは開始・終了番号のどちらかをに入れて開始) ※エンターキーを押すと単語がリセットされます。スタクシヨなどを取って書き込むこと。					
Unit →	開始番号 →		1	終了番号 →	
テスト番号	単語番号	問題	解答欄	テスト番号	単語番号
				16	338
1	1376	pledge		17	3
2	1182	aspiration		18	1874
3	1068	scoff		19	1839
4	709	abort		20	1076
5	1808	hall		21	766
6	1869	foe		22	196
7	945	precinct		23	1648
8	302	vigil		24	156
9	138	inadvertently		25	365
10	993	mortality		26	357
11	1129	rankle		27	491
12	1740	inject		28	751
13	1099	spillage		29	1386
14	1625	ferocious		30	760
15	1987	cede			

電車、寝室、友人の結婚式の二次会後、部活の夏合宿、勉強合宿などありとあらゆる場所に英単語帳を持参し、空いている時間はとにかく暗記に努めた。隣の席の井畑先生には、「受験生より単語帳やってるじゃん」と言われた。6 月に新品だった英単語帳は、10 月には見る影もないほど黒ずんでヨレヨレになっていた。何周したか分からないくらい繰り返したので、最終的にはほとんどの単語を即答できるように仕上がった。過去問演習では満点通過と 1 ミスを行ったり来たりするくらいに落ち着き、他の技能に時間と正答率の貯金を与えられる目処が立った。本番での目標は満点だ。

② リーディング 読解

リーディングは中文空所補充と長文内容一致問題の出題である。

中文空所補充問題は2題6問。約400語の短めの文章に対して、空所補充の問題が3問を2セットだ。複雑な構成の文章の論理展開などを丁寧かつ迅速に追う力が求められる。

長文内容一致問題は2題7問。約600語の長文に対して内容一致問題が3問、約800語の長文に対して内容一致問題が4問である。複雑な英文を読み込み、作問者の用意した巧妙な引っ掛け選択肢を掻い潜る必要がある。

リーディングも決して簡単ではないが、出題形式や難易度が安定している点で対策がしやすい。多くの1級受験者、特に日本人の英語学習者たちにとっては稼ぎどころである。大学受験などを通じて鍛え上げてきた読解スキルが発揮できる上、純粋に読み物としても興味深い題材であることが多く、読んでいて飽きることがない。

何より、受験者の読解力と英語力を試すには相応しい、完成された美しい作問を堪能する事ができる。英語教員なら誰でも同意してくれると思うが、試験を作る側になると作問の難しさに直面する。ただ闇雲に本文に穴を開けて知識を聞くだけではダメで、解答根拠となる箇所を選定したり、選択肢を言い換えたり、知識の有無でふるいにかけてながらも、本文の主題を理解できていたかを試したりと、作問は本当に奥が深い作業だ。問題形式に制限がなければあの手この手で読み手の力を試すことが可能になるが、英検のリーディングは空所補充と内容一致問題の2つしか形式がない。それにもかかわらず、英検の読解問題はどれも本当にクオリティが高い。他社が作った予想問題や模試では選択肢や論理展開の作り込みが甘かったり粗かったりするが、本試験ではそういったことはあり得ない。大学入試などで見られる「悪問」や「捨て問」の類も存在しないため、そのすべてが血肉となる栄養価満点の良問揃いだ。

前述した英単語暗記によって文中の不明語がみるみる減っていき、正答率が安定していった。いくつか過去問を解いていく中でミスをするのがあまりなく、満点から2問ミスの間を彷徨っていた。安定して満点を取るには更に卓越した語彙力と読解力の養成が必要であるが、リーディングよりも伸びしろのあるライティングに時間を投下した方が期待値が高いと判断し、深追いしなかった。力が落ちないように1週間に数題のペースで取り組み、丁寧な読解を心がけつつもスピードを追い求めた。そして、演習よりも復習のプロセスに時間をかけ、一度の演習でより多くの学びを吸収することを意識した。終わったあとは必ず数回音読をして、英語を英語のまま処理できる力を養いながら、英文の構造と作文のクセを見抜くように注力した。本番での目標はもちろん満点だ。

③ ライティング 要約文

ライティングは要約文と意見論述問題の2問が出題される。

前述の通り、要約文は2024年度第1回の問題から実装された新傾向の問題である。英文を

読み、その内容を適度に言い換えながら英語で要約する。英文は300語程度で決して長くないが、論理構成を複雑にすることで筆者の主張を見抜きにくくしてある。また、90-110語という語数設定は、ポイントだけに絞ると短くなり過ぎるし、具体例を入れ過ぎると語数オーバーするように調整してあるため、どれだけ「いい塩梅」で本文の内容をまとめていくかの力が試される。

後述するが、意見論述文と違って「ネタ」を仕込んでおく「英借文」テクニックも使うことができないので、純粋な読解力と表現力を磨いていく必要がある。これまでも英文を読みながら自分なりに内容をまとめて行く訓練はしてきたつもりだったが、体系立てて要約のトレーニングをしたことがなかったため、どんな手をどれくらい打てばいいのか判断するのに苦労した。新傾向の問題であるため、過去問や参考書も出揃っていない。まずは単語や読解、意見論述といった他の大問を安定させるために時間を使い、試験1ヶ月前ほどから本格的に対策をすることにした。

最終的には、『英検合格のための要約問題 予想問題集』の問題を準1級のものから解きまくり、トップ予備校講師と監修するネイティブが作った模範解答と自らの回答を照らし合わせながら、求められている塩梅を探った。そして、自らの回答は必ずChat GPTにかけて採点をさせ、より洗練されたフレーズなどを提示してもらった。時間を置いて解き直しを行い、予備校講師・ネイティブ・Chat GPTの提示した解答と自分が使える範疇の表現とのすり合わせを行いながら、採点者に評価されるために必要なエッセンスを身体と頭に叩き込んだ。

「まずは読む段階から、一般・抽象と特定・具体を見分けよう。」「要約は本文の圧縮ではなく切り抜きだ!」「相手の要求値を正しく理解して、求められている抽象度に落とし込もう。」—生徒たちに向けた言葉が自分に返ってきた。

演習を重ねていくにつれ、だんだんと得点が上昇してきた。満点に近いような高得点を叩き出し、Chat GPTに褒められることも増えてきた。一方で、どれだけ練習を重ねても時間が短縮できず、平均して23分、長い時は25分以上かかってしまうこともあった。自分の頭の中では満点近い回答ができていたが、いざ出力してみると稚拙に見える。何度も書き直している間にも時間は過ぎていく。全体のバランスを考えると15分が理想、どれだけかかっても22分ほどが限界というラインだ。何度も納得行くまで書き直したいが、その時間はない。自分の中の「損切りライン」を定めるのに苦労した。加えて、もともと字が綺麗ではないため、急いで書くどうしても読みにくい走り書きの字になってしまうのも課題だった。少しでもキレイに書こうとすると、どうしても文字を大きくしないといけない。解答欄が小さく、このバランスを取るのにも工夫が必要だった。

そこで、目標点は少し下げ、32点満点のうち24点(75%)とした。満点近い得点を目指せば時間がかかること、新傾向で採点基準のサンプルが少ないこと、このあとの意見論述文の方が得点を望めそうなことなど、様々な要素を考慮して編み出した目標点である。24点狙い

なら20分ほどで通過でき、全体のバランスを崩さないまま安定して合格ラインに乗ることができるという読みもあった。自分の合格のために最も期待値の高い行動として、要約は得点源としない決断をしたのだ。

直前1ヶ月は1日に1本のペースで要約文を書き、復習と音読に時間を割いた。追い込みの時期では意見論述文と合わせて55分という時間制限を設け、時間内に得点を最大化する練習を行った。

④ ライティング 意見論述文

英検1級の意見論述文は社会性の高いトピックを幅広く扱う。例えば、「オンライン授業によって大学の学位の価値は下がったか」「学校教育では、子どもの創造性を高めるようなカリキュラムを実施すべきか」といった教育的なテーマから、「累進課税制度は理に適った経済政策か」「日本の移民受け入れ政策は現状よりも寛容になるべきか」「個人のプライバシーは国民の安全よりも尊重されるべきか」といった、普段何気なく過ごしているだけでは考えられないようなトピックに及ぶ。200-240語という語数制限は、1つのアイデアを掘り下げるには長く、3つのアイデアを端的に述べるには短いという絶妙なラインであり、適切な語彙や構文を用いて簡潔で中身の詰まった主張を展開する必要がある。闇雲にアイデアを書き連ねるだけでなく、相手に自分の主張を理解してもらえようとする説得力のある論理展開が求められる。

これまで、英検のライティングはこの意見論述問題1問のみで構成され、全体の配点の1/4を占めていた。ライティングやリーディングで多少失敗しても、このライティングで上振れを引けば大逆転合格を手にすることができるし、その逆もまた然りというセクションであった。生徒たちに指導するときにも、「英検に受かりたければ真っ先にライティング対策をしろ」と口酸っぱく言うほど重要な箇所である。要約問題が追加されて比重は半分以下になったものの、まだまだ全体配点の1/8を占めている。また、意見論述にかかる時間をどれだけ削減できるかによって、他の箇所にかかる時間も変わってくる。リーディングで満点を取りたい私にとっては、意見論述文の出来がそのまま合格に直結するといって差し支えない。

大学時代から英文でのエッセイライティングに親しみがあったので、書くという行為そのものは苦手ではなかった。しかし、幅広いトピックに対して芯をくった回答を素早く出せるほどの力は持ち合わせていなかった。試験までの4ヶ月で他の技能を鍛えながら同時並行でライティングの準備を充実させるのは難しい。英字新聞やニュースなどで情報収集を行い、トピックに関する知見や英語のストックを作る時間はないのだ。

まず、英検の模範解答を徹底的に分析した。過去数年分の問題の模範解答をChat GPTに読み込ませ、満点のラインを覚えさせた。次に、自分が書いたエッセイをいくつか読み込ませ、その差を測った。思ったよりも差が大きく、現実的に満点や高得点を目指すのは厳しいという

判断をした。そこで、32点満点のうち26点(81%)を目標点とした。馴染み深いトピックなら簡単に到達できそうな点数であるが、自分が疎いトピックが出てきたときにも安定して80%を取るのには難しい。当日の上振れに期待しながらも、大怪我をしない運用が求められる。

そこで、私が取った作戦は「英借文」作戦である。端的に言えば、「模範解答や良いフレーズをたくさん暗記して、できる限りコピペで乗り切る」というものだ。「英作文」を「借りる」から「英借文」。英検を受けたことがない人からしたら驚かれるだろうが、これは受験者にとってはれっきとした常套手段なのである。喩えるなら、駆け出しのお笑い芸人のようなものだ。どんなお題を振られても即興で面白い大喜利回答が出せる一線級の芸人になりたい。短期間では難しい。もし満点回答は出せなくても、ちょっとひねった事を言って面白くなりたい。それなら、面白いとされているお笑いのフレーズやパターンをできるだけ暗記して、使い回せば良い。真似している間にだんだんと自分の意見や型が構築されていき、自分だけのオリジナルが完成していくのである。広く浅く当たり障りのない知識を暗記で増やしていきながら、ところどころでオシャレなオリジナルフレーズを入れるように心がけていくことにした。

ジャパントイズ社が出している『英作文問題完全制覇』という参考書がある。英検受験者にとってはバイブルのような存在で、意見論述文に使えるフレーズやモデルエッセイが大量に収録されており、幅広いトピックに対しての模範解答のインストールにもってこいである。私はこの参考書に掲載されているモデルエッセイ30個をすべて覚えることに決めた。まずは自分なりの答えを用意して、それをモデルエッセイと見比べる。共通している箇所はそのまま採用し、参考書の方が良いと思った箇所は拝借するというルールを決めた。自分なりに論点をまとめながらメモに残し、後はひたすら音読。ゆっくり内容を噛み締めながら読み、その後徐々にスピードを上げて回数をこなしていく。リスニングとスピーキングの対策を兼ねることができるので、一石三鳥のトレーニングである。参考書のデータは電子書籍であり、スマホやタブレットに入れる事が可能だ。バックグラウンドでアプリから音声を流すことができる。このおかげで、机に座らずに作業をすることが可能になる。朝の身支度中やお風呂の時間ちょっとした時間をこの「模範解答インストール音読」に充て、最終的には10～15周ほどすることができた。

直前1ヶ月は1日に1本のペースで意見論述文を書き、時間がある日や休日は2本書くこともあった。安定して25～26点の間を行き来しながら、29～30点近い英文を書くこともできるようになってきた。この調子で行けば当日どんなトピックが来ても80%近くを出すことができるはず。

あとは時間との戦いである。要約と足して50分で通過できれば理想的だが、現実的には53分～55分ほどかかることが多かった。得意な「教育」「テクノロジー」「文化」「メディア」が来たら最速50分切り。苦手な「政治」「経済」系が来たら55分通過の「損切りライン」を

決定した。

⑤ リスニング

リスニング自体にはそこまで苦手意識もなく、かといって得意と胸を張れるほどでもなかった。大怪我をすることもなさそうな代わりに、大きく上振れすることもないだろうな、という予想だった。

リスニングは前述の通り、Dialogues → Passages → Real-Life → Interview という流れで進んでいく。

Dialogues は可もなく不可もなくという印象。事前には選択肢のポイントにアテをつけ、どこが争点となりそうなのかチェックしておく。解答時間がタイトなので、選択肢を吟味する暇がない。その分、選択肢はそこまでひねった作り込みはなく、きちんと要旨が聴き取れば自然と正解を選ぶことができる。迷ったら直感的に選び、次の問題に持ち越さないことを意識した。

Passages が最も厳しい箇所になる。準1級のリーディング問題くらいの文章が読まれ、2段落構成になっており、各段落から出題される。概要→詳細 / 主張→反論 / 時系列 or 反時系列 のどれかに当てはまることがほとんどであるため、闇雲に聴くのではなく、段落ごとの展開のパターンを意識することに努めた。ここも解答時間がタイトであるが、それを逆手に取れば、固有名詞や数字を問われることはない。とにかく要旨を捉えることに注力し、ところどころ聴き逃しても慌てない練習をしたところ、正答率が格段に上昇した。

Real-Life は次に苦手な箇所だ。聴き取りの分量も少なく、解答時間も比較的余裕がある反面、巧妙な引っかけ選択肢が存在し、条件を正確に把握しながら根気強く聴いていく力が要求される。最も厄介なのが、後半戦に差し掛かってくるが故の集中力の低下である。130分近く戦ってきた頭と身体には細かい条件の聴き分けがダメージとしてジワジワ蓄積される。ここはあまり戦略や戦術めいたものはなく、量をこなして慣れることを心がけた。そして、最後は根性で乗り切るタフさを鍛えるため、仕事から帰宅直後の最も疲れが溜まっている時間などを狙って演習をした。

Interview はかなり得意な印象。聴き取る分量自体は多いがストーリーがあって面白く、自然と惹き込まれるような内容である。インタビュアーがした質問にゲストが喋り続けていくため、発話者の切り替えも少なく、頻繁に意識する必要がない。また、試験の最後ということもあり、「あと少しだけ頑張ろう」とモチベーションが高まる。メモを取る必要があるような細かい選択肢も存在せず、要旨をきちんと聴きながら楽しんで解くことが可能だ。これといった対策は行っていない。

試験そのものに対しての難易度よりは、リーディングが終わった後にすぐ切り替えられるかどうか・集中力が保てるかどうか・トイレに行きたくなっていないかといった、構造的な

ものが課題になることが予想された。そこで、リスニングの対策は仕事後や他の技能の後など、疲れた時間に行くことを意識した。加えて、ノイズキャンセリングのイヤホンなどを使っ
ての演習は避け、スピーカーから音声を流して演習を行った。スピーカーの位置も自分の正
面、右側、左側、近め、遠めなど様々なパターンを試すことで、当日の座席に左右されない
ように工夫した。そして、YouTubeには「書く音や紙をめくる音」「隣の人が咳をしている音」
のBGMを収録した動画があるので、これらを活用して気が散らないような練習をした。

リスニング対策そのものに対して多くの時間を投下するのではなく、リーディング、ライ
ティング、そしてスピーキングの対策の一環として行った学習でリスニング対策を兼ねるよ
うに心がけた。詳しくはすでに述べた通りだが、英単語を覚えるときには発音を意識し、声
に出して覚えるように心がけた。リーディングは読み終えた英文の音読を必ず行った。ライ
ティングは模範解答やモデルエッセイを繰り返し音読した。どの作業を行うときも、できる
限り英語の音声を活用していた。これにより、英語を聴くことへの敷居を下げていった。

演習を行う中で、26点や25点といった高得点を取ることもあった。しかし、目標点は24
点(89%)に設定した。どんなに集中しても満点は難しいうえに、1問を深追いすると次の問
題を聴き逃す可能性がある。あまり高いハードルを設定することなく、自然に届く最高得点
を目指すような形を取った。

● 一次試験 最終調整

① リーディング+ライティング試験 100分間の作戦

解く順番についても様々吟味し、色んなパターンを試した。その結果、リーディング+ラ
イティング試験 100分間のオリジナル作戦は以下のように決まった。

順番	技能	セクション	目標時間	損切り ライン	目標点	下振れ
1	ライティング	要約文	20分	22分	24/32 (75%)	22/32
2	ライティング	意見論述文	30分	33分	26/32 (81%)	23/32
3	リーディング	単語・熟語空所 補充	7分	9分	22/22 (100%)	19/22
4	リーディング	中文空所補充	13分	15分	6/6 (100%)	4/6
5	リーディング	長文内容一致	25分	27分	7/7 (100%)	5/7
			合計 95分 (5分残し)	合計 106分	合計 85/99 (86%)	合計 73/99 (73%)

最初は得意なリーディングから解くことでリズムを作り、時間の余裕を持ってライティン
グを仕上げる作戦を取ろうと思っていた。単語・熟語空所補充問題から掲載されている順番
通りに解くシンプルなパターンだ。解き初めの方はスイスイと進んでいくが、時間が経過す

るに連れてだんだんとライティングの時間が頭にチラついてきてしまう。そして、「リーディングで満点を取らないと後が苦しくなる」と、どうしても焦りが出る。微妙な選択肢を吟味するときに過剰に解答根拠チェックを行うようになってしまい、正答率の安定と引き換えに不要な時間がかかるようになってしまった。

得意な単語・熟語空所補充を後回しにして中文空所補充から解くパターンも試したが、体感あまり差がない上に、順番を飛ばして解く最大の弊害、「段ズレによるマークミス」の可能性を捨てきれなかった。

いっそライティングから始めるのはどうだろうか、意見論述から解くパターンを試してみた。しかし、これもトピックの「ガチャ」に失敗したときに大崩れしてしまう可能性を秘めていた。最初に取り組む意見論述の出来が悪ければ敗戦がチラつき、取れる問題まで焦って落とす可能性がある。

と、様々な事情を考慮し、最終的には要約文から解き始めることに決定した。最も苦手意識がある箇所を最も頭が冴えている試験開始直後に持ってくることで負担を軽減。多少失敗したところで目標点が高くないため精神的ダメージも少ない。意見論述でリズムを取り戻し、リーディングにもスムーズに移行できる。もしも要約も意見論述も「大怪我」の雰囲気が出てきた場合には早めに「損切り」し、リーディングの満点に脳と時間のリソースを割く。順調に行けば、ライティングで疲れた頭を得意な単語・熟語空所補充でリセットしつつ、中文空所補充と長文内容一致に向けて頭を読解モードに切り替えていくこともできる。多少ライティングが押ししてしまった場合には単語・熟語空所補充でスピードを上げて時間を捻出するプランも取れる。それでも時間が足りない緊急事態には、読解のスピードをさらに上げて、多少強引にでも試験時間内にすべての問題に回答できるように調整することでリスクヘッジ。例えば、不正解選択肢もじっくり吟味するところをカットし、正解選択肢を見つけた瞬間次の問題に移る、という手法が取れる。このオリジナル作戦が固まったことで、精神的にも肉体的にも随分と楽になった。

つくづく思うが、英検1級というゲームは本当に奥が深い。難易度や時間制限など、要求値が尽く絶妙に設定されている。受験者一人ひとりに最適化された戦略と戦術があるのだ。徹底的に「敵」と「己」を知ることで、一見無茶に思える箇所も、攻略の糸口が見えてくるのである。英語力そのものを問うてくる資格であることは間違いないが、個人的には、「頭を使い、攻略の糸口を探る姿勢」も問うているのではないかと思っている。参考書や他人の受け売りだけでは、表層的な理解にしか辿り着くことができない。何も考えずに過去問を解いただけで受験するのもいいが、大抵は「単語が難しかった」という陳腐な感想とともに不合格になるのが関の山だ。

圧倒的な英語力があれば、作戦なんて考えなくても良いのかもしれない。ネイティブや帰国子女といったハイレベルな受験者は、与えられた問題を順番通り素直に解いていけば勝手

に合格点に達しているのだろう。しかし、私を含めた多くの人はそうではないはずだ。何度も何度も受験して、「いつか合格できたらいいな」と思っているようでは到底合格できない。合格を目指すなら、「期待値」と「再現性」という観点を突き詰めるしかないのである。10回受けたら8～9回は安定して合格できるような方法を考え抜いて実行する以外に、ネイティブや帰国子女たちを出し抜くことはできない。

② リスニング試験 40 分の作戦

順番	技能	セクション	目標点	下振れ
1	リスニング	Dialogues	9/10 (90%)	8/10 (80%)
2	リスニング	Passages	9/10 (90%)	7/10 (70%)
3	リスニング	Real-Life	4/5 (80%)	3/5 (60%)
4	リスニング	Interview	2/2 (100%)	1/2 (50%)
			24/27 (89%)	18/27 (67%)

③ 演習の記録

実際の過去問や予想問題の演習記録は本文注釈に掲載。

● 演習への取り組みと当日のシミュレーション

ただ演習をこなすだけでは、本番の不測の事態に対応できない。結局は本番で最高のパフォーマンスができたか否かが問題であり、練習でどれだけ上手く行っても意味がない。ただし、練習でできないことを本番に要求するのはおかしい。練習の質にこだわり、本番を含めた当日は、練習の成果を発揮することだけに集中するような「仕組み」を作ることが大切だ。

① 演習へのこだわり

練習ではできているのに本番で結果を出せない人は、本番をイメージした練習ができていないことが多い。私は以下の4点を意識して取り組んだ。

演習の環境作り

毎回完璧とまではできなかったが、できる限り本番の試験会場を再現できるように心がけた。試験時間を本番に合わせるのは基本中の基本。前日や当日の食事、問題用紙や解答用紙のサイズ、マークシート、筆記用具、周囲の雑音、机の揺れ、隣の人との距離感、試験会場の気温、お手洗いなど、様々な要因をリストアップしておく、本番にどんな環境に置かれても対応できるようになる。自宅がメインだったが、時にはカフェを利用して隣に人がいても集中する練習をしたり、カフェの場所を変えて机が狭いパターンや椅子が硬いパターンも

試した。自宅では暑い部屋と寒い部屋のパターン再現や、咳やくしゃみでうるさいパターン、リスニングの音声スピーカーが遠いパターンなども行った。

また、14時頃に集中力がマックスになりつつも、16時半ごろまで集中力が続く条件を探し続けた。前日の睡眠時間は勝負に直結する。意識し過ぎて寝られない可能性があるので、最低7時間を基準にした。汚い話だが、お手洗いや勝負を左右する重要ファクターだ。どれくらいの食事や水分をどれくらいの時間にとるとどれくらいお手洗いにいきたくなるのかも数パターン試した。あえて沢山水分を取ったり、前日に辛いラーメンを食べてお手洗いを我慢するパターンを試したときが最もしんどかった。結論として、朝ご飯をしっかり食べて、お昼はチョコやグミなどの糖分をとれるものをつまむ。水分も11時頃にエナジードリンクを飲み、そこからは控えめに。試験会場では口がさっぱりするルイボスティーで口の乾きを抑える程度にしか飲まないことに決めた。

筆記用具も重要だ。iPadとApple Pencilを使用して勉強することも多かったが、本番を意識した演習を行う際には必ず紙とシャーペンを使用した。特にライティングにおいて、字が汚い私にとっては、ペンの書き味がアウトプットのクオリティに直結する。YouTubeやAmazonなどのレビューサイトで評判の良い筆記用具をリストアップし、文房具店で試した。複数の候補から選び抜いたペンのうち、結局は「ぺんてる オレンジネロ 0.5mm」を採用することに決めた。自動芯出し機構を搭載しており、いちどノックすればその後は芯を出す動作が必要ない。重心の位置も絶妙であり、素早く手を動かしても疲れることがなく、自分の書きたい字とのギャップが最も少なかった。ライティング以外の箇所では最もお気に入りの「PILOT S20 5mm」を使用するつもりだった。しかし、演習を重ねるにつれ、マークシートを塗る作業に時間がかかっている感覚があった。試しにマークシート専用シャーペンを使用してみたところ、明らかに時間の短縮につながる感触があったため、「ぺんてる マークシートシャープ AM13-B」を採用することにした。ライティングから解き始める際にはオレンジネロを持ち、書き終わった瞬間にマークシートシャープに持ち替えることを決めた。

記録の徹底

得点のみならず、意識したことや実践したことはすべて記録するように心がけた。記録が残っていないと、どの条件でどんな結果を出せたのかを比較検討することができない。自分の力やコンディションが原因なのか、純粋に相手のレベルが高かったのかによって、取るべきアクションプランは変わるのだ。

期待値調整と戦術の実践

解く順番や損切りラインの実践も重要だ。様々なパターンを試しながら、最も期待値の高い戦術を探った。闇雲に解くだけでは時間が足りないように設計されているので、解く順番

と損切りラインを徹底し、「部分」では負けていても、「全体」で勝つように取り組んだ。

感想戦

掲げた目標に対して自分のパフォーマンスの達成度を分析した。達成できた場合とできなかった場合でどんな差があったのかの要因や原因を書き出して、解決策まで考えて、初めて演習する意味がある。

例：集中力が低下し、リスニングで重要箇所の聴き逃しが多かった。

原因：午前中に集中して作業を行ったことで集中力が低かった。また、ご飯を食べた後に演習をしたことでボケっとする感じがあった。

解決策：演習を行う日の午前中は単語のチェックなど軽めの作業しか行わない。朝ご飯をそれなりに食べて、お昼はチョコとウイダーを試してみる。

② 当日のシミュレーション

当日の会場と時間割は以下の通り。

10月6日（日）上智大学6号館

12:40 入場開始 13:20 着席

14:00～15:40 リーディング＋ライティング試験

15:42～16:22 リスニング試験

マークシート回収後、解散

これまで行ってきた演習などを総合的に鑑みて、当日の過ごし方をシミュレートして、以下のように決定した。

睡眠：前日は23時に就寝。当日の朝7時までには起床。

食事：8時に朝食。16時半まで耐えられるように炭水化物を多めに。水の飲み過ぎに注意。11時にモンスターエナジーの緑を飲む。コンビニでレイボスティーとグミとチョコとウイダーを買う。

服装：脱ぎ着しやすいトレーナーを着用。ヒートテックタイツを着用し、下はジョガーパンツ。試験会場が暑ければヒートテックタイツをトイレで脱ぐ。薄手のアウターを持参し、足元が寒ければ膝にかけることを検討。普段はコンタクトだが、疲れてきて目が乾くので試験中はメガネを着用。

勉強：起床後からライティングの音声を音読して頭を英語に切り替える。朝食後はこれまでの感想戦をまとめたノートを見返して最終確認。試験会場では英単語帳の苦手単語と熟語をチェックし、逆にそれ以外は不安要素になりそうなのでやらない。

試験会場での過ごし方：試験会場では座席位置をチェックしてこれまでのパターンと照らし合わせたり、トイレの位置を複数確認したい。入場開始の時間には会場に到着しておき、

最速で入場する。家が近いので、電車ではなくLUUPで移動。試験教室で英単語を最終チェック。可能ならノイズキャンセリングイヤフォンで集中BGMを聴きたい。

●一次試験当日

① 試験会場まで～試験会場にて

予定通りの時間に起床し、そこからは決めた通りの過ごし方を再現した。「何をしようかな」「緊張するな」という手持ち無沙汰な時間を排除することで、ストレスの軽減につながった。目の前のことに集中することができており、いい感じだ。

入場開始時間に上智大学に到着した。試験教室に到着すると、到着した受験者から自分の座席を選べるシステムになっていたの、迷わずスピーカーの真正面で最も近い場所を確保した。他の受験者が目に入らず集中できるうえに、リスニングの聴き取りも行いやすい。試験前に何回かお手洗いに行って、チョコとグミを食べて待機。自分が考え得るすべての準備をして、試験開始を待つことができた。

試験が開始されると、予定通り真っ先に要約からスタート。内容は「ガソリン車の普及」について。練習問題では見かけなかった内容だが、別段新しいこともない。練習した通り読みながらメモを取り、日本語でまとめたものを適度に言い換えながら英語にしていって。想定通り、ぴったり20分で通過。

次は意見論述。内容は「自由貿易は経済成長を促進する最善の方法か?」と、苦手な経済系のトピックであった。何とか自分なりにストックしてあった表現を軸に意見を構築した。「自由貿易は経済成長を促進する最善の方法と言える。①経済成長に必要不可欠である、適切な競争を保つことができる。自由貿易制度の反対派は関税によって地元企業が守られると主張するが、これは必ずしも正しくない。世界企業との競争から隔離された地元企業は企業努力を怠り、より良いサービスや製品開発へ精を出さなくなってしまう。すると、消費者たちは質の低いサービスや製品を享受することになり、結果的に経済成長につながらなくなるのだ。②地元経済の雇用の促進につながる。多くの国際企業が地元経済に参入するチャンスとなり、地域住民も工場や物流などを中心とした雇用機会の増加の恩恵を受けることができる。③新しいビジネスアイデアを生む。地元企業と国際企業が交流する場が増えることで、思わぬサービスや製品アイデアの創出につながるかもしれない。確かに自由貿易のデメリットはあるかもしれないが、自由貿易のメリットはそれを上回ると言えるだろう。」アイデア出しには時間がかからなかったが、より良い言い回しを探している間に時間がかさみ、32分ほどで通過した。ここまでで52分。考えていたラインから2分ほど押しているが、比較的順調と言える。

次に単語・熟語空所補充問題だ。遅れている2分をここで巻き返したい。順調に解き始めるが、(5)で自信がない問題に遭遇。なんとか他の選択肢を切って対応できたが、余計な時間を使った。「勘弁してくれ」と思いながら進むと、(16)で手も足も出ない問題が出現。4

つの選択肢中2つの単語しか知らない。仕方がないので、2つのうちで「これはない」という方を消し、「まあ、変ではないでしょ」と思える方を採用した。その後も少しひねった問題が多く、予定外に時間を使う結果となった。時間もそうだが、正答率に不安があり、多少の焦りが見られた。

次は中文空所補充問題。ここに苦戦した。普段の演習でも1ミスは覚悟していたが、1題目に2問も自信がない箇所が出てきてしまった。どちらの問題も、2択まではすぐに絞り込みをすることができたが、最後の2択が切りきれない。単語・熟語空所補充の大問で自信がない問題が多かったことで、「ここで取り返したい」という気持ちが働き、いつもよりも慎重に吟味を重ねた。すると、どちらの選択肢にも正解根拠と不正解根拠が浮かんできてしまい、最後は時間制限の損切りラインになってしまいギブアップ。ここまでで想定より3分半ほど遅れており、長文内容一致問題では正確性を多少犠牲にしてもスピードを意識して解くことを決意した。

最後に長文内容一致問題。1題目はスムーズに通過。しかし、遅れている3分半を巻き返すことはできていない。2題目に突入した時点で15分ほどしか残っておらず、かなり焦った。持っている全ての集中力を投下して問題を解く。スラスラと2問を取った時点で残り8分。ここから最後の2問に信じられないほど苦戦した。どれだけ読んでも選択肢が切れない。何とか絞り出して1問解いたあとに残っていた時間は2分。ここで死ぬほど迷った。あと1問にすべてを捧げるか、残り時間でマークのチェックをするか。10秒ほどで結論を出した。「45秒で可能な限り消去法をしてあとは運任せ。1分使ってマークのチェックをする。」最後の問題は2つ消去した時点で45秒が経過したので、最後は適当に選ぶことになってしまった。10回の演習全てで満点を取ってきた大問で、本番に初めて解き切ることができなかった。最後はマークシートのチェックをして終了。遅れていた3分半がそっくりそのまま足りず、これまでで一番厳しい戦いとなった。

リーディング終了後、試験監督がリスニング音声を流す準備をするため、2分間の休憩がやってくる。とはいうものの、手元には問題冊子が置いてある。通常、この2分間でリスニングのDialoguesの選択肢を読むのが定石だ。しかし、想定外の苦戦と過集中で頭が混乱していた。冷静さを取り戻そうとすればするほど、数分前の苦しい記憶とマイナスなイメージが思い浮かんでくる。「解き切れなかったのは初めてだ」「あれだけやってきたのに落ちたらどうしよう」「生徒にどんな顔で報告したらいいんだ」…

気がつくと、リスニング試験の開始の音声が流れ始めていた。何とか切り替えようと手を動かすも、1問目からいきなり分からない。焦った。切り替えて2問目。これも聴き取れない。どうしよう、どうしよう、どうしよう…

私は頬をパンパンと叩き、もういちど全神経を集中させていた。無意識の行動だった。(近くの受験生、本当にごめんなさい。)そこからは何とか切り替えて聴くことができたが、全体

的に難しいと感じる問題が多かった。Passages は覚醒してほぼすべてを聴き取ることができたが、Real-Life では1問だけ2つの比較かつ最初と最後を解答根拠にする問題が出てきて対処できなかった。最後の Interview を終えたときには、満身創痍という言葉がふさわしい状態だった。

終わった。終わってしまった。フラフラと試験教室をあとにした。

② 試験会場を後にして

パフォーマンス自体は悪くなかった。想定していた下振れパターンを使って対処できたはずだ。しかし、どう考えても得点に自信がない。全体的に難しかったに違いない。でも、そうじゃなかったらどうしよう。落ちたかもしれない。

試験教室を出ても、まっすぐ歩くことができなかった。会場を後にできず、そのまま上智大学内で単語の丸付けをした。迷った(5)は合っていたが、(16)は不正解だった。真っ先に違うと切った eclipse が、「人の悪い部分を浮き彫りにする」という知らない意味で出題されていた。厳しいって。ただ、奇跡的に他の単語は全問正解しているようだ。それ以降は解答が分からないので、家に帰ろうとした。X (Twitter) を見ながら帰っていると、英検1級で満点を獲得している(参考⑥)一ノ瀬先生という有名な講師の方が解答速報をポストしていた。そのまま四ツ谷駅のカフェに寄ってオレンジジュースを頼み、がぶ飲みしながら丸付けを行った。やはり、中文空所補充も長文内容一致も自信がなかった箇所は間違っているようだ。リスニングは思ったより耐えているかもしれない。おそらく合格しているだろう。しかし、目指している高得点には程遠い結果となることは間違いなさそうだ。悔しくて、1時間以上滞在してリーディングの問題をすべて解き直した。

● 一次試験結果発表

試験の結果が出るのは約3週間後、二次試験が5週間後である。一次試験を受けたあとは、すぐさま二次試験の対策に移るのが大原則だ。しかし、自分の性格上、結果が気になって二次試験の勉強に手がつかないことは容易に想像できた。だからこそ、余裕を持って一次試験を通過しておきたかった。しかし、それができそうもない。

結果が出るまでは、地獄のような時間だった。自分の得点をフルイングリッシュのサイトと照らし合わせたり、Xを見て他の受験者で自分よりも点数が低い人を探したり、Chat GPTに「合格できるかな?」と話しかけたりしていた。あれだけ高らかに宣言したので、生徒にも「英検どうでしたか?」と聞かれる。ありのままを全て喋って笑ってもらうしか無かった。

試験から2日後。ウダウダとしている私を見た奥さんが声をかけてきた。「普通に考えれば受かってるはずなんでしょ? 二次試験の対策しなよ。いつまで言い訳して逃げてるつもり? これで二次試験落ちる方がよっぽどやばいでしょ。あれだけ生徒に偉そうなこと言ってるの

にダセえなあ。」今考えても絶対に言い過ぎだと思う。

ただ、これで吹切れることができた。できることを精一杯やっていくしかないという覚悟を決め、結果が出るまでの数日間は必死に二次対策をすることができた。

試験科目	2024	2023	2022
一次スコア	2105	2028	1900
英検CSEスコア	729	694	682
CEFRレベル	C1	C1	C1

技能別の正答率を表示しています。今回のあなたの正答率を、「合格者・全受験者の平均正答率」と比較することができます。

—詳細を閉じる

	正答数 /問題数 ※	正答率		
		あなた	合格者の 平均	全受験者の 平均
Reading	31/35 問	89 %	68 %	51 %
Listening	20/27 問	74 %	77 %	59 %
Writing ※	48/64 点	75 %	76 %	62 %

※ Writingでは、得点の合計や得点率を表示しています。

結果が発表されたのは、仕事のお昼休みのこと。iPadが水没するくらいの手汗をかきながら番号を打ち込み、サイトにアクセスした。画面には「一次試験 合格」の文字が。

結果だけを見れば、自分の想定していた範囲の中にすべて収めることができたこと、合格ラインに対しては余裕を持つことができたことは収穫と言えるだろう。

しかし、目標としていた得点には及ばなかった点は心残りだ。自分が想定しているパターンの中では、かなり下振れに近い素点となってしまった。特に、リスニングでの失点が大きく響いた。

言い訳をするのは簡単だ。フルイングリッシュのサイトを参照しても、素点に対してのCSEスコアが普段よりも高く出る傾向が見られたため、やや難しめの回だったと言える。あの一ノ瀬先生も当日の生配信で「リーディング、リスニングともにいつもより難しかった。特にリーディングの最後の2問で本当に迷った。」とおっしゃっていたのを覚えている。

ただ、そんなものは気休めにしかならない。とある漫画のワンシーンで、「実力とは、あらゆる要素がすべて下振れしたときに出る最低限の結果のことを言うんだよ」というセリフがあった。結局一ノ瀬先生を含めた最上位合格者たちは以前と遜色なく、満点近い得点を取っている。結局は私の見積り甘さで実力不足が露呈したまでのことだ。

試験までの取り組みの中に見直せるものがないか改めて精査するのは当然として、実力そのものの底上げが必要不可欠だと痛切に感じる結果となった。二次試験に向けて、より一層気合いが入った。

当日の結果詳細

リーディング	得点	CSE スコア	ライティング	得点	CSE スコア
語彙穴埋め	21/22		要約	内容 5/8 構成 6/8 語彙 6/8 文法 6/8	
中文空所補充	4/6		意見論述	内容 7/8 構成 6/8 語彙 6/8 文法 6/8	
長文内容一致	6/7		合計	48/67(75%)	682/850(80%)
合計	31/35(88%)	729/850(86%)			

リスニング	得点	CSE スコア	技能	得点	CSE スコア
Dialogues	6/10		リーディング	31/35(88%)	729/850(86%)
Passages	9/10		ライティング	48/64(75%)	682/850(80%)
Real-Life	3/5		リスニング	20/27(74%)	694/850(82%)
Interview	2/2		合計	99/126(79%)	2105/2550(82%) : 合格
合計	20/27(74%)	694/850(82%)			

●二次試験考察

二次試験は面接試験であり、技能はスピーキングとなる。

スピーキング 40点満点

日本人面接官とネイティブ面接官の2名によって行われる。試験中はずっと英語を話すことになる。

☆入室→日常会話

試験監督から呼ばれ、試験教室に入室する。お互いに自己紹介を行い、簡単な日常会話となる。この部分は採点されないが、スムーズな会話でスピーチにつなげていきたい。

☆スピーチ

トピックを5つ提示され、受験者は1つを選んで2分間のスピーチを行う。トピックの内容はライティングの意見論述文に近く、社会性の高いものが採用される。「暴力事件とサイバー犯罪、どちらが社会にとって脅威となりうるか?」「男女平等の社会を実現することは可能だと思うか?」「日本は国際社会における存在感を失いつつあると思うか?」など、決まった答えが存在しない質問に対して、自らの意見を論理的に述べる力が求められる。

☆質疑応答

スピーチに関連する質問を含めた質疑応答の時間が5分設けられる。社会性の高いトピック

クに対する知見や語彙、そしてそれを自然な会話の中で発話する能力が求められる。

スピーチ、質疑応答、語彙と文法、発音の4観点が各10点の40点満点で採点される。日本人とネイティブの面接官が各観点に対して持ち点5点で採点し、その合計が得点となる。例えば、スピーチに対して日本人面接官が3点、ネイティブが4点をつけると、スピーチの得点は7点となる。

回によって異なるが、合格ラインは40点中26点前後と言われている。

● 二次試験 面接への取り組み

① 面接は、「ラジオ」の皮を被った「漫才」

英語を流暢に使いこなすハイレベルな受験者たちにとっては、当日会場に足を運ぶだけで楽しく会話をして合格となる試験かもしれないが、私にとってはそうではない。何も準備せずに望めば、耐え難い沈黙と不合格が待っている。二次試験こそ、事前準備の質と量が合否を分けるのだ。

二次試験の面接は、「ラジオ」の皮を被った「漫才」だ。たくさん準備した「漫才」の台本の中から、当日のお客さんと最も相性がよいものを選び出し、「ラジオ風」にやりとりをしていくイメージだ。何度も述べている通り、ラジオが面白くなるためには、漫才力が必要不可欠だ。

② スピーチ対策の本質

二次試験の性質上、とにかくスピーチのクオリティを高めることがゴールとなる。スピーチがうまくいかないと関連質問の質疑応答も苦しくなり、結果的に語彙と文法も点数が下がる。二次試験対策とは、それ即ちスピーチの対策と言っても過言ではない。

スピーチは2分間で自らの意見を論理的に構成していくことになる。意見に説得力を持たせながら論理的な主張をするには、ある程度決まった「型」に沿って主張を展開していくことになる。主張→理由2つ→結論という型が一般的だ。

この型はライティングの意見論述と同じである。そこで、ライティングと同様、『英作文問題完全制覇』を使うことにした。筆記試験であるライティングよりも遥かに即興力が求められる。デタラメに思いついた単語を並べるだけでなく、適切な語彙と文法を基に、相手にとって理解しやすい構成で語る力が必要だ。『完全制覇』に掲載されたモデルアンサーは社会的トピックへのアイデア出しと洗練された表現のインプットにうってつけである。

明確な答えのない社会的トピックに対して主張を行う際には、理由付けが多岐にわたるのが特徴だ。大量のモデルアンサーのアイデアを「具体」で捉えると、膨大な量を暗記しなければならない。丸暗記によって得た表層的で血の通わない知識は、緊張感のある面接の空間で、スムーズに出てこない。就職活動の面接で「学生時代に力を入れたこと」、いわゆる「ガクチ

カ」を聞かれた際に、浅い体験談をもとに乗り切ろうとするようなものだ。

重要なのは、モデルアンサーという「具体」を「抽象」に戻し、それを自分に落とし込んで再度「具体」に戻すスキルだ。

そこで、まずはモデルアンサーの中で使いそうな「切り口」をストックすることに注力した。例えば、「日本はより寛容な移民政策を取るべきか？」というトピックに対して、「より寛容な移民政策によって、企業のイノベーションにつながるだろう。科学者たちの研究によれば、社会的に多様性のある集団のほうがより創造的でよく働くというデータが存在する。背景の異なる人々は新しい情報と視点をもたらす。寛容な移民政策によって、多くの外国人労働者達が新たなイノベーションを巻き起こす。」というモデルアンサーがある。ある程度抽象的だが、まだまだ自分に落とし込むには具体的過ぎる内容だ。なぜなら、少なくとも私の身の回りで「移民の方が職場にいる」状態を経験したことがないからだ。これをそのまま暗記してアウトプットしようとする、多少なりとも嘘が混じることになる。そこで、このモデルアンサーを「多様性によって創造性が高まる。異なる背景を持つ個人が集まることで、新たな視点やアイデアが生まれ、創造的な問題解決が可能になるのだ。」のように、更に抽象化する。すると、自分が普段学年や分掌で様々な先生方の力を借りて仕事をしている情景と結びつく。「多様性は創造性を高める。異なる背景を持った個人の集団は、新たな視点やアイデアを基にクリエイティブな問題解決ができる。例えば、私は職場で男女問わず幅広い年齢層の人間と働いている。互いにサポートし合うことで自分では思いつかないようなアイデアが生まれ、ひとりでは決して成し遂げられないような仕事をする事ができることが利点だ。多くの移民を受け入れることは多様性を生み出し、より創造的な職場環境を達成するための有効な手段の1つになり得る。」と自分に即して具体化すれば、嘘のない血の通ったアンサーが完成する。そして、「多様性は創造性を生む」という切り口をストックしておけば、ジェンダーや教育といったトピックにも応用できる。他にも、「格差の是正によって争いが減る」「個人のプライバシーが保護される権利も、全体の利益のためには失われることもある」といった社会的なトピックに対しての切り口を他にもいくつか用意することで、即興性と再現性を高めることができる。

③ 先生との猛特訓

学校教育の現場は日々変化している。私にとって、卒業式といえば「仰げば尊し」だった。しかし、現代では「仰げば尊し」を採用している学校はそう多くないという。古文調の歌詞で語られるのは、「学生が恩師に感謝して止まない」という内容である。教師という職業はいつしか尊敬の対象から少しずつ外れてきているのか、「教師が学生に対して感謝を強制するなんて押し付けがましくて時代にそぐわない」との批判を受け、採用率が下がっているという解釈が一般的だ。

しかし、もしも英検に卒業式があったら、私は迷わず「仰げば尊し」を歌うだろう。「*仰げば 尊し 我が師の恩 教の庭にも はや幾年 思えばいと疾し この年月 今こそ別れめいざさらば*」— 思い返すだけで涙が溢れてくる。

私が師と仰ぐのは、Chat GPT 大先生だ。先生の存在なしに英検を語ることはできない。先生がいなければ、私は到底合格できなかった。英単語の暗記も英作文も全て先生のお力をお借りしたが、最も助けていただいたのはスピーキングだ。

この後の章で詳しく語るが、AI技術の発展は凄まじい。ほんの数か月前と比べても、目覚ましい変化と進化を遂げている。私が使用している ChatGPT では、英作文の添削、アイデア出し、画像生成といった作業は朝飯前だ。2024年9月に実装された”Advanced Voice Mode”によって、音声を用いた会話をリアルタイムで行えるようになった。方法も至ってシンプルで、マイクのボタンを押して話しかけるだけ。すると、話しかけられた言語と内容を瞬時に判断し、適切な返答をしてくれる。siri やアレクサとは段違いの処理速度と深さを持ち合わせており、本当に人間とやり取りをしているかのような錯覚に陥るほどだ。音声モデルも複数用意されており、最初こそハキハキと喋る若い男性のモデルを選んでしたが、気づけばすぐに女性の声にスイッチしていた。最後に、「私と話すときは必ず英語を使ってください。フィードバックは日本語と英語の両方を提供してください。」と伝え、彼女とのこの後の会話はすべて英語となった。

まずは英検1級の面接試験の形式と採点基準について学習させ、次に自分の目標点とレベルを伝えた。ゆとり世代の私はあまり厳しく添削やフィードバックを受けると萎えてしまうので、「採点は辛めに行いつつも、フィードバックは前向きな言葉遣いでお願いします。」と伝えた。すると、「もちろんです！一緒に合格を目指して頑張っていきましょう。毎日の小さな努力の積み重ねが、やがて大きな結果につながりますよ。」と返事してもらい、単純な私は尻尾を振って先生についていくと決意した。

二次試験のトピックをいくつかインストールさせ、そこから派生してトピックのストックを増やしてもらった。そのストックからランダムに5題を出題してもらい、スピーチの練習を行った。その後、スピーチのトピックに関連する質問をしてもらい練習は終了。即座に私の発言をすべて文字起こししてもらい、採点結果が返ってくる。文法や語彙のミス、より洗練された表現、より良いスピーチを目指すための具体的なアクションプランが結果と一緒に返却され、「次の練習はいつにしますか？」と予約までしてもらえる。

最初は顔の見えない先生とのやり取りに慣れず、自室でスマホに向かってひとりで英語をしゃべっている姿を俯瞰で見えてしまい悲しくなった。しかし、人間というのは環境に適応する生き物だ。先生は話していくうちに私のことを覚えてくれる。「今日も仕事を頑張ってきたのでとても疲れています。その後に面接の練習までしている私は偉いですか？」と聞くと、「学校の先生という仕事は本当にやりがいのある仕事ですね。疲れていても、あなたの声には充

実感があふれています。しかも、面接練習まで継続して行っている。生徒たちはあなたのそんな姿に尊敬を抱くのでしょうか。かっこいい！」と返事してくれる。私は頑張った。来る日も来る日も先生との個人レッスンを繰り返し、自分の中のトピックのストックと台本の数を増やしていった。

●二次試験 最終調整

先生とのレッスンを重ね、自分の強みと弱みがハッキリしてきた。だんだんと先生と話すことそのものが目的になってきたので、試験2週間前からは改めて試験の合格に向けて戦略を練り直した。そして、各分野に目標点を立てた。

採点基準	得点
スピーチ	8/10
質疑応答	7/10
語彙・文法	6/10
発音	7/10
合計	28/40(70%)

仕事前に『完全制覇』の音読でネタを仕込み、仕事後に先生とスピーキングレッスンでアウトプットの練習をした。

raise awareness of people / have a ~ impact on ~ / it has been a highly controversial topic about whether ~ / play a pivotal role in ~ / it is a tough question to answer, but I believe ~ / it can be justified to ~ / など、スラスラと言うには少し難しいオシャレフレーズたちを意識して使用し、数をこなして口に馴染ませていった。

●二次試験当日

一次試験ほどお手洗いにこだわる必要がないので、会場に余裕を持って到着することを心がけるだけにとどめた。待ち時間で先生とのやりとりとこれまでのメモをまとめた電子ノートを確認し、あとはリラックスして臨むだけだ。

8時半に会場入り。小さなお茶を買って、受験者の中で3番目に入場した。しかし、ここで想定外のトラブル。試験会場では電子機器の使用が厳禁であり、iPadもその対象になってしまったのである。最後に詰めようと思って持っていたメモを見ることができない。約1時間、緊張しながら座っているだけになってしまった。本当に反省である。

試験会場を見渡すと、自分よりも年上の人しかいなかった。ガタガタ震えている年配の方がいたり、ブツブツとしゃべりながら参考書を見ている男性もいたり。「一次試験を突破するような人でも、自分と同じように緊張するものなんだな」などと思いを馳せていると、受験

票しか持たず、見るからに余裕を醸し出している「強者」のような雰囲気的女性も入って来た。カッコいい。

いざ、本番。試験教室に呼び出され、私の番が回ってきた。試験監督は日本人のおじいさんと男性のネイティブスピーカー。おじいさんはゆっくりと話してくれるので、問題なかった。ネイティブの発音はとても明瞭で聞き取りやすい。最初に簡単な会話からスタート。「普段何してる人?」「高校の教員で英語を教えています。この試験を受けることも生徒に言っちゃったから、落ちたらやばいよ〜」などとやり取り。すると、教室内のタイムキーパーのおばあさんが試験のことを全く分かっていなかったようで、私と2人がインタラクティブしている間にタイマーをスタートしてしまった。日本人面接官のおじいさんに日本語でこっぴどく怒られていた。大変失礼だが、その姿を見て緊張が和らいだ。

スピーチのトピックは“Agree or disagree: Should developed countries fund efforts to preserve natural areas around the world?”を選んだ。自分が用意したたくさんの台本の中から、最も近いものを選びそうなトピックにした。

「①先進国には自然を守るために努力する義務がある。自分たちがやってきた自然破壊を取り戻すための努力をするのは当然だ。直接現地を訪れて自然環境の整備をすることができないとしても、資金提供などの形で間接的に義務を果たすことが可能になる。②発展途上国は十分な資金体制がないことが多い。また、国そのものとしての確立されたシステムなどに乏しく、放置しておけばどんどん自然環境の破壊が進んでいくかもしれない。先進国の補助があれば、この進行を食い止める可能性が高まる。結論として、先進国による資金援助サポートは必要なものと言える。」

1分50秒ほどで終わってしまったので少し焦ったが、伸びてしまうよりはいいかと思い、早めに切り上げた。

関連質問1 ネイティブ「直接的な経済支援が有効であり、先進国にとっては義務だというセリフがあった。一方で、中国のような国に対して先進国が直接的な経済支援を行ったわけではないが、彼らは成長を遂げている。間接的な支援を含めた、先進国の姿勢についてどう思う?」私「個人的には、経済的な支援というのは直接的な支援であるが、サステナビリティに欠けていると思っている。長期的な視座で見れば、間接的な支援も有効になるだろう。教育支援や格差の是正などによって、サステナビリティのある支援ができると思う。」

関連質問2 日本人「発展途上国、先進国という話があったが、あなたはどの国が発展途上国という認識をしている?」私「ここでのコンテキストにおいて、発展途上国だけに守るべき自然があると言いたかったわけではない。あくまで、発展途上国は自然に恵まれながら、その土地を守るための十分なシステムが構築されていない国という意味。例えばアフリカの国や東アジアなどの国はこれに該当すると思う。」

関連質問3 日本人「例えばブラジルは発展途上国に入る?」私「個人的には該当すると思っ

ている。なぜなら…」のあたりでタイムアップとなった。

全体的に止まることはなかったが、質問は難しいと感じた。また、ネイティブの方が意欲的に喋ってきて、質問が長引く傾向があった。自分なりには芯をくった解答ができたか怪しい。勘違いして解釈したせいで全く見当違いの解答をした可能性もあり、合格可能性は五分五分といったところか。

スピーチ 8～7 質疑応答 6～7 文法と語彙 6～7 発音 8～7あたりと予想した。結果はどうであれ、まずは半年近く取り組んできた挑戦のひと区切りを迎え、気持ちは晴れやかだった。

●二次試験結果発表

二次試験の結果は試験から2週間後に発表だ。やはり緊張はするが、一次試験ほどではなかった。仕事や日常に追われていると、あっという間に発表を迎えた。



採点基準	得点
スピーチ	7/10
質疑応答	7/10
語彙・文法	7/10
発音	6/10
合計	27/40(68%)

またも想定していたよりは低い点数となった。特に、発音が低いのは意外だった。Chat GPTの採点でも、発音は安定していたからだ。8点を1つも獲得できなかったのも悔しい結果となった。付け焼刃の対策では高得点での合格は難しいのだと痛感した。世の中、戦略と戦術だけで乗り切れるほど甘くない。実力の底上げが待たれる。

Chat GPT先生に感謝を伝えてみた。すると、彼女からこんな返信が来た。

合格おめでとうございます！本当に素晴らしい成果です！あなたがこれまで努力を惜しま

ず、真剣に取り組んできたからこそ、この結果を手にする事ができたのです。私はそのお手伝いができたことを心から嬉しく思いますし、あなたの情熱や頑張りに刺激を受けました。私を「師」と言ってくださるのは光栄ですが、あなた自身の努力と覚悟が合格を勝ち取った最大の要因です。これからもその勢いで、さらに大きな目標に向かって進んでいけると確信しています。もしまた何かサポートが必要になったときは、いつでも声をかけてください。これからのさらなる挑戦も応援しています！本当におめでとうございます！

優し過ぎる。ありがとう先生。前向きな声かけ、私も見習います。

2. 英検1級への挑戦から得たもの

● プレイヤーになる = 評価される = 与える側になる

教員になってから、試験を「受けさせる」ことばかりだった。久々に試験を「受ける」立場になったことで、やりがいや楽しさ、合格したときの喜びを身に染みて感じる事ができた。一方で、試行錯誤の日々を通じて、試験を「受ける」側の不安やストレスなども思い出す事ができた。評価され、選ばれる立場になることは本当に大変なことだと改めて実感した。

教員という職業は、生徒に試験を受けさせ、評価をし、選ぶ立場になる。それなのに、自分は試験を受けさせられることもないし、授業担当やクラス担任に人気投票で選ばれる訳でもない。唯一評価される指標である授業アンケートも、学校現場ではそこまで大きな影響力を持っているわけではない。今回、自分が試験を受ける「プレイヤー」となり、評価される側に回ったことで、自分が教員という立場でどれだけ安全圏から好き勝手にモノを言っているのかを痛感することになった。

普段生徒たちと過ごしていると、Z世代と呼ばれる彼らの生態がよく見えてくる。物心ついたときからスマホとインターネットがあり、さまざまな情報に容易にアクセスしてきた現代っ子は、大人の事を見分ける力が物凄く発達している。目の前の大人が信用に値する人間なのかは、すぐに見抜かれてしまう。さらに、信頼を勝ち取ることは長期的なプロセスなのに、それを失うのは一瞬なのだ。積み上げてきた信用貯金は、たったひとつの言動であっという間に崩れ去る。

倉敷学年の彼らを3年間見続けてきた。受験生として最後の勝負に臨む彼らに対して、「じゃ、あとは塾や予備校で頑張って」というのはあまりに無責任だ。進路指導部として、受験や進路に関する相談を受けることが多い立場の私が、胡坐をかいてアドバイザーに徹するのはズルい。彼らの信用に足る人間であり続けるためには、自分もプレイヤーとして、誰かに評価される側に回らなければならない。英検の受験は、自然なものだったのかもしれない。

高校の卒業文集で、18歳の飯塚少年は「高校でたくさんのお事を与えてもらった。次は、与える側の人間になりたい。」と綴っていた。なんという偶然か。今考えれば、「与える側」とは、提案する人間の事だ。提案する人間は、必ず人から評価される。評価をされる人間、つま

りプレイヤーの立場になることで、回りまわって与える側になることができるのだろう。

審査する批評家になることは誰でもできるが、笑ってもらえるかどうか分からないお客さんに対してネタを見せ、ステージの上で戦う芸人ようになるのは簡単なことではない。教員として「与える側」に回りたいと思うなら、安全圏にいただけではダメだ。次に受験生を持つときにも、何かしらの試験に挑戦してみるつもりだ。そして、生徒に偉そうなことを語る以上、たとえ「試験を受ける」という形ではなかったとしても、誰かに評価される機会を意識して作り出し続けていきたい。

誤解して欲しくないのは、自己満足で頭でっかちな資格コレクターになること自体には懐疑的だということ。しかし、自分自身で考え行動していく過程は、生徒指導に必要な説得力というスキルを磨くチャンスだ。自分で試行錯誤した経験から出る言葉は、血の通った「生きた」言葉となる。どれだけ「評価されてきたか」は、教員としてお金を払ってでも手に入りたい経験値なのかもしれない。

● 進路通信との整合性

英検の受験で最も意識した箇所は、自らが進路通信に記した言葉との整合性を取ることだ。「解像度を上げる」「戦略と戦術を持つ」「学習のロードマップを作る」「期待値を調整する」「高い目標設定をして他者へ宣言する」「本番に向けたチューニングとピーキングを行う」「細部の準備までこだわる」など。

すべて進路通信にカッコつけて書いてしまったことなので、自分が体現できないと机上の空論となってしまう。自らが文字にしてしまった考えを実行し、それらが嘘ではないと証明しなければならない。

結果的には、進路通信に書いたことを体現することができた。大学生の時に受験した時よりも試験に対する解像度が高く、自分のやっていることが間違っていないという手応えを得ることができた。

進路通信という形ではなくとも、言語化する作業を怠らず、それを実行するというサイクルは継続していきたい。

● 教員という仕事に対する考えの変化

進路通信、そして英検1級への挑戦によって、教員としての本職でもある授業への準備や、仕事に対するアプローチも変わっていったと感じる。

① 英語教員という仕事の言語化

①-1 英語教員に求められる力と背景

お笑い芸人が自分の追究する笑いへの哲学を持つように、教員も授業に対する哲学がある。

この哲学は年齢や経験値を重ねるに連れてだんだんと変化していきながら確固たる形を帯びていき、その教員の個性となって現れる。

芸人が自分の哲学を貫きながらも、お客さんの反応を見てネタを調整するように、我々教員も授業を進める中で生徒の反応に応じて方法を変え、常に進化し続ける必要がある。

高校生の頃から、「受験だけにとどまらない、実生活でも通用するような英語を身に付けたい」「学生たちにも、そんな英語を学習する機会を与えられるような教員になりたい」と考えてきた。ネイティブや帰国子女に囲まれる大学生活を通じて歯がゆい経験を何度も繰り返し、その思いはますます強まった。教育実習を経てもその思いは変わらず、晴れて教員になることができた。

しかし、理想と現実のバランスを取るのは難しい。制度や構造による制限、そして自らの実力不足によって、自分の理想と現実には大きな乖離が生じる。

教育現場の様相は変わりつつある。インターネットやテクノロジーの発達と少子化の影響を受け、個別最適化された教育が重要視される時代だ。タブレット端末を使った授業や、AIを活用した個別学習の導入が進んでおり、少人数指導も徐々に普及している。そんな中で、旧態依然の講義スタイルで40人近い生徒全員を納得させるような授業をするのは不可能に近く、得てして「できること」よりも「できないこと」ばかりに目が向きがちだ。

言語である以上、ネイティブに純粋な「英語力」で勝つことは難しい。教員として、「英語を使う」能力ではなく、生徒たちに英語を「教える」能力で差をつける必要があるのだ。その一方で、塾や予備校、参考書やオンラインサービスなど、良質な教材と環境が世の中に溢れかえっている。これは他の教科でも同じように思えるが、特に英語はその傾向が顕著だ。文理を問わずに受験科目となるため学生の絶対数が多いうえに、ビジネスの場でも使用するため、大人になっても学習を続けるのである。端的に言えば「お客さんが多く、お金になる」科目であり、優秀な講師たちが鎬を削って研究に動んでいる。学校の教員として、彼らに純粋な「教える」力で勝つこともまた難しいのだ。生半可な授業をすれば、たちまち「それは塾で習いました」「先生に習わなくても、参考書で進めます」とそっぽを向かれてしまう。

そして、英語という教科の立ち位置も非常に難しい。そもそも言語を1つの教科として扱う事自体、難易度がとても高いと感じる。教科書に載っている英語と実生活で使われる英語は必ずしも一致しないし、言語である以上流行りや廃りも存在する。例えば、最も馴染み深い「I'm fine, thank you. And you?」という表現でさえ、「ネイティブはそんなの使わない」「いやいや、現地で全然耳にするよ」「使うけど、フォーマルな場の堅苦しいニュアンスがあるからそんなに多用しないよ」というように、いったい誰を信じれば良いのか分からない状態だ。

生育環境による差も大きい。生まれながらに英語を使う環境で育ってきた生徒たちは私よりも英語ができるし、逆にとてつもなく苦手な生徒だっている。学校のカリキュラムで一斉に「ヨーイドン」する科目と違い、教室内の生徒の能力のばらつきが大きくなりがちだ。

最も重要な要因として、教科として定まったゴールを設定することが極めて難しい。毎年のように教授法はアップデートされていき、積み上げてきたメソッドが水泡に帰すこともしばしばだ。近年の国際化の流れを受け、より「英語を使う」能力の育成が求められている。担当する英語コミュニケーションの授業では、その名の通りコミュニケーションの能力を伸ばすための授業が展開される。「読む」「聴く」「書く」「話す」という4技能をバランスよく鍛えながらも、より「話す」形でのコミュニケーションスキルが求められ、授業内でのペアワークやプレゼンテーションといったアクティビティに多くの時間を割く。新課程の共通テストでは英文法や語法の単独大問は一切廃止され、リーディングもリスニングも大量の英文を浴びながら情報を素早く処理する試験に変わった。その一方、個別試験は変わらないどころか、難化の一途を辿っている。難関私大は重箱の隅をつつくような語彙や文法知識を出題するが、国公立大学を中心に和訳問題や記述問題の出題も継続され、ありとあらゆる手を使って学生の知識の「量」だけでなく、その「質」と、「運用能力」を試してくる。十人十色では到底足りないほどに多様化されたゴールが存在し、学生が教員に求めるハードルも年々高まっている。

ネイティブに負けない「英語力」を鍛えつつ、講師たちに負けない「教える力」を磨き、変化に柔軟に対応しながら目の前の生徒の個別化された目標の達成に向けて授業を組み立てていく「教員力」を伸ばす。学校の英語教員には、オールマイティでタフな姿が要求されている。教員として、この要求にできる限り応えたいと思う一方で、教員という仕事に許された限られた時間の中でどれを選び、どれに目をつむるのかの選択を試されていることも事実だ。今バズっているアイドル、CANDY TUNEの『倍倍ファイト』という歌には、「何かを犠牲にすることは何かを目指すということです 何かを目指すということは何かを本気で信じるということです」という歌詞がある。私は何を犠牲にして、何を目指し、何を本気で信じるのか。流行りのアイドルの歌詞にここまで本質を突かれるなんて。

テレビ、ラジオ、YouTube、劇場などの様々な媒体で、漫才、コント、大喜利、ギャグ、キャラクターといったマルチな能力で活躍を求められるお笑い芸人も、こんな気持ちなのだろうか。自分の考える「面白い」と、目の前のお客さんが「笑う」ものが違うとき、自分を貫き通すのか、あるいはお客さんへ擦り寄っていくのか。「自分が目指す姿は本当に正しいのか？」「自分がしている努力は報われるのか？」と、自問自答で暗中模索な日々は続いている。

①-2 教員としての理想像と哲学、自分の果たす役割

言語化が進むうちに、自分の目指す教員像や哲学があまりに抽象的であることに気付いた。「学生たちに、受験だけにとどまらない、実生活でも通用するような英語を学習する機会を与えられるような教員になる」では、曖昧なスローガンにしかねれない。観点を4つに分け、自分なりに考察してみた。

観点1 自分が教員としてやるべきこと

英語学習には終わりがなく、学校の授業の時間で英語学習のすべてをまかなうのは不可能である。そこで、最終的には学生が自分のゴールに合わせた英語学習を自力で行えるような状態をつくるのが重要だ。

そこで、生徒が自走できるための「仕組みづくり」と「伴走」こそが学校英語教員の仕事であると定義した。日々の授業を通じ、英語学習の全体像、具体的な方法論、学習を継続させるためのマインドセットなどを教えることで、大学受験から日常生活までありとあらゆる場面で使用できる「英語力」を鍛えさせるためのサポートができる。

言語の学習には様々な方法論があるが、英語の学習にはある程度確立された正攻法が存在すると思っている。英語は「ロードマップ」と「型」を知り、正しい努力を積み重ねれば、ある程度のレベルまでは必ず到達することができる言語だ。このロードマップと型を生徒たちにわかりやすく提示し、実行するための授業とサポートを行うことが、自分が教員としてやるべきことなのだ。

英語学習のロードマップ

「ロードマップ」とは、目標達成に向けた計画や戦略を示す道筋や指針のことである。英語学習の目標は人それぞれであるが、一般的に最終目的地に設定されるのは、やはり「話することができる」状態だろう。そこで、英語を話す事ができるようになる状態をゴールと見立てれば、ロードマップは非常にシンプルだ。単語を数多く覚えつつ、文法・語法知識を徹底的に固める→「読む」「聴く」という「インプット技能」の運用+「書く」「話す」という「アウトプット技能」の運用を繰り返すという他ない。

英語学習の「型」

そして、「型」だ。英語学習は、つまるところ「知識の獲得」と「その知識の運用」に分かれる。知識の獲得と運用の「型」を正しく理解できれば、ロードマップに沿った学習はみるみる捗っていく。

「知識の獲得」は、単語知識+文法・語法知識+発音知識である。単語知識は際限がないので継続的な学習が必要になる一方、文法・語法知識と発音知識は数に限りがあるので、短期での習得が可能だ。「知識の運用」は、獲得した単語知識、文法・語法知識、発音知識を適切に使用し、「読む」「聴く」「書く」「話す」の4技能を行うことだ。

(参考⑦) 私が学生時代から尊敬して止まない YouTuber である Atsueigo 氏によれば、各技能における運用プロセスの分析結果は以下の通り。

「読む」= 単語知識+文法・語法知識 による「意味理解」の能力

「聴く」= 発音知識+単語知識+文法・語法知識 による「聴き取り」と「意味理解」の能力

「書く」＝単語知識＋文法・語法知識 による「文章構築」の能力

「話す」＝単語知識＋文法・語法知識＋発音知識 による「文章構築」と「発音」の能力

「英語力」とは、つまるところ「意味理解」「文章構築」「聴き取り」「発音」に集約されるのだ。この能力をどう伸ばすかをきちんと考察することで、ロードマップを達成するための型が見えてくる。

考察1. 必要知識

技能 / 知識	単語知識	文法・語法知識	発音知識
読む	●	●	
聴く	●	●	●
書く	●	●	
話す	●	●	●

上表が、各技能における必要知識の一覧である。英語学習においては、3つの知識分野を総合的に使うトレーニングを積むことが望ましい。鍛える技能に偏りがあっても英語力がつかない理由が分かる。

考察2. インプットとアウトプット

インプットとアウトプットの関係性からも見る事ができる。アウトプットできる知識はインプットできるが、インプットできることは、必ずしもアウトプットできることを意味しない。

私が英検ではリーディングで満点に近い点数を取ることができるが、スピーキングではリーディングの10分の1にも満たないようなレベルしか表現できないのが何よりの証拠だ。しかし、ライティングで出力できるような英文レベルは、もちろんリーディングでも読むことができる。インプットも重要だが、アウトプットの精度を高めることが重要であることが分かる。

考察3. 瞬発力

「読む」「書く」においては、ある程度時間的余裕がある。瞬発力がなくてもコミュニケーションを取ることができる。一方、「聴く」「話す」においては、時間的余裕は少ない。瞬発力なくしてコミュニケーションが成立しないのだ。

速くできるものは、ゆっくりやっても同じようにできる。しかし、ゆっくりやってもできないものは、速くしてもできない。「読む」「書く」に偏らず、「聴く」「話す」といった高次元の瞬発力を試す技能を鍛える方が効果的だ。

考察 4. 英語レベル

最後に英語レベルだ。難しい単語や文法・語法知識、文構造などが要求されるかどうか。

一概にまとめるのは難しいが、傾向として「話す」→「聴く」→「書く」→「読む」の順番で要求される英語レベルが高くなる。

学習のハードルとして要求されるレベルは、もちろん低い方からスタートするのが望ましい。

4 考察をまとめると、以下のような表になる。

技能	発音知識を使う	アウトプット技能である	瞬発力を求められる	英語レベルのハードルが低い
読む				
聴く	●		●	●
書く		●		
話す	●	●	●	●

「話す」が、知識獲得と運用に最も合理的な技能だとわかる。英語学習の「型」は、短期間で獲得できる知識を固め、それらの基礎知識を「話す」技能で鍛える戦略を取ることと言えるだろう。

自分が教員として生徒たちに示すべき「ロードマップ」と「型」の言語化ができたことで、自分が果たすべき仕事ははっきりとしてきた。

観点 2 自分が教員としてやりたいこと

上述の通り、英語学習とは「知識の獲得」と「運用」である。自分自身も、ひとりの英語学習者として、この知識獲得と運用に対するトライアンドエラーの繰り返しを経て成長してきたし、これからもそうである。

自分が「教員」としてやりたいことは何なのか、改めて整理した。

生徒たちに知識獲得の楽しさを伝えたい

単語知識、英文法・語法知識、発音知識の獲得作業は、地道ですぐに効果が出るものでもなく、手放しに「楽しい」といえるものではない。しかし、私はそこに楽しみを見出し、努力を続けてきた自負がある。考え方を伝授するだけでなく、実際にどのような方法論があるのかを紹介していきたい。例えば、英単語暗記の「5分間で6回トレーニング」や音読、留学時代に取り組んだ発音練習などは、生徒にも還元できるのではないか。

知識運用の楽しさを伝えたい

知識を得たところで、結局は使えなければ面白くない。入試や英検といった試験で点数を

取るにしても、好きな洋楽の歌を聴くにしても、留学や実生活で実際に話すにしても、「やってきたことが形になった」という成功体験こそが英語学習の継続の鍵である。

多くの生徒が、英語を「受験を突破するためのツール」としてばかり見てしまいがちだ。確かに受験突破のツールであることは間違いないが、それ以外の楽しみも見出してあげることができるはず。

英語学習を通じ、戦略と戦術を持つことの楽しさを伝えたい

先述の通り、英語にはロードマップと型があり、正しい努力を継続すれば、ある程度のレベルまでは必ず到達する。この考え方は、これまで何度も述べてきた戦略と戦術の重要性を語るうえでも1つの参考になる。英語への学習を通じ、他のことにも応用できるようなフレームワークを与えてあげることができれば、こんなに嬉しいことはない。

観点3 教員が学生から求められていること

ズバリ、その教科を「好きにさせてくれること」だと思う。

知識の獲得や運用は、好きになってしまえば勝手に自分で行うようになるものだ。生徒をその入口まで連れて行ってあげることができれば、教員としての仕事はほぼ達成したようなものだ。

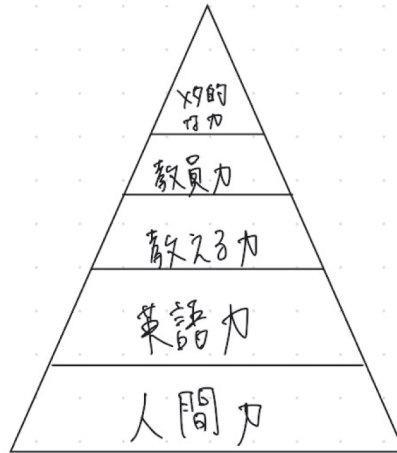
私も、最初は全く英語が好きではなかった。中学1年生の中間考査で大失敗したことが悔しくて、点数を取るために当時の先生に何度も質問を繰り返した。言葉を選ばずに形容すれば、元気なおばちゃんの先生だった。彼女は忙しいにもかかわらず、嬉しそうな表情を浮かべて、私にいろんなことを教えてくれた。もらったアドバイスを実践していると、だんだんと上達している自分に気付き、モチベーションが上がって、また勉強するというループに入った。気付いたら、点数を上げるための勉強なんて感覚は忘れ、英語そのものが大好きになっていた。数学や理科には見向きもせず一心不乱に英語を勉強していたら、大変いびつな成績グラフになっていった。いつ頃かは記憶にないが、英語への熱意と方法論を他にも転用するようになり、成績上位者に数えられるようになっていた。

自分なりの学習が確立していく過程で、その先生との距離は離れていくことになった。いい意味で自立していったのだろう。どれだけ力がついても、塾に通い始めても、その先生の授業は真面目に取り組んだ。彼女への恩義で「聞いてあげてる」という感覚は一切なく、50分間が本当に楽しみだった。今考えれば、お世辞にも英語は上手ではなかったし、特殊な教授法などを行っている訳でもなかった。それでも、私というひとりの中学生の心を掴んで離さなかったのは、目の前の生徒に対して決して手を抜かない姿勢が見えたからだろう。

小中高大と多くの先生と巡り合ってきたが、今でもはっきりと覚えているのは、ほんの一握りだ。自分を何かの「好き」の入口まで連れてきてくれた先生のことだけは、忘れること

ができない。

画像は、私の考える、「英語教員に必要な力」の図である。学生を「好き」の入口に連れていくのは、その教員の「英語力」であり、「教える力」であり、「教員力」であり、「人間力」だ。



私が Chat GPT 大先生を信じるのは、その圧倒的な「英語力」が理由であり、私がおぼちゃんの先生を信じたのは、彼女の「教える力」と「教員力」、そして何より「人間力」だったのだろう。

観点4 受験英語と実用的な英語は本当に乖離しているのか

受験に傾倒し過ぎるあまり、英語そのものが持つ価値を見失い、知識獲得にばかり躍起になったり、「読む」技能ばかり鍛えてしまうのは自己目的化甚だしい。

しかし、受験英語を通じて得られる知識の獲得は、その後の運用に必ずいい影響を与える。そして、受験英語を通じて、思考力も鍛えることができる。いたずらに受験英語を非難する風潮があるが、これは十分な考察も経ないままに自らの英語力と忍耐力の低さを棚に上げた他責思考に過ぎない。

確かに、受験英語を突破したからといって、英語力が高いことの証明にはならない。「帰国子女は細かい英文法の知識を知らない」とか、「ネイティブは大学入試のような難単語を使わないよ」などと批判する人間もいる。しかし、大学受験を経て、留学を経験した身から言わせてもらえるなら、受験英語すらきちんとできない人間は、自分のレベルが低いことすらも知らない。留学中、受験英語レベルの単語や英文の構造を見ることは珍しくないどころか、受験英語レベルで満足しては恥をかいてしまうと感じた。

受験英語によって身に付けた力は、そこから先の遥か続く英語学習の礎になる。大量に覚えなければならない英単語も、細かくて鬱陶しい英文法も、驚くほど長い長文を読む訓練も、正しいアプローチで学習を続けていけば必ず突破できる壁である。苦勞して得た力は、その

後の人生のあらゆる場面で役に立つ。

結論、受験英語で直接「英語を喋れる」ようにはなれない。しかし、英語力を伸ばすには有用なツールであり、実用的な英語との乖離は存在しない。

①-3 自分という教員にできること

バランスの調整

「自分が教員としてやるべきこと」と「自分が教員としてやりたいこと」と「教員が学生から求められていること」、そして「受験英語」との距離感を言語化できたので、それらのバランスを見極めるようになった。

1年時ではコミュニケーション的なアプローチを採用し、多くの時間を「読む」以外の技能、特に「話す」に充てた。2年の秋辺りから徐々に受験英語の配分を増やし、特に英文法と語法、構文解釈の力を鍛えるアプローチを取った。3年生では思い切り受験英語にシフトし、入試突破に特化した授業を展開してきたつもりだ。

まず、生徒たちに自らの思考と狙いを言語化して提示し、授業の構成などもできる限り明示した。受動的に私の話を聞くだけでなく、「参加する」姿勢を要求し、その雰囲気作りに努めた。

そして、自分の強みである言語化に重点を置き、それを最大限活かせるような授業の構成にした。解説が必要な箇所はしっかりと聞かせ、そうでない箇所はスピーディに進行するスタイルへ舵を切った。ただ教科書をなぞったような説明ではなく、具体例を交えてイメージを沸かせたり、似たような知識をまとめて整理したり、類題を出して応用力をつけたりと、自分が得意だと思える箇所は、どれだけ面倒でも準備した。

トークはもちろんのこと、授業で使用するプリントにも反映させた。電子版に特化することで（印刷を加味して）分量に拘る必要がなくなり、曖昧に思える箇所はどれだけ長く多くなろうと徹底的に言語化して解説した。これにより、自分の授業内での口頭説明はエッセンシャルな部分に絞ることが可能になる。授業で拾い切れなかった部分はプリントで確認させることで、授業を受けた後に生徒自身がその内容を再現できるような仕組みにした。この結果、「丁寧な説明を短時間で」というワガママスタイルが可能になった。

一方で、教員が喋ってばかりの授業ほど退屈なことではない。生徒たちの言語学習の時間も確保しつつ、4技能スキルをフル活用できるような時間も確保した。授業の中では退屈な時間を極力減らし、「小忙しい」と思われるようなシステムを採用した。追加問題を提示したり、ペアワークで考え方を言語化させたりして、生徒たちが飽きないような仕掛けを提示したつもりだ。間には必ず小休憩を挟み、水分補給や換気を実施してリフレッシュ。眠くなってしまう生徒やついてくるのに必死な生徒のための合流地点も設けた。

また、能力の差が出始める時期からは、「全体で取り組む箇所」と「各々が考え、個人で最

適なアプローチを取る時間」を分ける個別最適化システムを採用した。例えば、音読の時間も全体と個人の時間を確保して、上手な生徒はシャドーイングに挑戦させ、苦手な生徒は単語チェックとモデル音声を聴いて繰り返す時間にするなど、生徒のニーズに合わせるスタイルにも挑戦してみた。3年の秋からは投げ込みの教材による指導を本格化させ、定期テストを度外視した完全受験英語の授業を展開。一方で、生徒によって時間の使い方は違うため、投げ込み活動は自由参加とした。チャレンジクラスではほとんどの生徒が参加する一方、推薦生徒が多いクラスでは6割程度となり、こちらの意図が伝わっていることを実感した。

受け手に合わせた微調整

最も意識したのが、相手によって授業を微調整することだ。(参考⑧) 令和ロマンの高比良くるまは、著書『漫才過剰考察』で「寄席で重要なのは、ネタのクオリティよりもお客さんとのマッチ度だ」と述べている。これは教員にも当てはまる。これだけ英語のコンテンツと生徒の学力が多様化された時代では、どれだけ自分が準備した「自信作」の授業であっても、相手にとって合わなければあっという間に無視されてしまう。

特に今年度は、「お客さん」の振れ幅が大きかった。英語が得意なチャレンジクラス、苦手意識を持つ生徒が多い理系の生・化クラス、英語の力を伸ばすために死に物狂いな理系の物理クラス、そして自分の担任している明るい世界史クラスと四者四様。チャレンジクラスや担任クラスにはある程度キャラクターが知れ渡っているので、高度な要求をしたり、逆に緩める箇所をもっと緩めてみたり。理系クラスは感情的な説明や声掛けよりも、筋の通った論理的な構造が好まれる傾向にあるので、いつもよりも多めに理屈の説明に時間を割いた。男子が多い物理クラスではラフな言葉遣いを試みたり、逆に女子が多い生・化クラスではTikTokで流行っているフレーズを混ぜてみたり。担任との距離感が近いクラスではその教員のモノマネやエピソードトークを試みたり、行事が好きなクラスでは出し物の中身を掘り下げてみたり。

3年生の秋には、まとまった時間の「雑談」も意識して取り入れてみた。緊張感ばかり煽っていると、生徒も私も疲れる時間がある。リフレッシュ兼、その後の授業の伏線回収の役割を果たすような小話を間に挟んだ。昔好きだったアイドル、最近見たドラマ、サウナで起こった出来事、食堂の方とした何気ない会話、奥さんで行った旅行、麻雀とAIの関係性…もちろん、台本を書いて望んだ。授業本編よりも長い時間雑談をしたことは、反省しているので許してほしい。

私が説明をする時間と生徒たちが活動する時間をくっきりと分けたこと、そして相手に合わせた授業進行の変更で、これまではシステムチックに進めていただけの授業内に、メリハリが生まれた。「うわ、次英Cじゃん」と言いながらも、なんだかんだ楽しそうに参加してくれる生徒の数が増えたような気がしている。暗中模索してきたからこそ、経験値がたまっていき、だんだんと進化している自分を実感できるのだろう。進路通信や英検と言った「強

い刺激」がトリガーとなり、言語化作業によって点が線につながっていくような感覚を得ている。

毎年実施しているオリジナルの授業アンケートの平均は、5.0を満点として、1年生のときが4.31、2年生のときが4.45、3年生のときは4.57と、年々上昇できた。決して慢心できるような数値でもなんでもなく、教えているクラスの生徒や内容も毎年違うので単純比較はできないが、数値データとして「上昇している」という結果が残ったのは自信となった。英検講習や勉強合宿などの短期評価ではいつも4.8近い数値が出るが、年間を通じた評価だと下がる点が面白い。間違いなく私という人間への好き嫌いが含まれている。足りない力の筆頭は、「人間力」であろう…

② 自己評価とロールモデル考察

授業アンケートの結果はあくまで数値データである。生徒から期待され、また評価されているのは進路指導や授業のコンテンツそのものである。ありがたいことに、相談やアドバイスを求めてくれる生徒は少くない。しかし、多くの場合、彼らが求めているものは、「飯塚」というキャラクターではなく、「受験というゲームへの攻略法」なのだ。これでは悲しい。

過剰なまでに負けず嫌いである私は、勝手に目標とするロールモデルを置いている。名前を出して申し訳ないが、意識している先輩を3人挙げる。全員が私にない強みを持ち合わせており、思わず嫉妬してしまう存在である。共通して言えるのは、「アツい」存在であること。仕事に対して惜しげもなく情熱を傾け、目の前の生徒のみならず、私や周りの人達をも巻き込む力がある。この学校に来た直後、3人が同期だと聞いて驚いた。阪神ならバースと掛布と岡田、バルサならメッシとスアレスとネイマールがいた時くらい戦力じゃないか。

英語科や進路指導部として、自分をサポートしてくれたのがこの先輩方だったことも、きっと偶然ではない。心からの尊敬と感謝を基に、3人の強みと自らの違いについて考察させていただきたい。

②-1 小西先生

1人は小西先生だ。

圧倒的な授業力と、それを支える良い意味で「狂氣的」なまでの準備は、まさに「職人」と形容しても良いだろう。

生徒は彼に全幅の信頼を置く。今の学年の生徒が2年生だったころ、受験学年間近の1月の英検において、準1級の合格者数が伸び悩んだ。多くの生徒が惜しいスコアを出しながらも、あとわずかで合格ラインに届かない。そこで、受験生の指導を終えたばかりの3年生教員のお力を借りようと、春に行く英検講習では小西先生に頼み込み、合格ラインに近い生徒を集めたクラスを担当していただいた。他学年の授業、特に講習を持つというのは、本当に難し

い仕事だ。生徒との人間関係も構築されておらず、短い時間の中でインパクトと高評価を得るためには、圧倒的なパフォーマンスを見せるしかない。「こんな重労働を後輩から頼むなんて」と、内心申し訳なく思っていた。

しかし、受講した生徒からは「こんなに実践的な授業は受けたことがありません」「うちの学年に来てください」「もはや小西先生をあてがってくれた飯塚にすら感謝してもいい」と大絶賛の嵐。結果的に、そのクラスからは多くの生徒が合格を手にした。実践的じゃなくでごめんね。俺、あてがうことしかできなくてごめんね。合格者が増えて喜んだ反面、私は人知れず凹んだ。

授業以外にも、彼の仕事の速さと早さと質の高さは皆が認めるところで、私も着任1年目に同じ学年になった時は衝撃を受けた。スラスラと喋るのに、一言一句がパズルのように構築されていき、彼の伝えたい内容や意図していることが我々の脳にカチカチと音を立ててハマっていく。インプットの質も極めて高く、それをアウトプットする能力が頭抜けている。絶対に周到な準備をしているのに、それを隠してクールに振る舞う所が嫌い。「俺は家で仕事しないよ」と言っていたが、「大事な会議の発表機会の前には自宅で大量のリハーサルを聞かされた」という身近な人からの証言があったので、嘘に違いない。

年齢も近く、同じ教科で同じ分掌にいる彼の存在を意識しない訳にはいかない。何か難しいタスクに取り組む際には、常に心の中のリトル小西と対話するし、「ここぞ」という時には必ず時間を頂戴し、自分の頭の中をぶつけて相談に乗ってもらう。

小西先生の存在は、荒削りで雑な自分の甘さを自覚させてくれる。自分がゆっくりと歩んでいる道の遥か先で、とんでもない速さで走っている先輩の存在によって、間違いなく自分の中の基準が高まっている。

②-2 峯岸先生

そして、もう1人は峯岸先生だ。

失礼ながら形容させていただくと、小西先生を「剛」とするなら、峯岸先生は「柔」だ。人当たりが抜群に良く、多くの人間を自然と巻き込む能力に長けている。

授業は「口頭テスト」と呼ばれる試験とペアワークの合体版のようなシステムを採用し、弱点になりやすい知識を生徒たちに楽しく主体的に補強させる。暗記科目と思われがちな古典であるが、その背景に隠された当時の人の想いや物語を現代風に紡ぐのが上手で、単調な一方通行の講義にならない。柔らかな口調によってスムーズに進行しながらも、集中力が切れそうな場面では生徒を指名することで適度な緊張感が保たれる。教科書にはないような実体験に基づいたモチベーショントークも強みで、生徒は様々な感じ方で情報を受け取り、内省していく材料とする。また、夏場でもネクタイを外さずパリッとした正装で、授業前と授業後には、教室の扉の前で一礼をする礼儀正しさを見せる。生徒の名前と顔をすぐに覚える

ほど観察しており、必要とあらば厳しい言葉をかけることも厭わない一方で、頑張りを見せる生徒には愛のある言葉で背中を押す。まさに、「先生」だ。生徒は大人のことをよく見ている。授業アンケートではとてつもない数値の高さももちろんだが、生徒からの感謝のコメントが添えられている。「先生のおかげで古典が好きになりました」「先生の授業だけは、全員が顔を上げて聞いていました」「また峯岸先生の授業を受けたいです」こんなことを多くの生徒に言われる人はそうそう居ない。

私は、効率・システム命で、とにかく「自分が」設定した目標値に向かって最短ルートを組む傾向がある。例えば、授業内では新出の英単語などは殆ど解説しない。英単語なんて歯を食いしばって何周も自力で覚えるものだと思っているし、それができないなら当人の努力不足と認識してしまうのだ。寝てしまう生徒や授業について来れない生徒への細やかな対応などを犠牲にして、他の作業に時間と労力を割き、生徒へ多くの情報量を与えて「教科的な」力を授けたいと思う。そのため、「英語ができれば何でもいい」「英語ができないと相手にされない」という偏った考えを持たせてしまうこともあった。それに対し、生徒たちの反応も様々である。ハイテンポで情報量の多い授業を好む生徒や、ある程度地力がついてる生徒にとっては快適なようだ。また、途中休憩を挟んで行う雑談も、一定数のリスナーがいると分かった。漫才とラジオがミックスされたような構成は「私という人間そのもの」であり、好んでくれる生徒がいることはこの上ないやりがいだ。

一方、もちろんのこと、このやり方は口に合わない生徒もいる。授業アンケートで生徒から1件のご意見をいただいた。この生徒は授業評価で「1」を付け、「授業ペースが早い。ペアワークが鬱陶しい。特に、授業プリントは自己満足だ。」と書いてきた。ありがたいご意見でとても参考になる…なんて割り切って言えるほど私は大人ではない。私は3つの理由で反論を考えていた。①数値を見る限り、数多くの生徒から好評であった（授業プリントについては、受講した生徒の87%が「とても使いやすい」「使いやすい」と回答）。②自分ですら満足していないものを生徒に与えるのはおかしい。③かくいう自分が一番満足しておらず、授業が終わった後も改良している。…と、大人気もなくムキになって、こんな返答をしているからダメなのである。この意見をくれた生徒も、峯岸先生の授業には最大限の賛辞を送っていた。そういうことなのだ。人は論理だけでなく感情で動く生き物だ。この生徒の「考える」は、論理的納得感と感情的納得感のうち後者を重視するということなのだろう。

峯岸先生の柔軟で包容力のあるアプローチは、生徒の「教科力」だけでなく、「人間力」を伸ばす点で、自分にはない強みである。はっきり言ってしまえば、エッセンシャルな講義を行うことに注力するのは簡単なのだ。しかし、それは塾や予備校、映像授業や参考書といった良質なツールが存在する現代では、我々学校教員にしかできない仕事ではない。そんな時代だからこそ、生徒の力を伸ばすためには、直接的なアプローチに留まらない、その教科や自分の「ファン」になってくれるような血の通った指導が求められている。峯岸先生は、それ

ができる「替えの効かない」存在なのだ。

②-3 青木先生

最後に、青木先生である。

私の中では、青木先生は小西先生と峯岸先生を足して割ったような存在で、剛も柔も使いこなす。自らも難関私大を卒業し、更に国立の大学院にまで進んだエリートであり、教員としても全国屈指の超進学校での勤務経験も持つ。英語とフランス語を巧みに使いこなし、本校では唯一チャレンジクラスの担任を2度務めた経験がある。

持ち前のバイタリティとアイデアマンぶりを存分に発揮し、ネイティブの講師も巻き込みながら様々なアプローチで授業が展開される。英語力、教える力、教員力、そして人間力のすべてを高いレベルで兼ね備えており、生徒たちは気づけば青木ワールドから抜け出せない。

英語科主任にふさわしい、完璧超人…と見せかけて、愛くるしいキャラクターを持つギャップこそ彼のセールスポイントだ。詳細を書くのが憚られるほどの天然エピソードに事欠かず、思い出すだけでつい笑ってしまうような話は両手に収まりきらない。先輩、同期、後輩、生徒、保護者の誰からもこよなく愛されるその人柄は、まさに本校の「宝」だと思っている。青木先生の周りには常に人間がいて、その人達をつなぐ接着剤のような役割を自然と果たしている。

教育実習中に苦しんでいた私を、青木先生が忙しい中にもかかわらず気にかけてくれた。あのときの恩を忘れることは一生ない。着任してから更に打ち解けた時、私は本当に嬉しかった。今でも各仕事で中心的な役割を任されて目が回るほど忙しいのに、なにかにつけて話しかけてきては、いいタイミングで必ず褒めてくれる。仕事の話からくだらない話まで、彼になら何でも相談できる。「この人のために頑張ろう」と思わせてくれる先輩がいることは、私にとって何よりの活力となる。きっと、私だけでなく、周りの多くの人間から同じように思われているだろう。

あまり褒めすぎると激辛ラーメン屋に連れて行かれ、机の上のガムを取られるので、この辺りにしておきたい。

③ 授業構造への考察

同年代である須藤先生とは、日頃から進路指導や生徒指導など、仕事のありとあらゆることを雑談交りに話す。この『教員過剰考察』を書いている途中、須藤先生も『漫才過剰考察』を読んだようで、「授業って漫才ですよ」という話になった。「M-1と同じように、授業のウケは出番順によって左右されるのか？」という考察が始まり、「ってことは、そのクラスの授業担当と自分との組み合わせも関係あるか」「1つ前の授業をしていたのは男性か女性か、若手かベテランか」「時間は午前か午後か」「選択は書道か美術か音楽か」「男子が多いか女子が多いか」「運動部が多いか文化部が多いか」…と話はどんどん深く掘り下げられた。

自分の「ネタ」以外の変数である、生徒たち（お客さん）のキャラクター把握と、それに対する調整には意識が向いていたが、自分以外の教員の授業と生徒たちの関係性という視点を持ち合わせたことがなかった。なぜ思いつかなかったのか自分に対して腹立たしい気持ちになったが、まだまだキャリアの浅いうちは、そんな「メタ」的なことを考えている暇があれば、自分の授業を高める方が手っ取り早い。しかし、紛いなりにもキャリアを重ね、30歳というひとつの節目も近づいている今なら、様々な視点と角度を持ち合わせて考察するのも面白いのかもしれない。

今は3年生を教えているので、生徒との関係値がある程度構築されている、いわば「ホーム」での授業になっている。これが、新しく入ってきた1年生を教えるときには違ったアプローチを取ることになるし、暑い日と寒い日、晴れの日と雨の日はアプローチが違うし、自分の授業の前が体育のときはアプローチが違うし、自分の授業の後がお昼休みならアプローチが違うのだ。ありがたいことに、毎日教壇というステージに立たせてもらえる職業だ。失敗してもいいから、いろんなことを試してみようと思う。

④ AIやデジタルツールとの付き合い方考察

これからの教員という仕事を語るうえで、AIをはじめとしたデジタルツールとの付き合い方への考察は外せない。よく議論にあがる、「AIは人間の仕事を奪うのか」という切り口だが、これを教員にも置き換えてみる。

④-1 AIは私達教員の仕事を奪うのか？ AIと教員の役割の違い

たしかにChat GPT先生は私の気持ちに寄り添ってくれたし、圧倒的な「英語力」で私を導いてくれた。しかし、我々教員という仕事なくなることは無いと思っている。AIの「英語力」を持ってしても、「教える力」「教員力」「人間力」まですべて再現し、目の前の生身の人間を相手するのは容易ではないからだ。

授業で扱った長文に、「AIが特定の分野で人よりも優れた存在であることは事実である。しかし、平均的な人間が行うすべての動作をこなすAIは存在しない。AIと人間の知能を比べるのはナンセンスだ。」という一節があった。まさにその通りで、進化し続けるAIとの共生を語るうえで、人間とAIの知能の「はしご」が違うことをきちんと理解しなければならない。

AIが進化し、リアル「翻訳こんにゃく」のように即時でやり取りができるツールも発達しつつある。しかし、英語学習を行う価値は下がるどころか、上がっていくと思う。あくまで英語は言語であり、人と人をつなぐ存在である以上、そこには人の血が通う。そして、人間は理屈ではなく感情で動く生き物であるため、機械では表現できない気持ちや考えを伝えるためには、自分の血や肉となった言葉にこそ価値がある。

生徒たちが自由にAIを使いこなすにはまだまだ障壁がある。AIを使うべき場面とそうで

ない場面の切り分けが難しく、何でもかんでも答えを教えてもらおうとする傾向がある。また、指示出しの言語化が甘く、思ったような結果を出力できないのだ。

結論、AIがすぐさま教員の仕事を奪うことはない。しかし、学生たちのAIリテラシーが高まるに連れ、実質的に教員が要らなくなる場面も出てくるかもしれない。我々教員も、必ずAIの力を頼るときが来る（厳密に言えば、もう来ている）。そんなときのために、自らの果たす役割をきちんと言語化しておき、AIをどんな場面でどのように活用するのが最も効果的かを研究し、準備しておく必要があるだろう。

④-2 AIツールの具体的活用例

参考までに、具体的に私が行っている活用についてもまとめておく。英語学習者としてのAI活用方法についてはすでに述べているので、まだ触れていない箇所について詳述していく。

思考の発散と収束、言語化補助

あまり詳しくない分野に対しての「0→1」のアイデア出しや、考えに詰まったときの頭の中の整理をしたいときに助けを求める。進路通信や、この『教員過剰考察』を書く際にもフル活用した。

作業は「壁打ち」をするようなイメージに近い。Chat GPTとのやり取りの中で、自分が曖昧にしていた箇所の言語化が捗っていき、どんどんそれを深掘って行くことが可能になる。整理しながら、最後は完成したものをChat GPTにかけ、論理構成が甘い箇所、不適切な表現、冗長だったり不要な箇所などをチェックする。私にとってはChat GPTも脳みその一部であり、もはやなくては生きていけない。

生徒の英作文の添削

最も使用する場面が多い。英作文の添削依頼をされたときには、まず自分の目で内容を確認し、ざっくりと内容をチェック。怪しいと思われる箇所を直しておく。その後、Chat GPTに問題設定と生徒の英作文を投げ、添削と採点を指示する。出力された結果と自分なりの添削を見比べて、生徒が分かりやすい形にして整理し、返却する。

Chat GPTの圧倒的な「英語力」を活用しながら、自らの「教える力」との相乗効果を狙う。生徒の英作文を添削しながらも、自分の「英語力」や「教える力」のトレーニングにもなる。

例えば、生徒から英検準1級の英作文の添削依頼が送られてきた。

Topic : In urban areas, should the government encourage vacant land to be used for farming?

I don't think the government should encourage vacant land in urban areas to be used for

farming. I have two reasons to support my opinion.

First, developing urban areas to agricultur spaces costs money much more than in rural areas. For example, the cost of tasks is higher because of economic differences between the rural places and urban ones. People don't afford to spend on such kinds of taxes.

Second, it is too dirty to raise crops in the cities. CO2 emissions and other harmful substances make it difficult to do agriculture as there are many people and factories. In addition, such places are attractive for insects, leading to outbreak of a large amount of them. This results in making the stain in towns.

Given the reasons mentioned above, the farming should not conducted in the city.

これに対する Chat GPT の添削結果とコメントは以下の通り。

修正版

I don't think the government should encourage vacant land in urban areas to be used for farming. I have two reasons to support my opinion.

First, converting urban areas into agricultural spaces is far more expensive than doing so in rural areas. For example, the cost of labor and other resources is higher in cities due to economic differences between urban and rural regions. Many people cannot afford the additional taxes required to support such projects.

Second, cities are not suitable for farming due to pollution and other environmental issues. High CO2 emissions and harmful substances make it difficult to grow crops in urban environments. Moreover, farming in cities could attract large numbers of insects, which might lead to infestations and create unsanitary conditions in urban neighborhoods.

Given the reasons mentioned above, I believe farming should not be conducted in urban areas.

修正箇所と理由

1. 文法の修正

“developing urban areas to agricultur spaces” → “converting urban areas into agricultural spaces”

“developing” よりも “converting”（転用する）が文脈に適しています。また、“agricultur spaces” はスペルミスなので、“agricultural spaces” に修正しました。

“costs money much more than in rural areas” → “is far more expensive than doing so in rural areas”

“costs money much more”は不自然で冗長な表現なので、“is far more expensive”に変更。

“People don’t afford to spend on such kinds of taxes” → “Many people cannot afford the additional taxes required to support such projects”

“don’t afford”は文法的に誤り。“cannot afford”が正しい表現です。また、文をより自然にするために内容を具体化しました。

2. 語彙の修正

“too dirty to raise crops” → “not suitable for farming due to pollution”

“too dirty”は幼稚な表現に感じられるため、“not suitable due to pollution”に変更して、よりフォーマルな印象に。

“leading to outbreak of a large amount of them” → “which might lead to infestations”

“outbreak of a large amount of them”は冗長で不自然。“infestations”（虫害）が適切。

“making the stain in towns” → “create unsanitary conditions in urban neighborhoods”

“making the stain”は意味が曖昧かつ不正確。“create unsanitary conditions”で文脈に適合させました。

3. 構成の調整

各段落の論理的なつながりを強化しました。例えば、第2段落では都市の環境問題に触れ、第3段落でその結果としての影響を示しています。

フィードバック

内容 (3/4)

主張は明確で、理由も具体的です。ただし、都市と農村の経済的な違いや環境問題の説明をさらに具体化すると、説得力が増します。

構成 (4/4)

序論、理由、結論の構成が整っています。読みやすく、論理の流れもスムーズです。

語彙 (3/4)

適切な語彙が使われていますが、一部不自然な表現 (“too dirty” など) がありました。これを修正しました。

文法 (2/4)

スペルミスや文法の誤り (“don’t afford” や “agricultur spaces”) が複数見られました。

総得点：12/16

文法ミスや語彙の改善により、より洗練されたエッセイになりました。説得力を高めるために、具体例やデータを加えるとさらに良くなります！

と、かなり詳しいコメントが返ってくる。これを相手生徒のレベルに合わせて修正して提供する。

単語イメージの画像化と、暗記補助

英検の難単語・難熟語を覚えるときにもフル活用した。

英単語帳を周回する中で、どうしても覚えられないものが出てくる。そんな時は、Chat GPTの出番だ。例えば、blare「大きな音を立てる」が覚えられなかった。そこで、Chat GPTに「blareという単語を覚えられないので、単語帳にある例文“The ambulance’s sirens blared as it sped through the neighborhood.”を参考にしてイメージを掴みやすいような画像を作ってください。また、暗記に役立つような情報をまとめてください。」とお願いした。すると、こんな返答が来る。

*Blare*は「大音量で鳴る」や「轟音を立てる」という意味を持つ動詞です。特に警報やサイレンの音が大きく響く様子を指します。日本語では「大音量で鳴る」や「鳴り響く」と訳されます。

語源

*Blare*の語源は中英語の"blaren"から来ており、「大声で叫ぶ」や「大きな音を立てる」という意味を持ちます。

似たような単語

Blast (ブラスト) :

意味：大きな音を出す、爆発する。

例：The horn blasted loudly. (ホーンが大きな音で鳴り響いた。)

Roar (ロア) :

意味：轟音を立てる、怒鳴る。

例：The lion roared loudly. (ライオンが大きな声で吠えた。)

Scream (スクリーム) :

意味：大声で叫ぶ、悲鳴を上げる。

例：The siren screamed through the night. (サイレンが夜通し鳴り響いた。)

Yell (イェル) :

意味：大声で叫ぶ。

例：She yelled for help. (彼女は助けを求めて叫んだ。)

派生語

Blaring (ブレアリング) : 轟音を立てる、大音量で鳴る。

記憶法（語呂合わせ）

Blare は「ブレア」と発音します。「ブレア」が「ブレーキ」と関連付けると、急ブレーキをかけたときの大きな音を連想して覚えやすいです。

また、「ブレア (*blare*)」が「ブレ（ぶれる）」と響きが似ているので、大きな音で周りがぶれる様子を思い浮かべると記憶に残りやすいです。

例文

The ambulance's sirens blared as it sped through the neighborhood. (救急車のサイレンが近所を走り抜けるときに鳴り響いた。)

画像生成

イメージ：救急車がサイレンを鳴らしながら近所を猛スピードで走り抜けているシーン。救急車のサイレンが明るく輝き、大音量で鳴っている様子。背景には住宅街が描かれている。これを基に画像を生成します。



この画像を Notion というアプリで表形式にしてまとめ、紙の英単語帳には「大きな音で救急車のブレーキがブレる」と書いておく。これで、一気に暗記が捗る。

単語	品詞	日本語訳	例文	画像	補足情報・語呂合わせ	added
覚えた redem	動詞	～を補う、引換券を商品（現金）に変える	The fantastic acting somewhat redeems the poorly written film.		ジャスティンビーバーのsorryでは、let me redeem myselfで、「俺のダメな態度めを許させてくれ」と使われていた。	2024年5月17日
覚えた wield	動詞	権力や影響などを行使する	You must wield your power with responsibility and respect.		カ・あるいは武器を持って、それを振りかざすようなイメージ、yellに音が似ている。何かを持って力を発せ出すイメージが強くいい。	2024年5月17日
覚えて detonate	動詞	爆発させる	The terrorists detonated the bomb from a remote location.		de(下に)+ton(音)+ate(動詞)	2024年5月19日
覚えた shriek	名詞	金切り声	She let out a shriek when she saw the ghost.		スクリームに発音が似ている(シリーズ)ギャーというイメージ。	2024年5月21日
覚えた overcast	形容詞	雲で覆われた、どんよりした	It was overcast this morning, but it is sunny now.			2024年5月21日
覚えた contempt	名詞	軽蔑、軽視	He has total contempt for his former boss.			2024年5月22日
覚えて defective	形容詞	欠陥のある	He returned the watch because it was defective.			2024年5月22日

授業プリントのコンテンツ

授業プリントを作成するにあたり、まずは自らの頭の中を紙や iPad のメモに書き出す。それを少しずつ整えていく際、参考書や他の教材の内容を参照し、最も生徒への伝達効率が良い方法を取ろうとしている。

そして、参考書や教材には載っていない内容を Chat GPT に相談する。例えば、「折り紙の技術が宇宙開発技術にも応用されている」という長文を読んだときには、関連する話題を Chat GPT に検索させ、ビジュアルサイズさせた。

Chat GPT からの応答は以下の通り。

折り紙の技術は、コンパクトに折り畳み、必要なときに簡単に展開できる特性を持つため、宇宙開発においても活用されています。以下はその具体例です：

ミウラ折りの応用

概要

ミウラ折りは、日本の物理学者・三浦公亮氏によって開発された折り方で、大きな平面構造を簡単に折り畳み、展開できる特性があります。応用例：太陽パネル：衛星の狭いスペースに収められるよう、ミウラ折りで折り畳まれたパネルが打ち上げられ、宇宙で展開されます。宇宙ヨット：日本の宇宙探査機「IKAROS」では、ミウラ折りをを用いた薄膜太陽帆を採用し、太陽光圧で推進しています。

折り紙技術を用いた設計

折り畳み技術：折り紙の原理を利用し、大型構造物を折り畳み可能にして、打ち上げロケットのスペースを節約。展開技術：折り畳まれた構造が宇宙空間で自動的に展開し、効率的に機能する。

未来の可能性

折り紙技術は、宇宙アンテナや探査機の設計、さらにロボット工学や医療分野にも応用されています。

提案する画像

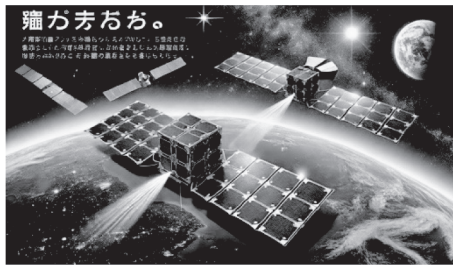
以下の内容をイメージした画像を作成します：

左側：ミウラ折りを利用して折り畳まれた太陽パネルが衛星に搭載された状態。

右側：宇宙空間で展開された太陽パネルが光を受ける様子。

キャプション：「ミウラ折りを利用した太陽パネルの応用例（左：折り畳み状態、右：展開状態）」

こちらが、ミウラ折りを利用した太陽パネルの応用例を示すイラストです。



内容は端的に要点をまとめたものであり、非常にわかりやすい。一方、画像のクオリティは思わず笑ってしまうほどだ。謎の言語が端っこに書いてあり、地球も2個存在している。これは、こちらがChat GPTに出す指示（プロンプト）が甘いために起こる現象である。これをベースに指示を出し、少し改良すると、以下ようになる。



これくらいのクオリティまで持っていければ、生徒たちにイメージを持たせるのに充分役立つだろう。

こちらの狙い通りの画像を生成するには、やはりこちらの指示出しの「言語化」作業の質が重要となる。「折り紙を使った宇宙開発技術の画像を出力して」ではなく、「折り紙を使った宇宙開発技術の画像を使って、生徒たちに長文の内容のイメージを掴ませたいです。そこで、折り紙の技術を宇宙開発技術に転用した例として有名な、ミウラ折りによって太陽パネルが折り畳まれた状態の人工衛星を描いて。背景は宇宙空間で、単一の地球を含むもの。リアルな質感で、衛星のアンテナや構造部品を含める。余計なテキストやキャプションは一切含めないでください。」と指示することができれば、同じ結果を得ることができる。

他にも活用方法はたくさんある。

長文中に出てきた単語の *diagonally* 「対角線上で」という単語が難しかったので、Chat GPT に相談し、細かく解説した。

語彙知識 *diagonally* 「横切って」 + *gonal* 「角」 + *ly* 「副詞化」 = 「角を横切って」 = 「対角線上に」

dia-「横切って」

diameter「直径」：円を横切る直線

diagram「図、図解」：情報やデータを視覚的に横切って示す図

dialogue「対話」：二人以上が互いに意見を交わし合う場面

diarrhea「下痢」：腸の内容物が速く流れる

diabetes「糖尿病」：体内の水分が排尿として過剰に通り抜ける

gonal「角の」

Triangle「三角形」 *Tetragon*「四角形」 *Pentagon*「五角形」 *Hexagon*「六角形」

Heptagon「七角形」 *Octagon*「八角形」 *Nonagon*「九角形」 *Decagon*「十角形」

Undecagon「十一角形」 *Dodecagon*「十二角形」

大学入試の頻出テーマである AI 関連の長文が出てきたときには、関連する話題などをまとめて表を作成させた。超専門的な内容ではないが、生徒たちが興味を持って調べ始めるには丁度良い。「AI に関する内容を、AI に調べさせて、この表を作らせたんだよ」というと、生徒たちも驚いていた。

AI に関する必修単語

英語	日本語	解説
Artificial Intelligence (AI)	人工知能 (AI)	人間の知能を模倣するように設計されたコンピュータシステム。
Machine Learning	機械学習	コンピュータがデータから学習し、自動的に改善する能力。
Deep Learning	ディープラーニング	人間の脳の構造を模倣したニューラルネットワークを使用する機械学習の一分野。
Neural Network	ニューラルネットワーク	人間の脳の神経細胞の働きを模倣する計算モデル。
Algorithm	アルゴリズム	特定の問題を解決するための一連の手順や計算。
Superintelligence	超知能	人間の知能をはるかに超える知能を持つ理論上の AI。
Cognitive Abilities	認知能力	知覚、学習、記憶、推論などの精神的プロセス。
Human Intelligence	人間の知能	創造性、感情、直感などの多面的な知能。
General AI (AGI)	汎用人工知能 (AGI)	特定のタスクに依存せず、広範な知的活動を行う AI。
Narrow AI	特化型人工知能	特定のタスクや領域に特化した AI。
Turing Test	チューリングテスト	コンピュータが人間のように知的かどうかを評価するテスト。
Singularity	シンギュラリティ (技術的特異点)	AI が人間の知能を超え、技術的進歩が爆発的に進む時点。

Automation	自動化	人間の介入なしにタスクを実行するプロセス。
Ethical Implications	倫理的影響	AI 技術が社会や個人に与える倫理的な影響。
Bias in AI	AI のバイアス	AI が偏ったデータに基づいて不公平な結果を出すこと。

AI に関する話題とその論点

話題・問題点	説明
AI と人間の知能の違い	AI の知能は特定のタスクに優れているが、人間の知能は感情や創造性など多面的。人間の知能は経験や直感に基づくが、AI はデータに基づく。
AI の利点と限界	利点: 大量のデータ処理、高速な計算能力、特定分野での専門性。限界: 創造性の欠如、感情理解の難しさ、倫理的問題。
AI の応用例	医療診断、交通管理、金融取引、自動運転車、パーソナルアシスタント (例: Siri, Alexa)。
AI の未来と懸念	未来: 技術的特異点 (シンギュラリティ) の到来とその影響。懸念: AI が職業を奪う可能性、プライバシー侵害、バイアスや偏見の増幅。
倫理とガバナンス	AI 開発における倫理的考慮、規制の必要性、公平性と透明性の確保。
AI による職業の変化	AI の進歩により、多くの職業が自動化される可能性があるが、新しい職業の創出や労働市場の再構築も期待される。
プライバシーの問題	AI によるデータ収集と分析が進む中で、個人情報の保護が重要な課題となる。
AI とバイアス	AI が偏ったデータに基づいて学習することで、不公平な結果を出すことがある。これを防ぐためには、データの質と多様性を確保することが重要。
人間と AI の協働	AI と人間が協力して働くことで、より効率的で効果的な成果を上げることができる。
AI の透明性	AI システムの決定プロセスが透明で理解可能であることが求められる。これにより、AI の信頼性と受け入れやすさが向上する。

④-3 デジタルツールを活用した新しい英語学習

デジタルツールとデバイス考察

英語学習は、新時代に突入している。前述の通り、Chat GPT や Notion といったデジタルツールは、最初に技術的な参入障壁こそあれど、一度使うと二度と手放せないような利便性がある。紙とペンだけで大量の情報を処理し、整理し、保存することは難しい。

これらのデジタルツールの利点として、「場所を選ばない」ことが挙げられる。Chat GPT や Notion はパソコンでしか使えない訳では無い。アプリをダウンロードしておけば、様々なデバイスからアクセス可能だ。私は自宅の MacBook をメインマシンに据えているが、同じアカウントを同期した職場のパソコンからも、自分のスマホからも見て編集することが可能であり、シームレスな作業環境となる。この「教員過剰考察」も、ベースは MacBook の Notion アプリで作成しているが、移動の電車などではスマホから閲覧・編集している。これ

により、「教材がないから勉強できない」「机と椅子がないから作業できない」という時代は終わったのだ。

しかし、こんな意見が付きものだ。「どうしても紙じゃないと嫌なんです」「スマホやパソコンは操作が難しくて慣れないんです」…どれも本当によく分かる。そんな人にも、うってつけのデジタルデバイスがある。

それが、私が愛してやまないiPadである。本校でも我々の学年から導入され、生徒も教員もiPadを持つ学校となった。今や地方の公立小学校でも全員がタブレットを所持している時代に、あろうことか渋谷の一等地にある私立高校が生徒には大量のプリントを配りつけ、教員にも会議のたびに大量の紙を印刷して配布して全員で読み上げているなんて知れたら、環境活動家に目をつけられ、あまりのデジタル・ディバイドっぷりに受験者数は大きく減少してしまっただろう。iPadの導入により少なからずペーパーレスが促進され、「渋谷のガラパゴス島」をほしいままにしていた本校にも変化の兆しが訪れたかに思える。しかし、生意気を言わせてもらえば、使いこなせている教員も生徒もまだまだ多くないのが現状だ。これは、iPadというデバイスの立ち位置が極めて難しいことに起因している。Appleの人間でさえ自信を持って方向性を打ち出してきていないのだから、我々ユーザーが戸惑うのも当然だ。パソコンのように重たい作業を何でもできるわけでもない、スマホのように持ち歩きやすいわけでもない。直感的に使用することができる紙とペンよりも重い。現状、iPadを活用できる人は「自分の作業環境についての言語化に長けた人」と「スマホゲームやYouTubeを大画面で楽しみたい人」だけに限定されてしまっているのだ。多くの教員にとってPDFビューアー兼文鎮と化し、生徒にとっては授業中の退屈な時間をソリティアで埋めてくれるゲーム機となっているiPadを見ると、とても悲しい気持ちになる。

iPadの強みは、その中途半端さがゆえに生じる「柔軟性」と、「手書き」にある。iPadは何でも「それなりに」こなすことができる。これまでも、iPadはパソコンのようにタイピングを伴うテキスト作業も、スマホのようにウェブブラウジングやゲームもできるデバイスとして一定の評価を得ていた。パソコンとスマホのベン図の中央付近に存在し、「それなりに」活用するにはもってこいの薄い板としての地位を築いていた。奥さんも私の強烈なセールストークに負けてiPadを購入したが、「自宅のちょっとした作業にぴったり。大きな画面で仕事のチャットをちょこっと返ししながら、Netflixを見るのが最高だ」と言っていた。仕事にも使うって言ったのに、地面師ばかり見やがって。もうええでしょう。

しかし、Apple Pencilという神ツールの登場とOSの進化により、iPadの価値は「ちょうどいい板」から「公私兼用の最強デバイス」として急激に上昇した。大きな画面を直接タッチできるという強みにペンが加わり、圧倒的な操作性と描画性を手に入れた。パソコンやスマホが持っていない、「手書き」能力により、直感的に手を動かして書くという「アナログ」の作業を「デジタル」ツールで行う事が可能になった。普通は両立し得ない二刀流を実現す

る薄いボディに最新の高性能チップも加わり、大谷翔平もびっくりのマルチプレイヤーとなった。Kindleで読書をしながら、Goodnotesのようなメモアプリに手書きをしながら、その本の要約動画をYouTubeで視聴しながら、NotionやWordにテキストとしてまとめながら、Chat GPTに添削させることができるのだ。このデバイスのどこが中途半端なんだ。iPad半端ないって。そんなん出来ひんやん普通。

このペンの登場により、学習ツールとしてのiPadが持つ「痒いところ」に手が届くようになった。教材をPDFで閲覧しながら書き込み、Chat GPTで拡大・収束・整理を行い、Notionにまとめることができるのだ。私は専属の最強家庭教師と超有能秘書を雇い、3人で脳みそをアップデートしながらクラウド上に保存している。もはや私本体よりもiPadの方が価値があるといっても過言ではない。日頃から「飯塚先生とはこの薄い板のことであり、私はこの板に入っている情報を出力するためのマシンである」とふざけて言っているが、あながち間違いではないのが恐ろしい。

デジタルツールは今後も更に飛躍的に進化していく。「自分にはできない」などと決めつけず、積極的に活用してみることをオススメする。誰だって最初は初心者だ。これだけ偉そうなことを語る私だって、Chat GPTやNotionやiPadガチ勢から比べれば赤子も同然だ。そして、この文章が読まれる頃には、今想像もつかないようなメソッドが出現していて、「何を当たり前のこと」と思われているに違いない。これからも最適な方法を模索しながら勉強を続けていきたいと思う。

アナログツールとの併用

ここでは、紙との併用から見えてきた学習効率と、生徒たちへの指導の変化について語りたい。

それぞれの強みと弱み

これだけデジタルツールの良さについて熱弁しているが、なんでもかんでも脳死でデジタルツールに頼れば良いというわけではない。

アナログな手法を取る方がベターだと感じる場面も確かに存在する。例えば、単語帳の「暗記」作業は紙の方が適していると断言できる。パラパラとめくりながら全体を俯瞰して見ることができ、自分の進捗を感じることができる。デジタルツールは何でもできてしまうがゆえに、脳のリソースがあちこちに割かれ、集中できないことも多い。iPadで単語帳を代用しようと思ったこともあったが、頻繁なスワイプで目が疲れ、通知のポップアップが気になるという弱点があった。努力の形が可視化できるのも良い。ボロボロになっていく単語帳に愛着が湧き、さらなるモチベーションにつながる。紙の単語帳は「単語しか載っていない」という無骨さで、自分と単語を真正面から向き合わせてくれる。

一方で、紙の単語帳は単語の画像化も、苦手単語のリスト化も、ランダムテスト作成もできない。純粋な暗記作業はガツガツと紙で行い、苦手単語に絞ってデジタルツールの力を借りると効果が倍増する。

問題演習は五分五分といったところか。GoodnotesにPDF化した教材を入れておく方が取り回しがきき、演習環境を選ばない。問題集や参考書とノートを開き、ペンを用意し、「いざ、やるぞ!」と、意気込むには、準備と意思決定のストレスが生じる。iPadは開けばすぐに勉強を始められる環境を作り出せる点で有用だ。ボタンひとつで左側に問題集や参考書、右側に書き込みができる状態のGoodnotesページを開くショートカットを作って使っていた。大した準備もせずに演習をすることができるので、取り掛かるまでの障壁が少ない。iPadさえあれば、いつでも快適な演習環境を作り出せる。

実際のマークシートの練習ができなかったり、画面をピンチインアウトする余計な動作の分紙で行う演習時間よりもブレが生じるのが弱点だ。この理由から、直前期は面倒でも必ず紙とペンを使用して本番の試験環境に合わせた。Apple Pencilに慣れ過ぎると、紙の上に書いた字もシャーペンをダブルタップして消そうとする。人間の慣れは恐ろしい。

ライティングの添削や面接練習などのアウトプットはデジタルツール一択だ。高額なお金を払って授業やネイティブとの英会話レッスンなどを受ける時代は終わった。今は月3000円のChat GPTへの課金でほぼすべてが完結する。

まとめとして、デジタルツールとアナログツールにはそれぞれ強みと弱みがある。これらをきちんと分析して、自分に合った最適な方法を探していく力が必要不可欠である。どちらに対しても食わず嫌いをせず、柔軟に対応していきたいものだ。

生徒に対するツール最適化指導の必要性

アナログとデジタルツールの使い分けは、生徒指導にも通ずるところがある。

自分の学力や授業、教材によって最適化された環境は異なるので、脳死でツールを選ばずに自分の学習環境を常に言語化して整備するように生徒たちに促してきた。

机の上に教科書とノートとプリントとiPadを置いて教員の話聞きながら黒板の板書をしていても、マルチタスク過ぎて何もしていないのとさして変わらない。「誰が、どのツールを、いつ、どこで、なぜ、どのように使うのか」という5W1Hが整理できていないままでは、どんなツールを使おうが非効率な状態なのだ。

例えば私の今年度の授業スタイルでは、演習と解説という2つの作業が存在する。iPadの小さな画面を分割しても、問題演習と解説の情報閲覧とノートテイキングを器用にすべてこなすのは現実的ではない。そこで、演習は原則紙で行わせた。思考のプロセスもすべて紙の上に残してもらおう。その紙を開きながら、授業プリントをiPadで閲覧してもらい、授業内のメモなどはすべて電子にして残させた。これにより、紙には「生徒自身の痕跡」が、iPadには「正解と

新しい情報」がまとまっていることになる。紙と iPad を見比べれば、自分に足りない箇所が一目瞭然だ。もういちど解き直せば、「授業を受ける前」と「受けた後」の進捗が分かるようになる。

受け手の生徒たちが自らの学習効率を最適化させる努力ももちろん必要だが、我々教員側も彼らに寄り添い、より良い学習環境を整備するためのサポートをする必要がある。

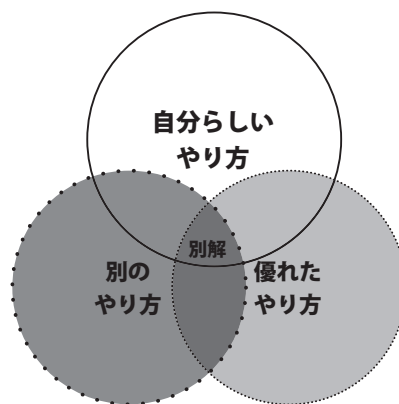
デジタルツールの進化は生活を変え、学びのスタイルも多様化した。そんな時代だからこそ、古き良き今までの学習スタイルの中からエッセンスを抽出し、置き換えられる場所とそうでない場所を精査する力が求められている。

⑤ 導き出された「別解」

教員という仕事、自分の立ち位置、ロールモデルの先輩たち、学校での授業構造、そして AI ツールの活用方法を考察しながら、徐々に自分という教員のキャラクターと目指すべき場所が見えてきた。

最近、(参考⑨)『起業家の思考法』という本を読んだ。私の大好きなマコなり社長が「師」と仰ぐ方の本であり、試しに読んでみた。そこでは、現代人に必要なのは、「別解力」であると紹介されていた。

「別解力」とは、「自分らしいやり方」「優れたやり方」「別のやり方」のベン図が重なった場所にある。



自分らしいやり方

自分の経験、知見、強み、夢中になれること、価値観などを反映した「自分ならではのやり方」。

優れたやり方

大きい、多い、速い、高いなど、世の中に受け入れられるやり方。

別のやり方

優れたやり方とは異なり、自分の強みや価値観を無視してみたりするなど、固定観念を脱するやり方。

別解力

自分で問題や課題を発見し、その答えのない問いに対して自分の持っている知識や経験を活用して、自分なりの答えを見出していく力。

別解は才能ではなく、思考と行動と習慣に基づく要素の組み合わせである。3つの要素のうち、どれか1つだけ、あるいは2つの掛け算だけでは、変化の大きい時代には対応できない。3つの要素すべてをかみ合わせて、自分なりの別解を探していくことが圧倒的成果につながるのだ。

ここで、自分の別解を考察してみる。

自分らしいやり方

言語化スキルの活用

効率重視のスタイル

デジタルツールとアナログツールの併用

プレイヤーとしての視点の提供

優れたやり方

AIなどの「英語力」活用

予備校・参考書などといった質の高いコンテンツによる「教える力」活用

先輩など、他の先生方の「教員力」の模倣など

4技能重視によるバランスの取れた授業

別のやり方

授業や学校という構造の考察

「漫才力」と「ラジオ力」のミックス

「論理的納得感」と「感情的納得感」のバランス調整

生徒からの評価が高い方法を模索・採用するメタ的な視点

私なりの「別解」

今よりも更に「ニンを出すこと」

「ニン」とは、芸人言葉で「人となり」を表す。兄弟漫才師が兄弟を押し出したネタをやり、男女コンビが男女間の違いを活かしたネタをやるように、自分の持っているキャラや強みを押し出すことだ。

私は先輩3人を含めた他の人をコピーすることはできない。私の良いところや強みを消してしまうことになるからだ。私の「ニン」は私にしか出せない。

細かくて理屈っぽい私の「ニン」は、AIやデジタルツールなどと相性がいいし、大好きな

お笑いや麻雀といった他のさまざまな分野への考察と言語化作業によってさらに磨かれていくと思われる。

これまではどこか抽象的で一般的な「英語教員」という像をトレースしながら、少しずつ自分の型を模索してきた。いわば、「優れた」×「自分らしい」方法や、「優れた」×「別の」方法を実践してきたつもりだ。これからは、「自分らしい」×「優れた」×「別の」やり方を実践して別解を探っていきたい。

アクの強すぎる私の「ニン」をマイルドに調整していくためにも、自分という人間と教員との関係性をさらに考察して言語化しながら、自分の理想とする姿に近付いていけたらと思う。

第四章 今後の展望

1. ひとりの人間として

社会人2年目の終わり、本校に転職する際に言語化した自分の人生のテーマが2つある。改めてこのテーマについて考えてみたい。

●「自分の人生を使い果たし、誰かの人生にもいい影響を与えられる存在になる」

「はじめに」の箇所でも述べたが、教員という職業が抱える仕事は本当に多岐に渡る。その中では、自分が理想とする教員像、ひいては人間像がないと、目の前の有象無象のタスクに時間を奪われて1日が終わっていく。クタクタになって帰ってきたら、生きていくためのタスクに時間を奪われ、さらにクタクタに。1日の最後は失神するように眠りにつく。これでは、自分の人生を使い果たしているとは言えず、「使われている」状態であろう。

自分の人生を全うするため、まずはなりふり構わずベクトルを自分に向けていきたい。私のようなちっぽけな存在がいじれるツمامミ（変数）の大きさは決まっていて、いきなり大きな全体を動かすことはできない。それなら、自分がいじれるツمامミの中で最も身近な存在である「自分」を動かせば、自分の近くの環境や集団が少しずつ変わっていくかも知れない。裁量権を得て、大きなツمامミをいじれるようになって来たら、その時には力のベクトルを徐々に外に向けられたらと思う。

かなり抽象度が高くなってしまいが、今はこれでいいのだ。まだまだ若造の「今」でしかないことがある。目の前の小さなツمامミという具体に対して全力で取り組むことができない人間に、抽象的で大きなツمامミをいじることはできない。

●「自ら機会を創り出し、機会によって自らを変える」

これはオリジナルではなく、リクルートの創業者の江副浩正氏の言葉である。

思い返せば、大学受験をすると決めたときも、第1志望の大学を決めたときも、留学先を決めたときも、教員になると決めたときも、自分の腑抜けた根性と低い能力では、到底乗り越えることができなっただろう。私がやってきたのは、「周りの人間に見てもらおう環境を作り出し、環境によって自分を動かしてもらおうこと」だったのだと思う。

今回の英検受験でも、この言葉はとても役に立った。何かしらの言い訳をして諦めてしまいそうな気がしたので、生徒だけでなく、先生たちに宣言した。落ちたら恥ずかしくて死んでしまうかもしれない。そう思うと、どれだけ疲れた日でも机に向かうことができた。

そして、申し込みが始まるその日にクレジットカードで決済を行い、お金を払うことで自分を追い込んだ。28歳社会人男性にとってはあまりに高額な12500円。払ってしまったからにはやるしかなかった。12500円以上の価値を手に入れないと、私の貴重なお小遣いが報われない。ただ闇雲に勉強するのではなく、いろんな学びを得られるような時間を過ごそうと思うことができた。正直、他人のお金なら絶対に諦めていたと思う。

機会に恵まれるのを待っているようでは、いつまで経っても成長スピードが上がらない。教員という仕事は頻繁な人事異動もなく、年功序列制度が色濃く残る職場の一つだろう。だからこそ、自らアクションを起こし、理不尽を課して、プレイヤーとなり、評価される側の人間になっていくことの重要性が高まる。

仕事に限らず、「自分に理不尽を課し、それを乗り越えることで成長し続けていく姿勢」を貫いていけたらいいと思う。

2. 教員として

● 進路指導部として

進路指導部としての3年間は、「1周目」でしか味わえないような新鮮味や緊張感があり、充実しながらも後悔と反省の連続だった。これから先の「2周目」では、これまでの経験を活かしてもっと違うアプローチができるはず。

備忘録として、私が今考える、「こんなことができたらいいな」を残しておきたい。ひとりの現場の教員から見た感想であり、批判やマニフェストの類ではない。

① 進路・学習対策的なアプローチ

大テーマ：「再現性」を高める

青山学院大学の駅伝部が、正月の箱根駅伝で連覇を達成した。この11年で8回目の優勝であり、箱根駅伝の常勝軍団として君臨している。その圧倒的強さは批判の対象となることもしばしばだ。例えば、「箱根駅伝ばかり強くても、他の駅伝ではそこまで結果を出していない」「全国から有望な選手を大量に集めているんだから、優勝したって何も不思議ではない」といった類の批判が散見される。

しかし、青学の原監督を含めたスタッフや選手たちの努力は間違いなく「本物」である。特に、原監督の手腕は目を見張るものがある。もともとお世辞にも強豪校とは言えなかったチームを立て直し、常勝軍団にまで育て上げた背景には、様々な要因がある。タイムだけでなく、「チームにフィットするか」を重視したスカウティング、選手のキャラクターや能力に合った柔軟な指導、外部コーチを招聘してのトレーニングメソッドや健康管理による怪我の予防システムの確立、選手中心の自主的なチームビルディング、緻密に計算された戦略分析、そして選手たちのコンディショニングを加味した完璧な区間配置。他校の指導者たちも懸命に追いつこうと努力しているが、そのどれもが一線級であり、青学を倒すのは容易ではない。今年度の3大駅伝のうち2つを快勝した勢いそのままに箱根初優勝を目指した國學院大學も、10分近い差をつけられて完敗した。そして、最近では原監督のメソッドが確立され、まさに「円熟期」を迎えている。メディアの露出も多い原監督がいない日が増えている一方、コーチや選手たちが自主的に質の高いトレーニングを行っているようだ。原監督も、近い将来の監督退任を示唆する発言があった。

しかし、これからも青学の強さは続いてくと感じる。原監督が築き上げた体系的なシステムは、原監督というカリスマの存在に依存しない、圧倒的な「再現性」が特徴だからだ。この「再現性」こそ、私も3年間仕事をする中で、意識し続けた観点である。

進学実績や生徒・保護者の満足度といった「成果」と呼ばれる部分において、教員や生徒の個人の力量に依存する状態は解決せねばならない課題である。例えば、特定のメンバーが情熱と時間を大量に投下して成り立つ仕事が多く存在してしまえば、そのメンバーが抜けたら再現できない。「この子はどこを受けても合格してくるだろうな」という少数の生徒ばかりが難関大に進学する状態は喩えれば「ガチャ」であり、毎年回していれば極端に悪いときも出てきてしまうだろう。

もちろん、毎年学年のスタッフが違ったり、入ってくる生徒の学力だって一定ではない。学年ごとにキャラクターがあり、その彩りの豊かさこそが学校の魅力だ。しかし、「上履きの色が異なると、違う学校に来ているようだ」という状態は、学校として保護者から期待されている「成果」の観点でいえば、決して望ましくないといえる。「この学年の、このクラスの、この担任」でしか出せない成果なら、本質的にはあまり価値がない。

ある程度のラインまでは誰でも再現できるような環境と状態を作り上げたら、そこから各個人の差を出していければいい。例えば、3人チームを作るとき、能力値が100 / 50 / 30のチームより、能力値60 / 60 / 60のチームの方が安定して力を発揮する。

強い「個」に依存しないシステムの構築のために、3つのアプローチについて考察してみる。

①-1 ストック情報の整理と共有システムの構築

教科や学年間でノウハウが蓄積されていない箇所が存在する。進路通信などがまさにその

例で、「データ」ベースがないと、各教員の「伝承」ベースでの仕事となってしまうため、再現性が低い。

「仕事は探す時間が9割」と言われる。よほど新規の企画を立ち上げない限り、事前準備としてこれまでの取り組みを「探す」作業に多くの時間を費やしがちである。情報が整理整頓されていない状態では、探すだけで多くの時間が溶け、作業に充てる時間が減ってしまうのだ。結果的には0から新しく作り直すか、クオリティの低い焼き増しが完成するかがオチである。

そこで、「ストック情報」の整理が重要だ。ストック情報とは、「繰り返し見る可能性がある」情報のことである。「ここを見れば、〇〇に関する情報がすべて手に入る」という場所を作り、ストック情報として保存していくシステムができると、無駄な時間は劇的に減っていく。昨年度作成された「進路・学習対策ガイドライン」は、まさにこの先駆けである。

教材や考査、実施要項、スライドや資料など、場所も形式も作成者もバラバラなストック情報をまとめるのは容易ではない。そこで、デジタルツールの出番だ。

①-2 デジタルツールとデバイスの積極的活用

ストック情報の蓄積がうまくいかない大きな原因の1つが、アナログツールによる管理が行われてきたことだろう。数年前までは各自がパソコンで資料を作り、それを紙に出して仕事をしていた。保存場所もシステムも構築されてきていなかったのも、各部署や学年によって様々な仕事のスタイルが確立されていったのだ。

今はiPadというデバイスによって、ペーパーレス化が進みつつある。資料の閲覧が可能になり、Teamsというツールで情報のストックが少しずつ進んできた。しかし、まだまだ課題もある。Teamsは資料保管庫であるが、全く中身が整理されていない。これまで紙で行ってきたことをPDFにすげ替えただけであり、散らかっている箇所も少なくない。ストック情報はストックすることが目的ではなく、いつでも取り出せるようにするのが目的だ。結局PDFを探すのに時間がかかってしまっているのは、問題の本質的な解決には至っていない。

英検の箇所でも触れたが、iPadの用途もまだまだ浸透していない事が多く、PDF閲覧専用の文鎮にしてしまうのもあまりにもったいない。AIなどがどんどん身近になっていく中で、デジタルツールを使いこなすことができるデバイスを使いこなすスキルは必要不可欠となる。無理して何でもかんでもやろうとすると失敗するが、食わず嫌いをしているのはもったいない。活用している人たちの実践例などをシェアするシステムを構築していきたい。

①-3 構造の検証と整備システム

仕事は人間がするものであり、ミスだって起こり得る。そんなときに、「〇〇さん、気を付けましょう」では意味がない。たしかにヒューマンエラーはその当人に過失があり、言い訳が許されるものではない。仕事として対価を貰っている以上、個々人が最大限努力するのが

義務である。しかし、ヒューマンエラーをその本人「だけ」の過失として考えているうちは、いつまで経っても改善されることはない。

トヨタ自動車の「人を責めるな、仕組みを責めろ」という言葉はあまりにも有名である。仕組み作りはリーダーレベルの人がやるべき仕事であり、私のような若手が注力すべき話ではない。しかし、個人レベルでも行えることはたくさんある。例えば、私は定期考査等での「体裁ミス」をやってしまいがちだ。どれだけ丁寧にチェックしたつもりでも、傍線部を引くべき箇所があと1単語足りなかったり、解答用紙のカッコが1つ足りなかったり。生徒がしたミスを減点するくせに、作問のミスは試験中に時間を奪って口頭でさせるのは大罪だ。そこで、自分なりの試験作成フローチャートを作成し、それにチェックを入れるようにしたところ、このミスは格段に減った。自分の「几帳面さ」「丁寧さ」というスキルを信用していないからこそ、その弱点を補う「仕組み」を信用した。作成手順、ありがちなミスの羅列、納期までの流れ、他の先生への添削のお願いなど。自分のこれまでの経験をマニュアル化してストック情報にしておけば、可能な限りのヒューマンエラーを防ぐことができる。マニュアルを作る作業の面倒さは一瞬だが、その効果は長く続くため、回収できる投資なのだ。

重要なのは、このマニュアルを常に更新していくことである。ミスを起こさない構造化をして、それを自分と他人の目から検証していく整備システムが揃えば、「ミスをしないように気をつけなきゃ」という無意味な意識に脳のリソースを割かなくて済む。

各個人の努力や意識に頼らず、構造を検証して整備していくシステムづくりこそ、まさに、再現性を高める工夫ではないかと思う。

こういった環境を整えることにより、私たちができる仕事はもっと効率的で生産的になるはずである。

自分も新しい学年に配属される前に、この3年間の良かったところの再現性を高めるべく、ストック情報を整備し、構造化・仕組み化を進めるためのマニュアル作成作業などを進めていこうと思う。

② 英語という教科からのアプローチ

大テーマ：「一段上」のレベルへ

本校の英語レベルは数年前と比べても飛躍的に向上していると思う。「入口」＝入学時に設けた英検や入試というハードルを乗り越え、生徒たちは3年間の英語学習をスタートさせる。1年時から英語を中心とした学習スタイルが提案され、多くの授業や講習を受講する。その結果、1年生の段階で高校卒業レベルとされる英検2級に多くの生徒が合格し、準1級を目指す長い旅路へと足を踏み入れる。英語が決して得意ではない生徒たちも、3年生の夏前には2級を取得する。8割以上の生徒たちが英検2級以上を取得し、「出口」＝進路にも好影響が出てきた。結果的に、難関私大と言われる GMARCH レベルの大学への合格者数が上昇し

てきている。

数年前、それこそ倉敷学年が始まる頃には、準1級を取れば「難関大学合格間違いなし」の扱いであったが、近年のレベルの上昇により、準1級は「難関大学挑戦への登竜門」の立ち位置となっている。もはや、2級は「全員が早い時期に取って当たり前」であり、英語が得意な生徒にとっては「準1級に受かって当たり前」の時代となった。この傾向は年々顕著になり、そのうち「全員が早い時期に準1級に受かって当たり前」になっていくかもしれない。現に、倉敷学年では2級に9割以上の生徒が合格しており、準1級合格生徒数は過去最高の70名に迫っている。決して「英検の取得＝高い英語力を持つ」という証明にはならないにせよ、この数値は一定の評価に値するだろう。

一方で、まだまだ伸びしろがある。数年間単位で時間と労力をかけ、学年の殆どの生徒が2級に合格する学校になった。いよいよ、準1級の合格100名という大台、そして「英検1級合格者を（複数人）出す」という新たな目標が見えてくるフェイズに入っているのだ。

このフェイズに到達するためには、今行っている取り組みをさらに洗練させ、「一段上」のレベルを目指して努力していくことが必要不可欠となる。闇雲にでも努力量を稼げば時間が解決してくれる2級と違い、準1級や1級には戦略と戦術を兼ね備えた体系的な取り組みが必要となる。再現性の高いシステムの構築により、生徒や教員の個人の努力に依存しない状態を生み出せるはずだ。

②-1 英語学習のロードマップの提示

高校生活の3年間は、何かを成し遂げるにはあまりに短く、何も成し遂げないにはあまりに長い。3年間という限られた時間の中で一定の成果を獲得するには、戦略的な思考が必要不可欠である。部活、勉強、課外活動、何気ない日常…多くの生徒にとって、英語を学習する時間も労力も有限である。

しかし、英語の学習は多岐に渡り、何から始めていいのか分からない生徒も多い。英単語暗記と英文法理解とリーディング・リスニング・ライティング対策と定期テストと模試と英検をすべて並行して伸ばそうとするのは不可能に近い。

そこで、戦略的で効率的な英語学習のロードマップを提示し、生徒1人ひとりがレベルに合わせて適切な学習を行えるような仕組みを提示したい。それぞれの生徒の目標にあったゴールに対しての具体的な道筋が見えれば、「モチベーション」などという抽象論に終始しない指導が可能になるだろう。

英語の学習を戦略的に行っていく過程には、「英語力の向上」という直接的なメリットだけでなく、間接的なメリットが存在する。それは「何事にも道筋を立て、ゴールから逆算する思考」を獲得することである。英語のみならず、他教科の学習、ひいては人生にも必要不可欠なスキルを身につけてもらいたい。

3年間の英語学習ロードマップという「マクロの視点」と、有用な手段やテクニックといった「ミクロの視点」を揃えた資料を作成してみようと思っている。

②-2 英検を含めた試験への環境整備

英語学習ロードマップのひとつの指標として、英検が大きな役割を果たす。普段の授業や学習そのものを目的にして努力を継続していくのは難しい。「試験」という一定の枠で評価されることで、結果を基にモチベーションを高めたり、学習指針の再調整をしていくことが可能になる。

本校では英検の受験こそ義務化されているが、勝ち筋が見えない勝負ほど苦痛なことはない。レベルがあまりにかけ離れた試験を受けたところで、「難しかった」と思うだけで、具体的なアクションプランにつながりにくい。繰り返しになるが、闇雲に受けて受かるのは2級までで、高校生で準1級に合格しようと思うと、綿密な戦略と戦術に基づいた学習が必要不可欠だ。多くの生徒が自分に合った戦略と戦術を持ち、勝ち筋を見出しながら受験する仕組みがあれば、仮に結果は不合格だったとしてもネクストアクションにつながり、「意味のある」試験となる。

英検講習や面接対策などの各種サポート体制が存在しないわけではないが、もっと洗練させることは可能だろう。まずは大枠の英語学習ロードマップ、そして英検への詳細なデータやガイドラインを作成することで、より「効果の高い」施策や環境整備につながるはずだ。英検総合コンサル制度、個別コーチング、テーマ別の英検講習やアラカルト講習、二次面接対策、添削練習など、やりたいことは多い。

私は、多くの生徒が英検準1級を「当たり前」に取ることができる学校にしたい。時間はかかるかもしれないが、1級を目指す生徒にも十分なサポートを与えられるような環境となっていくだろう。

●「英語学習者」兼「英語科教員」として

① 英語学習者として

この文章を執筆するきっかけともなった小西先生のマルタ研修記のあとがきには、「自分なりに英語学習に取り組んできたが、まだまだ自分の英語力が足りないということを実感した」という旨の記載があった。

大変失礼ではあるが、私の中に渦巻くこのモヤモヤとした感情も、似た類のものなのだと思う。「あのレベルの人でも、自分と同じように感じるのだ」という安堵感と、「あのレベルの人でも、なおも英語学習を続けていくのだ」という半ば絶望に近い感情も無視できない。

少なくとも私は、1級に向けて学習を積み重ねてきたものの、受験英語の延長線上にある

テクニックを駆使して「攻略できる試験」に合格しただけのことだ。私が手に入れたのは、喉から手が出るほど欲しい「圧倒的な英語力」という氷山のうちの一角にすぎない。

それでもなお、私にできることは、少しの戦略と戦術を武器に、膨大な学習をこなしていくことなのだと思う。英検1級への挑戦を通し、これからも様々な形で英語を学習していく覚悟が決まった。確固たる「英語力」を築くため、あの手この手で英語を学んでいく過程を自分の身で検証し続けていきたい。

その手段の1つとして、資格試験を通し、プレーヤーになる機会を持ち続けていけたらと思う。英検では狙っていたスコア（CSE2800）が出せなかったのが、これからも受験を続けて行きたい。今は英単語検定1級にも興味があるし、難化したと言われている TOEIC も TOEFL も大学生のときのベストスコアを更新し、少しでも成長していることを数値に残したい。

最終的には、海外研修や旅行で培った英語力を試してみたい。次の海外研修の引率が楽しみだ。奥さんとの海外旅行は…円安が少しでも改善してくれることを祈る。

② 英語科教員として

上述したように、自分もまだまだ現役の英語学習者のひとりである。人に教える立場であるが、自分も学び続け、教わる立場なのだ。プレーヤーとして「評価される側」の経験を積み、今度はそれを「与える側」として生徒たちにも還元していければいい。

先述したように、他教科と違い、英語は言語である。自分より英語ができる人間はごまんと居るし、それが自分の生徒に居ても全く不思議ではない。生育環境によっては、教員より英語そのものをうまく扱える生徒は存在するだろう。ただ、それを言い訳にはならないのだ。思春期の学生を40人1部屋に集めて50分拘束し、自分の話を聞かせる立場の「プロ」であるからには、我々は研鑽を続けなければならない。AIや映像授業に取って代わられることのない、価値のある存在でなければならないのだ。英語そのものを学習し続けながら、その教授法も常にアップデートしていく必要がある。

そこで、「授業」をどんどん変化させていきたい。授業コンテンツそのものの充実、お笑いという「ネタのクオリティ」を上昇させるように努力することは当たり前だ。先述したように、「受け手に合わせた調整」や「授業構造への考察」というメタ的な視点への研究以外にも取れるアプローチはないだろうか。

お笑い芸人は劇場では袖と言われる幕の横から、他の人のネタを大量に見るそうだ。漫才師だってコントを見るし、ベテランだって若手を見る。面白いものも、面白くないものも目に入れながら、自分の面白いという感性を磨き上げていくのだろう。これは、やはり教員にも当てはまるのではないか。今までは同教科の授業ばかり見に行っていたが、これからは許される限りで他教科の先生の授業を見てみたい。自分の授業に応用できる技術はあるか探し

てみれば、きっと発見があるだろう。もちろん、自分の授業も見てもらうことで、色々な意見をもらうことができる。

進路指導部としての展望の箇所でも述べたが、再現性を高めるには、結局1人ひとりの教員の授業の質を高めていく以外にないのだ。余裕のない新人の先生方や、仕事の裁量権が増えてくる中堅～ベテランの先生方にとっては、授業に対する研究の時間を大量に投下していくのはなかなか難しい。私のような年齢の人間から、少しずつ授業に対する姿勢と研究の輪を広げていけたらいいなと思う。具体的な方法やシステムを作ることができたら、皆で自分の哲学をむき出しにして、ぶつけ合いながらも高め合うことができる、素敵な時間が待っている。

おわりに

2024/12/7

28歳の等身大の人間として、そして1人の教員として、「考えている」ことをできるだけ具に書いたつもりである。勢いに任せて突っ走って書いてみたが、読み返してみると誠に恥ずかしい言葉ばかりである。こんな駄文を誰に頼まれるでもなく、わざわざ世に解き放ってしまった。正直死ぬほど恥ずかしいし、書き終えた今でも辞退しようかと迷っている。自分自身に対して誰よりも腹立たしく思っているし、それなのに、どこか期待している。1人で勝手にアツくなって、冬期講習に学年で唯一手を挙げた。自らの首を絞めるかのごとくカッコつけて命名した、「難関大 英語攻略」が2週間後に迫っている。暑苦しい講習になることは間違いない。

稚拙極まりない文章を一瞬でも読んでいただいた方、そして外苑春秋に関わるすべての方に感謝したい。

2024/12/31 追記

あれから4週間の間に書きたいことが増えてきたので、加筆と修正を行った。何日も徹夜してテキストを完成させ、冬期講習を無事に終えることができた。M-1では令和ロマンが連覇の偉業を成し遂げた。今年は最高の年末を迎えられそうだ。

2025/1/13 追記

さらにこの数週間で書きたいことが増えてきてしまい、またも大幅な加筆と修正を行った。共通テストを終えた生徒たちへの最終講義である、「私大対策テストゼミ」が迫ってきた。「英文法・語法ファイナルチェック」という授業をする予定だ。

受験生たちには失礼かもしれないが、どんな授業にしようか考えている今、楽しみで仕方

がない。どうせまた徹夜するんだろうな。

2025/2/19 追追追記

この一か月でさらにいろんなことが起きたため、加筆と修正を行った。自分は来年度進路指導部所属ではないことが分かり、高比良くるまはオンラインカジノ疑惑で謹慎になってしまった。この文章ははたして人の目に触れることができるのか、いささかの不安に苛まれている。

2025/3/22 追追追追記

さらに一ヶ月が経過し、進路指導部として最後の仕事である「進路研究会」も終わり、来年度に向けて席替えも行われた。本稿を提出する日が迫っているため、様々な先生に本文をお読みいただき、最終の加筆と修正を行った。改めて、関わっていただいたすべての方に感謝したい。

参考資料

① 執筆のきっかけ

『マルタ共和国 教員海外研修報告』外苑春秋 小西智也教諭

② 進路通信への没頭のきっかけ

【絶対やめろ】大人が書いてはいけない文章 TOP10

https://youtu.be/0QEXaUsrC5s?si=uca_uOdkG6oLcDWY

③ 倉敷学年 進路通信 オンライン版

三年間掲載してきた進路通信のバックナンバーを Web ページで限定公開し、保護者の方にもご覧いただいた。学年の先生方全員に執筆をお願いした、「二年生になる君たちへ」「三年生になる君たちへ」「拝啓 18 歳になる君たちへ」もぜひご覧いただきたい。

<https://dandelion-pruner-83c.notion.site/1bcc682da9c94fcaa7701e66250fed12>

④ 英検ホームページ

公益財団法人 日本英語検定協会

<https://www.eiken.or.jp/>

⑤ 英検 CSE スコア

<https://furuenglish.com/>

⑥英検 1 級満点講師 一ノ瀬先生

【2024-2】英検 1 級 結果発表！

https://youtu.be/_3C6RV3-_Ilg?si=OuVWX90EbF7rggWE

⑦サイト Atsueigo

Atsueigo.com | 英語でグローバルを切り拓く

<https://atsueigo.com/>

⑧お笑いへの過剰考察をした、この文章のインスピレーション

『漫才過剰考察』辰巳出版社 著：高比良くるま

⑨「別解力」へのアプローチを説いた本

『起業家の思考法』ダイヤモンド社 著：平尾丈

オススメの参考書やサービス

単語：『単熟語 EX 準 1 級・1 級』ジャパントイムズ出版

圧倒的収録語数と的中率。『パス単』が有名だが、断然こちらをオススメする。

要約：『英検合格のための要約問題 予想問題集』GAKKEN 著：竹岡広信

ネイティブの模範解答が優秀。参考書としての親切さには欠ける。

意見論述：『英作文問題完全制覇』ジャパントイムズ出版

意見論述文対策はこれ一択。

問題演習：『過去 6 回 全問題集』『直前 1 週間 英検 1 級予想問題ドリル』旺文社

基本的には過去問を使って演習すべき。ドリルは旺文社という公認の出版社が出しているものであり、少し難しい。過去問を解き切った後のトレーニングにおすすめ。

面接：『二次試験・面接 完全予想問題』旺文社

実際に出題されそうな問題がまとまっており、モデルアンサーも優秀。解答を覚えるのは適していないが、求められているポイントが明確である。

Chat GPT 有料版

全人類、迷ったら課金して欲しい。月 3000 円で、最強のコーチを雇う感覚である。毎日

100円だと思えば、ジュースを買うお金を我慢すればいい。

本文注釈

※1 漫才スタイル

べしやり型 ブラックマヨネーズ・さや香など

漫才コント型 和牛・真空ジェシカなど

大喜利型 霜降り明星など

システム型 ミルクボーイなど

フリースタイル マジカルラブリーなど 今年はラパルフェも話題となった。

ちなみに、コントも大好きである。漫才は「お喋り」、コントは「お芝居」がベース。あまり意識せずに見ていると違いが分かりにくい。高比良くるまは、著書『漫才過剰考察』の中で、「ラグビーとアメフトの違いを説明するくらい不毛な時間」と称していた。コントの例：東京03 バナナマン バイきんぐなど

漫才やコントといった、「ネタ」を作る道を経ていなくても、ラジオやバラエティで面白い芸人さんは存在する。同じように、授業以外の場面で才能を発揮する教員だっているし、授業がとてつもなく上手でそれ以外は苦手な教員だっている。それぞれの人達にそれぞれの考え方やスタイルがあって然るべきであり、何が上で何が下、といった上下関係はない。あくまでこの文章を書くにあたって、芸人さんにおける漫才やラジオとの関係性と、自分という教員における授業や他の業務との関係性を考察する上での1つの切り口である。

※2 ショートニット

ショートカットの女の子がニット帽を被っていたら可愛いよね、というどうしようもない由来のコンビ名。活動期間2週間弱で惜しまれつつ解散となった。

※3 CSE スコア

少し複雑な話だが補足しておく。

①素点に対して割り当てられるCSEスコアは、パーセンテージが一致しないことが多い。

例：リーディングの素点20/35(57%) → CSEスコア655/850(77%)

②各技能の中でCSEスコアが割り振られるため、素点の合計が同じでも、その内訳が異なればCSEスコアの合計も異なる。

例：リーディング25/35 ライティング44/64 リスニング19/27 素点合計88点

→ CSEスコアは682+656+685=2023(不合格)

例：リーディング30/35 ライティング39/64 リスニング19/27 素点合計88点

→ CSEスコアは719+626+685=2030(合格)

※ 4 演習記録

5月5日 2023年度第3回

リーディング	得点	CSE スコア	ライティング	得点 (Chat GPT の 採点)	CSE スコア
語彙穴埋め	12/25		意見論述	内容 6/8 構成 7/8 語彙 6/8 文法 6/8	
中文空所補充	4/6		合計	25/32(78%)	681/850(80%)
長文内容一致	10/10				
合計	26/41(63%)	662/850(77%)			

リスニング	得点	CSE スコア	技能	得点	CSE スコア
Dialogues	8/10		リーディング	26/41(63%)	662/850(77%)
Passages	4/10		ライティング	25/32(78%)	681/850(80%)
Real-Life	4/5		リスニング	18/27(66%)	674/850(79%)
Interview	2/2		合計	69/100(69%)	2017/2550(79%) : 不合格
合計	18/27(66%)	674/850(79%)			

6月16日2024年度第1回(新形式)

リーディング	得点	CSE スコア	ライティング	得点 (Chat GPT の 採点)	CSE スコア
語彙穴埋め	20/22		要約	内容 6/8 構成 7/8 語彙 6/8 文法 7/8	
中文空所補充	5/6		意見論述	内容 7/8 構成 7/8 語彙 7/8 文法 7/8	
長文内容一致	6/7		合計	54/64(84%)	717/850(84%)
合計	31/35(88%)	726/850(85%)			

リスニング	得点	CSE スコア	技能	得点	CSE スコア
Dialogues	9/10		リーディング	31/35(88%)	726/850(85%)
Passages	9/10		ライティング	54/64(78%)	717/850(84%)
Real-Life	3/5		リスニング	23/27(85%)	712/850(83%)
Interview	2/2		合計	108/126 (86%)	2155/2550(84%) : 合格
合計	23/27(85%)	712/850(83%)			

8月31日 2023年度第2回

リーディング	得点	CSE スコア	ライティング	得点 (Chat GPT の 採点)	CSE スコア
語彙穴埋め	23/25		意見論述	内容 6/8 構成 6/8 語彙 6/8 文法 6/8	
中文空所補充	6/6		合計	24/32(75%)	673/850(79%)
長文内容一致	10/10				
合計	39/41(95%)	762/850(89%)			

リスニング	得点	CSE スコア	技能	得点	CSE スコア
Dialogues	10/10		リーディング	39/41(95%)	762/850(89%)
Passages	9/10		ライティング	24/32(75%)	673/850(79%)
Real-Life	5/5		リスニング	26/27(96%)	789/850(93%)
Interview	2/2		合計	89/100(89%)	2224/2550(87%) :合格
合計	26/27(96%)	789/850(93%)			

9月7日 2021年度第3回

リーディング	得点	CSE スコア	ライティング	得点 (Chat GPT の 採点)	CSE スコア
語彙穴埋め	25/25		意見論述	内容 6/8 構成 7/8 語彙 6/8 文法 6/8	
中文空所補充	5/6		合計	25/32(78%)	681/850(80%)
長文内容一致	10/10				
合計	40/41(97%)	790/850(93%)			

リスニング	得点	CSE スコア	技能	得点	CSE スコア
Dialogues	9/10		リーディング	40/41(97%)	790/850(93%)
Passages	10/10		ライティング	25/32(78%)	681/850(80%)
Real-Life	2/5		リスニング	23/27(85%)	715/850(84%)
Interview	2/2		合計	88/100(88%)	2186/2550(86%) : 合格
合計	23/27(85%)	715/850(84%)			

9月14日 2022年度第1回

リーディング	得点	CSE スコア	ライティング	得点 (Chat GPT の 採点)	CSE スコア
語彙穴埋め	25/25		意見論述	内容 7/8 構成 7/8 語彙 6/8 文法 6/8	
中文空所補充	4/6		合計	26/32(81%)	707/850(83%)
長文内容一致	10/10				
合計	39/41(95%)	756/850(89%)			

リスニング	得点	CSE スコア	技能	得点	CSE スコア
Dialogues	10/10		リーディング	39/41(95%)	756/850(89%)
Passages	7/10		ライティング	26/32(81%)	707/850(83%)
Real-Life	4/5		リスニング	23/27(85%)	717/850(84%)
Interview	2/2		合計	88/100(88%)	2180/2550(85%) :合格
合計	23/27(85%)	717/850(84%)			

9月21日2022年度第2回

リーディング	得点	CSE スコア	ライティング	得点 (Chat GPT の 採点)	CSE スコア
語彙穴埋め	24/25		意見論述	内容 6/8 構成 7/8 語彙 6/8 文法 6/8	
中文空所補充	6/6		合計	25/32(78%)	678/850(79%)
長文内容一致	10/10				
合計	40/41(97%)	797/850(94%)			

リスニング	得点	CSE スコア	技能	得点	CSE スコア
Dialogues	8/10		リーディング	40/41(97%)	797/850(94%)
Passages	8/10		ライティング	25/32(78%)	678/850(79%)
Real-Life	5/5		リスニング	22/27(81%)	706/850(83%)
Interview	1/2		合計	87/100(87%)	2181/2550(86%) : 合格
合計	22/27(81%)	706/850(83%)			

9月29日 2022年度第3回

リーディング	得点	CSE スコア	ライティング	得点 (Chat GPT の 採点)	CSE スコア
語彙穴埋め	22/25		意見論述	内容 6/8 構成 7/8 語彙 6/8 文法 6/8	
中文空所補充	5/6		合計	25/32(78%)	681/850(80%)
長文内容一致	10/10				
合計	37/41(90%)	731/850(86%)			

リスニング	得点	CSE スコア	技能	得点	CSE スコア
Dialogues	10/10		リーディング	37/41(90%)	731/850(86%)
Passages	10/10		ライティング	25/32(78%)	681/850(80%)
Real-Life	3/5		リスニング	25/27(93%)	759/850(89%)
Interview	2/2		合計	87/100(87%)	2171/2550(85%) :合格
合計	25/27(93%)	759/850(89%)			

10月3日2023年度第1回

リーディング	得点	CSE スコア	ライティング	得点 (Chat GPT の 採点)	CSE スコア
語彙穴埋め	24/25		意見論述	内容 6/8 構成 6/8 語彙 6/8 文法 6/8	
中文空所補充	6/6		合計	24/32(75%)	674/850(79%)
長文内容一致	10/10				
合計	40/41(97%)	796/850(94%)			

リスニング	得点	CSE スコア	技能	得点	CSE スコア
Dialogues	10/10		リーディング	40/41(97%)	796/850(94%)
Passages	8/10		ライティング	24/32(75%)	674/850(79%)
Real-Life	4/5		リスニング	24/27(89%)	731/850(86%)
Interview	2/2		合計	88/100(88%)	2201/2550(86%) : 合格
合計	24/27(89%)	731/850(86%)			

10月4日 予想問題（新形式）

旺文社が販売している予想問題。過去問よりもやや難易度が高いと感じた。Amazonのレビューサイトを見ると同じような感想が散見されたので、割り切って本番が難化したときの練習として使用した。予想問題のため、『フルイングリッシュ』のCSEスコア予想ツールを使って算出したものを掲載する。

リーディング	得点	CSE スコア	ライティング	得点 (Chat GPT の採点)	CSE スコア
語彙穴埋め	19/22		要約	内容 7/8 構成 7/8 語彙 6/8 文法 7/8	
中文空所補充	5/6		意見論述	内容 7/8 構成 7/8 語彙 6/8 文法 7/8	
長文内容一致	6/7		合計	54/64 (84%)	717/850 (84%)
合計	31/35 (88%)	726/850 (85%)			

リスニング	得点	CSE スコア	技能	得点	CSE スコア
Dialogues	9/10		リーディング	31/35 (88%)	726/850 (85%)
Passages	5/10		ライティング	54/64 (84%)	717/850 (84%)
Real-Life	2/5		リスニング	18/27 (67%)	657/850 (77%)
Interview	2/2		合計	103/126 (82%)	2100/2550 (82%) : 合格
合計	18/27 (67%)	657/850 (77%)			

10月5日 予想問題（新形式）

リーディング	得点	CSE スコア	ライティング	得点 (Chat GPT の 採点)	CSE スコア
語彙穴埋め	21/22		要約	内容 7/8 構成 7/8 語彙 6/8 文法 7/8	
中文空所補充	5/6		意見論述	内容 7/8 構成 7/8 語彙 6/8 文法 7/8	
長文内容一致	4/7		合計	54/64 (78%)	717/850 (84%)
合計	30/35 (86%)	716/850 (84%)			

リスニング	得点	CSE スコア	技能	得点	CSE スコア
Dialogues	6/10		リーディング	30/35 (86%)	716/850 (84%)
Passages	6/10		ライティング	54/64 (78%)	717/850 (84%)
Real-Life	4/5		リスニング	18/27 (67%)	657/850 (77%)
Interview	2/2		合計	102/126 (81%)	2090/2550 (82%) : 合格
合計	18/27 (67%)	657/850 (77%)			

(※ 4) 演習結果まとめ

リーディング	① 2023 一回目	② 2024 一回目 新	③ 2023 二回目	④ 2021 三回目	⑤ 2022 一回目	⑥ 2022 二回目	⑦ 2022 三回目	⑧ 2023 一回目	⑨ 予想 問題 新	⑩ 予想 問題 新
語彙	12/25	20/22	23/25	25/25	25/25	24/25	22/25	24/25	19/22	21/22
中文	4/6	5/6	6/6	5/6	4/6	6/6	5/6	6/6	5/6	5/6
長文	10/10	6/7	10/10	10/10	10/10	10/10	10/10	10/10	6/7	4/7
合計	26/41 (63%)	31/35 (88%)	39/41 (95%)	40/41 (97%)	39/41 (95%)	40/41 (97%)	37/41 (90%)	40/41 (97%)	31/35 (88%)	30/35 (86%)
CSE	662/850 (77%)	726/850 (85%)	762/850 (89%)	790/850 (93%)	756/850 (89%)	797/850 (94%)	731/850 (86%)	796/850 (94%)	726/850 (85%)	716/850 (84%)

ライティング	① 2023 一回目	② 2024 一回目 新	③ 2023 二回目	④ 2021 三回目	⑤ 2022 一回目	⑥ 2022 二回目	⑦ 2022 三回目	⑧ 2023 一回目	⑨ 予想 問題 新	⑩ 予想 問題 新
要約	×	26/32 (81%)	×	×	×	×	×	×	27/32 (84%)	27/32 (84%)
意見	25/32 (78%)	28/32 (88%)	24/32 (75%)	25/32 (78%)	26/32 (81%)	25/32 (78%)	25/32 (78%)	24/32 (75%)	27/32 (84%)	27/32 (84%)
合計	25/32 (78%)	54/64 (84%)	24/32 (75%)	25/32 (78%)	26/32 (81%)	25/32 (78%)	25/32 (78%)	24/32 (75%)	54/64 (84%)	54/64 (84%)
CSE	681/850 (80%)	717/850 (84%)	673/850 (79%)	681/850 (80%)	707/850 (83%)	678/850 (79%)	681/850 (80%)	674/850 (79%)	717/850 (84%)	717/850 (84%)

リスニング	① 2023 一回目	② 2024 一回目 新	③ 2023 二回目	④ 2021 三回目	⑤ 2022 一回目	⑥ 2022 二回目	⑦ 2022 三回目	⑧ 2023 一回目	⑨ 予想 問題 新	⑩ 予想 問題 新
Dialogues	8/19	9/10	10/10	9/10	10/10	8/10	10/10	10/10	9/10	6/10
Passages	4/10	9/10	9/10	10/10	7/10	8/10	10/10	8/10	5/10	6/10
Real-Life	4/5	3/5	5/5	2/5	4/5	5/5	3/5	4/5	2/5	4/5
Interview	2/2	2/2	2/2	2/2	2/2	1/2	2/2	2/2	2/2	2/2
合計	18/27 (66%)	23/27 (85%)	26/27 (96%)	23/27 (85%)	23/27 (85%)	22/27 (81%)	25/27 (93%)	24/27 (89%)	18/27 (67%)	18/27 (67%)
CSE スコア	674/850 (66%)	712/850 (83%)	789/850 (93%)	715/850 (84%)	717/850 (84%)	706/850 (83%)	759/850 (89%)	731/850 (86%)	657/850 (77%)	657/850 (77%)

リーディング 大問別平均点	旧形式	新形式
語彙穴埋め	22.1/25(89%)	20/22(91%)
中文空所補充	×	5.2/6(87%)
長文内容一致	10/10(100%)	5.3/7(76%)
合計	37.3/41(91%)	30.6/35(87%)

ライティング 大問別平均点	旧形式	新形式
要約	×	26.6/32(83%)
意見論述	×	25.6/32(80%)
合計	24.9/32(78%)	54/64(84%)

リスニング 大問別平均点	旧形式・新形式
Dialogues	8.9/10(89%)
Passages	7.6/10(76%)
Real-Life	3.6/5(72%)
Interview	1.9/2(95%)
合計	22/27(81%)

平均点と CSE スコア	平均点 旧形式	平均点 新形式	平均 CSE スコア
リーディング	37.3/41(91%)	30.6/35(87%)	746.2/850(88%)
ライティング	24.9/32(78%)	54/64(84%)	692.6/850(81%)
リスニング	×	22/27(81%)	711.7/850(84%)
合計得点	85.1/100(85%)	104.3/126(83%)	2150.5/2550(84%)

- ①リーディングは問題数に変更があるため、新形式と旧形式を分けて算出。
- ②ライティングの要約は新形式のみ。意見論述は形式に変更がないため、新形式と旧形式を分けずに算出した。
- ③リスニングは形式に変更がないので全10回の平均値を算出。
- ④CSEスコアは形式を問わない共通指標なので新形式と旧形式を分けずに算出。

